みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

The Analysis of the Mayan Glyphs : Part 1, Naranjo

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004379

マヤ文字の分析 I
——ナランホ——

八杉佳穂*

The Analysis of the Mayan Glyphs: Part 1, Naranjo

Yoshiho YASUGI

Since the discovery of emblem glyphs by Heinrich Berlin, in 1958, and the reconstruction of the dynastic history of Piedras Negras by Tatiana Proskouriakoff, in 1960, the study of Mayan inscriptions has been advanced. The dynastic history of major sites has now been reconstructed, and the significance of the greater part of glyphs understood. However, it is still too early to say that the Mayan glyphs have been deciphered, since even the rules of glyphic usage are not well-known. A necessary first step is an analysis of the glyphs. In a series of this papers, I attempt to formulate rules of Maya glyphic writing, to study stylistic change, and elucidate dynastic history. The Naranjo texts are examined first.

The history of Naranjo is divided into three series by two intervals during which no stelaes were erected (Table 1). First all readable dates were extracted (Table 2) and arranged chronologically for each series to understand the over all dynastic history (Table 3). Next, calendrical glyphs were examined for variations and stylistic change.

The texts consist of a repetition of date and non-date glyphs. Those of series I are the simplest, and are therefore utilized as they stand. Those of series II and III were re-written into the linear forms for each date sentence or clause to facilitate the analysis of complex texts (Figs. 17, 18). In the analysis of each series, I tried to clarify dynastic history and discover synominous glyphs (*i.e.*, glyphic interchangeability). With respect to dynastic history, I discuss six persons having a close relationship

* 国立民族学博物館第4研究部

to the Caracol dynasty in the first series; two important persons and another possible ruler and their parents and consorts in the second series; and three rulers and their parents and consorts in the third series.

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．マヤ文字の一般的考察
Ⅲ．ナランホの文字資料
Ⅳ．テキストの分析方法
Ⅴ．暦の文字
1. 導入文字
2. 期間の文字
3. 補助シリーズの文字
4. カレンダー・ラウンドの文字
5. ディスタンス・ナンバーの文字
6. 期間の完了，記念の文字
Ⅵ．テキストの歴史的解釈と文字の分析
1. 第Ⅰ期
2. 第Ⅱ期
3. 第Ⅲ期
Ⅶ．おわりに

Ⅰ．はじめに

1958年に Heinrich Berlin がマヤの主だった遺跡には特有の文字，すなわち紋章文字 (glifos emblemas/emblem glyphs) があることを発見し，そして1960年に Tatiana Proskouriakoff がピエドラス・ネグラス (Piedras Negras) の王朝の歴史を再構成して以来，マヤ文字の理解は急速に深まってきた。何々王が何年何月何日に生まれ，何年何月何日に即位し，何年何月何日に死んだとかいった歴史の大筋はわかってしまった。マヤの王朝の歴史が文字から再構成されるほどだから，もう解読はほとんどなされたといえないこともない。実際わからない文字のないテキストもあるようになってきた。そのようなテキストをみると，マヤ文字は解読されて，もはや研究する必要はない，あったとしても落ち穂拾いにすぎないのではないかと思われることもある。しかし，そうしたテキストも，一つ一つの文字をとりあげていくと，決して解読されたとはいえないことがわかってくる。意味はわかるのであるが，どのように読まれたのかわからないのである。その意味も，正確な意味ではなく，この文字は名前を表わすとか称号を表わすにちがいないとかいった，おおまかな意味にすぎないことがほとんどである。たとえば王の名前でいうと，「嵐の空」王とか「楯ジャガー」王といった王が同定されているが，実際はそういったあだ名で呼ばれているにすぎないのである。実際どういう名の王であったかわからないのであるから，それはテキストの中のこの文字が名前を表わすということがわかっただけのことだといいかえてもよい。すべてが理解されたと考えられるテキストでさえ，以上のように，解読されたというわけに

はいかないのである。しかもそうしたテキストもわずかにすぎず，ほとんどは，テキストの一部が理解されているにすぎない。まったく内容の理解さえできないテキストも存在するのである。

マヤ文字は絵画的な文字である。それは表意的な文字といいかえてもよい。そうした文字の中にも表音的な文字があることはすでに認められている。しかし大多数は，表音文字である手掛りを得ることができない文字，しかし何らかの意味をもっているにちがいないと考えられる文字，すなわち表意文字である。だから王の名前を「楯ジャガー」のごとくあだ名でよばざるをえないのである。もっとも「楯ジャガー」のように，表わす文字が楯とジャガーから成り立っていれば，その名はあながちはずれているとはいえない。むしろ，もはや解読された文字に分類してもよい。楯とジャガーにそれにあたるマヤ語をあてて，たとえばパカルバラムのようにいいかえると，もっとたしかに解読されたようにおもえてくる。ところが，パレンケ (Palenque) のパカル王のように，楯 (pacal) を表わす表意文字が pa-ca-la という 3 つの表音文字で書き換えられたような例が見つかればよいが，そうでない場合だと，楯ジャガーとよぼうとパカルバラムとよぼうとどちらも同じである。ただ後者のほうが何となく解読されたようにおもえるだけのことで，証明力はかわらない。「楯ジャガー」のように，何を表わしているのかわかる場合ならいいが，これが何を表わしているのかわからない文字であると，たちまちあだ名さえつけようがなくなってくる。いきおい，A王とか Ia 王とかいった記号でもつけざるをえない。表音文字で書き換えてある資料に出くわしたらいいが，そうでないと，もはやお手挙げである。だからそうした場合，名を表わす文字ということがわかっただけで，たとえその文字が読めなくても，解読された文字とみなさなければなるまい。これは名前を表わす文字であり，読み様がないので，A王とあだ名をつけるといった注釈がついてひとまずその文字の解読は終了である。マヤ文字の資料をみわたすと，そこまで行き着いた文字は少なく，それゆえまだまだやるべきことは多いように思われる。

では何をやるべきか。マヤ文字の資料にはエジプトのロゼッタ石に相当するものはない。よくロゼッタ石と称せられるランダのアルファベットは，わずかに27の音節的表記文字と 3 つの例文にすぎない。(その例文中には 27 の文字以外の文字が 3 つ含まれているので，Landa は合計30の表音的文字を残したといいかえることができる。) 実際はロゼッタ石のような対訳テキストはないので，解読の方法は，Landa の残した文字が手掛りとなるものの，テキストそのものの研究とマヤ文字のもととなったマヤ語の研究以外にない。

解読にもっとも有効と思われるものは，テキストそのものの比較研究である。その第一歩は，文字がどのように使われているかを知ることである。文字の使われ方がわからないと，マヤ語との関係を考察することはむづかしい。逆にマヤ語の構造，特徴を知らなければ，文字の使われ方も浅い理解におわってしまう。文字は言語を反映するものであるから，両者は不可分の関係にあるが，まずもって，文字の使われ方を知ることは，解読作業に欠かせない基礎的なことである。そうした文字の使われ方は，これまで断片的に扱われてきたのみで，文字の使われ方を主題にしたものは，わずかに Hermann Beyer のチチェンイツァ (Chichen Itza) の碑文を研究したもの，ならびに彼の一連の論文を知るのみである。その彼の論文もいまでは時代おくれの観がある。

どのように文字が使われているかを知るためには，ある文字が何度も出現する資料，または，同一の内容をもった資料を扱う必要がある。文字の数が少なく，ある文字が一度しか出現しないようなテキストでは，その生起の環境に似たものがある場合なら手掛りはないとはいえないが，そうでなければ，文字の理解はおろか，文字の使われ方はわからないからである。

いま述べたことは，文字の意味の探究に重点をおいてみた文字の使われ方である。文字の使われ方という主題には，文字の形に関する問題もある。すなわち，どの要素がどこにつくかとか，どういう環境に生起するかなどである。それは，字形と配列の問題といってよい。それはもちろん，文字の意味と密接に関係しているが，両者は別々のものとして扱うことができる。すなわち，文字の意味や音を知らなくても可能である。マヤ文字の場合，字形や配列の問題は第II章で述べるようにおおよそながらわかっている。しかし，各遺跡や年代による違いなどはどうかというと，まだなにもわかっていないといってよい状態である。

では音や意味の問題にかかわってくるマヤ文字の構造はどうかというと，いいかえれば，それぞれの構成素のむすびつきの法則はどうかというと，これも未解決である。これは仮借であるとか，形声であるとかいえるということは，各構成素の音や意味がわかっているからであり，そうでないマヤ文字の場合，表意文字と表音文字の混合体系だといっても，その構造についてはいまだはっきりいうことができないのである。

そこで本シリーズでは，文字の使われ方の問題を解決するために，すなわち，形や配列の問題や文字の時代的変遷，地域的変化，文字の意味など，文字の分析に際しておこるさまざまな問題を考えるために，現在利用できるテキストをすべてにわたって検討しようとするものである。まず主だった遺跡のテキストを個々に扱い，最終的に

マヤ文字全体について考察する予定にしているのであるが，その手始めに，本論では，テキストの量が多い遺跡のうち，資料の刊行が終了したナランホ (Naranjo) の資料を扱うことにする。

Ⅱ．マヤ文字の一般的考察

マヤ文字の資料には，石や木や骨に彫ったものと，壁や紙に書いたものがある。彫ったものとは，具体的にいうと，石碑や祭壇，リンテル（まぐさ）などに彫られた文字のことであり，書いたものとは，絵文書や壁画，土器に描かれている文字のことである。材料が異なるため，書体が異なる。そこで，前者を彫刻体とよび，後者を手書体とよぶことにしたい。

そのどちらにもみられ，マヤ文字の特徴となるものを一言でいえば，絵画的な文字ということができよう。絵画的といっても，そこには具体的な象形文字と幾何的な文字がある。具体的な文字には，手や足や体を象った文字や，鳥や魚や鹿などの動物を象った文字や，人や神の頭（横顔）を描いたものがある。このうち頭（横顔）を描いた文字の多くは，それと自由に交替できる幾何的な文字をもつ。すなわち，マヤ文字には，字体は異なるが，同価な文字群がある。そこで前者を頭字体 (head forms, head variants, personified forms) とよび，後者を幾何体 (symbolic forms, geometric forms) とよぶことにする。この２つの字体がテキストのほとんどを占めているのであるが，まれに，人間や動物全体を描いた文字がある。それを全身体 (full-figure forms) とでも名付けておく。それはもちろん等価な頭字体，幾何体をもつが，ひじょうに限られた場合にしか用いられない。

頭字体と幾何体の形のうえでの関係は図１のようになろう。

(1)は形のうえで頭字体と幾何体の関係が認められない場合で，(2)はともに共通する要素をもっている場合，そのうち2-1は一部が共通するものであり，2-2は幾何体を頭文字体の構成要素としてとりこんだものである。(3)は幾何体の一部を変え，頭字体にした場合である。

マヤ文字のひとつひとつの文字は，物理的に区分された四角な文字枠（ます）のなかにおさまっている。ますには通常ひとつの文字がおさまっているが，２つから４つ（まれにそれ以上）の文字がおさまることがある。ますが，二分されたり，四分されるわけであるが，その区別は明瞭である。

ますが集まってテキストは構成される。テキストは文字ますに分割できるといいかえてもよい。テキストの読み順は，ふつう左右２つのますを対に，すなわち，２列を

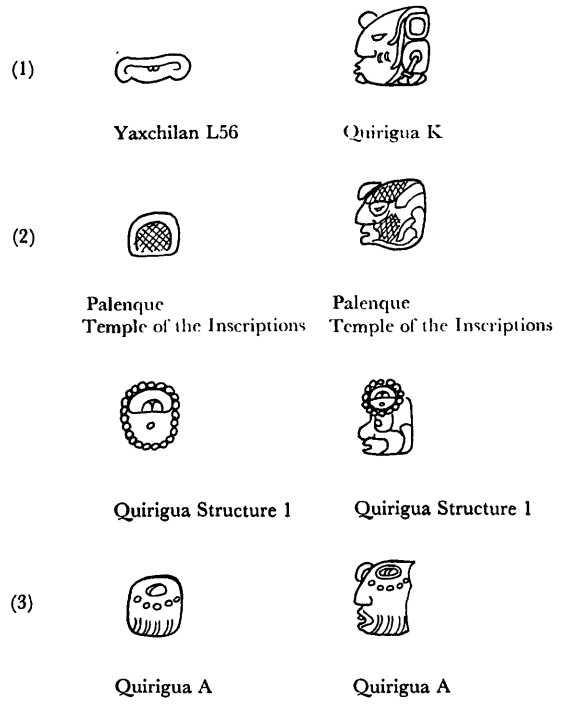


図1　頭字体と幾何体

対に上から下へ読み進む。

ひとつの文字はふつう大きな要素に小さな要素がいくつかついて構成されている。それらの構成要素を文字素(graphemes)ということにする。そして大きな文字素を主字(main signs)といい，主字について生起する小さな文字素を接字(affixes)ということにする。一般的に，主字の前におかれる接字は主字の上にも生起する。すなわち主字の前と上は同価の位置ということができる。これらについて言及する必要がある場合，それぞれ前接字，上接字ということにする。同様に主字の後と下は同等であり，接字はどちらにおかれても同価である。これらの接字を後接字，下接字ということにする。ここで注意しておかなければならないことは，主字と接字の区別は単に大きさの違いによる区別であり，意味の違いによる区別ではないことである。すなわち，主字と接字は交替しうる。といっても，その際字体の変化をともなうのがふつうである。

では意味の違いによる区別はあるのだろうか。それは，1つ1つの文字そのものの性格についての問題である。すでにいくつかの文字が読まれているが，それぞれの構成要素である接字や主字の関係が十分に理解されていないのである。たとえば，「ヤシュチラン」とか「東」とかいった場所を表わす主字に前置詞 ti を表わすと考えられる接字がついて1つの文字が形成された場合などをみると，マヤ文字には表句文字が存在することになる。こうした文字が果して問題ないのかということについては，文字の読み方という主題であらためてとりあげることにし，ここでは扱わないつもりである。

いまマヤ文字の書体や字体の区別や構成についてふれた。文字というものは言語を目にみえる形におきかえたものとみることができる。そこで，文字という枠組のなか

で，マヤ文字というものを考えておきたい。

文字を成り立たせる要素には形，音，意味の3つがあるとみてよい．そのあるなしにより，次のようにわけられる。

	音	義
(1)	+	+
(2)	+	−
(3)	−	+
(4)	−	−

(1)は漢字などの表語文字が考えられる。(2)はいうまでもなく表音文字である。(3)はいわゆる表意文字を分析した場合とみることができるかもしれない。が，文字というものは言語を前提にしているという定義にしたがえば，音をともなわないものは文字とみることはできない。そうすると記号とか印などが想定できる。(4)も同様文字とみることはできない。

一般的には上のようにいえようが，これをマヤ文字に応用してみると少し違った見方が可能である。(1)，(2)はすでに解読できた文字とみることができる。(1)は表語文字または表句文字であり，(2)は表音文字といえよう。ところが，一般的に文字は多義で，多読である。それを考慮にいれると，

	多読	多義
(1a)	+	+
(1b)	+	−
(1c)	−	+
(1d)	−	−

という場合が考えられる。(1d) は，多義多読を考慮にいれなかった(1)と同じである。その他は漢字にてらして考えてみても，ありうる組み合わせである。実際マヤ文字の場合でもそれぞれの例を挙げうる。たとえば (1a) の例では T 528 があてはまる[1)]。[ku] と読まれるし，暦の Cauac の文字，Haab とよばれる年の文字でもある。さらに，暦の Ch'en, Yax, Zac, Ceh の文字の主字としても T 528 は生起するので，多義多読の文字とみなすことができる[2)]。(1b) の多読一義の文字例としては，たとえば暦の文字が考えられる。ユカテクマヤ語で読んでいる暦の文字の構成とユカテクマヤ

1) T 528 は Thompson のカタログ番号を表わす [Thompson 1962]。
2) 文字の名は慣用的表記（古典ユカテクマヤ語の表記）に従い，必要に応じ，音声表記 [ ] を用いる。暦に関する名はつづりの最初を大文字にする。

語が一致しないことや，現在残っているマヤ諸族の暦のそれぞれの月や日の名が異なっていることを考えあわせると，同じ暦の文字でありながら，違った読みが許されていたものと推測できるからである。(1c) の一音多義は言語の同音意義語を反映したもので，たとえば，chac に「赤い」とか「大きい」とかいう意味があり，kan に「黄色」とか「貴重な石」とかいう意味があるが，それらの意味の違いが，同じ T 109 や T 281 の文字で表現されている場合である。このような考察はいまだなされていないので，文字をみるときはこうした可能性があるかないかをたえず注意しながらみなくてはならないであろう。そしてわかったものだけでもまとめてしめす必要があるであろう。

(2)の表音文字の場合もいくつかの音価をもつ文字がある可能性は十分ある。

次に(3)はどうかというと，意味はわかるが，まだ対応するマヤ語が不明な場合ということができ，この場合もうこれ以上進みようがない場合と，対応するマヤ語が見つかり，(1)に移行できる場合が考えられる。(4)はまだ解読されていない文字とみることができる。しかしマヤ文字のように装飾が多い文字体系の場合，単なる装飾文字も(4)に分類できる。いうまでもなく，それがあるなしで意味がかわらないことがはっきりいえる場合のみで，装飾がなんらかの機能があるとすると，装飾とみなしたのはまちがった見方となる。

いま文字を構成する要素とみることができる形・音・義のあるなしとマヤ文字の関係を考えた。これはいいかえれば，一字についての考察であった。文字は，一般的に，形が同じ場合同じ文字であり，形が違う場合は違う文字ということができる。しかしながら，上で述べたように，形が同じ場合でも違った意味に用いられることがあるし，形が異なる場合でも同じ意味に用いられることがある。文字の解読には，文字の比較が必要である。それはいまの場合，一字以上の文字の関係ということになる。それを考察すると次のようになる。

	形	音	義
(5)	同	同	同
(6)	異	異	異
(7)	同	同	異
(8)	同	異	同
(9)	同	異	異
(10)	異	同	同
(11)	異	同	異
(12)	異	異	同

(5)と(6)は形が同じであれば同じ文字であり，形が異なれば異なる文字であることをしめしたものであり，(7)，(8)，(9)は多義，多読について先にみたことと同じである。文字の比較のときに特に注意しなければならないのは(10)，(11)，(12)の場合である。(10)はたとえば，俗字と正字の例が考えられる。マヤの場合であれば，頭字体と幾何体の例がこれにあたる。(11)，(12)は同音異字，同義異字であり，これが交替可能であれば，借音，借義である。いわゆる判じ絵 (rebus fashion) というのは，(11)を利用したものとみることができる。(11)，(12)で注意したいのは，異なるものでも，その程度により，利用価値に差が生じるのではないかということである。つまり，同音異字といっても，たとえば漢字でいうと，「観，刊，館，官」という場合のように，まったく違った文字の場合と，「かえる」や「わかる」に使う「代，変，換，替」のように，よく似た意味をもつ場合が考えられるからである。さらに，漢字をかなでも表記できるように，(11)のうちのひとつに，表意文字を表音文字で書きかえてあらわすことがありうることをつけくわえておかなくてはなるまい。特にマヤ文字のように，表音文字と表意文字の混合体系の場合，実際この書きかえの例はすでにいくつかみつかっているので，これは大切な点であるように思われる。

マヤ文字の使われ方を知る一つの方法は，そうした書きかえられた場合を特に考えることのように思われる。もちろんある要素が上につくとか下につくといったことを知ることも大切である。それはこのシリーズのひとつの主題である。特に時代的変遷や地域的な差をみる場合，それはおもしろい主題となる。しかしながら文字の使われ方という問題でもっとも興味深いのは，どの文字とどの文字が交替可能であるかとか，この文字には三つの異なった使い方があるとか，この文字はこういった環境においてしか生起しないとかいったことをさぐることである。そうしたことを考える材料として，本論ではまずナランホのテキストを選んでみた。ナランホの場合，これまでその王朝の歴史を研究したものはあるが，充分ではない。それゆえナランホのテキストを使ってマヤ文字の使われ方を考察するのであるが，王朝の歴史についても充分紙面をさくつもりである。

Ⅲ．ナランホの文字資料

ナランホはグアテマラのペテン州の北東部に位置し (17°07′5″N; 89°15′7′W) [Morley 1937–8: Vol. II: 21]，文化的にはティカル (Tikal) やワシャクトゥン (Uaxactun) を中心にした中央部に属する遺跡である [Adams & Culbert 1977: 8]。遺跡は A, B, C, D の 4 つのグループにわけられているが，ティカルなどに比べ

ると，その規模や重要度からは第2級に分類される遺跡である [MORLEY 1937–8 Vol. IV: 249; MARCUS 1976: 47]。

ナランホの学問的調査は1905年に始まる。その年，ピーボディ博物館の第7回目の探検隊として，Teobert Maler がナランホを調査した。Maler は32の石碑と階段碑文の記述を1908年に出版している [MALER 1908]。それをもとに，Morley は碑にあらわれる日付の研究をおこなった [MORLEY 1909]。日付の解釈にいくつかのまちがいがみられるが，はやくも石碑建立に2つの休止期があることで，3つの活動期にわけられることをみいだしている。Morley はその後1914年，1921年，1922年に数日ずつナランホを訪れ調査し，それらは1937-8年に報告された [MORLEY 1937–8]。1962年になって Richard E. Adams がナランホに行き，いくつかの石碑の型をとるまで，その後，文字資料の面からみると，30年あまりの空白がつづく。60年代末，Ian Graham が文字資料を集め始め，それは Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions として結実する。このような調査から，ナランホには，文字の資料としては，これまでのところ41の石碑と1つの祭壇と1つのリンテル，それに階段碑文がみつかっている。ここでは，それらのひとつひとつをテキストということにする。

Ⅳ．テキストの分析方法

テキスト（碑や祭壇など）の奉納日（ほとんどの場合テキストの最終日付に一致するが，祭壇1のように，未来についてのべたテキストもあり，その場合もちろん最終日付ではない）により，3つの期間にわけることができる。それぞれを第Ⅰ期（王朝），第Ⅱ期（王朝），第Ⅲ期（王朝）とよぶことにする（付表1）。

まずそれぞれのシリーズ（期）のテキストにある日付をできうるかぎりとりだす。そして日付を年代順にならべる。ここまでの作業で，その歴史的な枠組がつかめるが，まず日付の文字の使われ方，すなわち，文字素の変化や位置の違い，時代的な変化を考察することにする。

次に，それらの日付に関する文字列，すなわち文または節を線形に書き改める。これはそれぞれの碑，すなわちテキストを独立に扱うのではなく，ナランホのテキスト全体をわかりやすい形に並べかえる作業である。この作業により，それぞれのテキストを越えた時代の流れや同時日の節や同似節の発見が容易になる。もし同じ日が一度以上出現すると，それはナランホの歴史にとっては重要な日だと判断することができる。同一の文字が使われていると，同一の内容をしるしたものであることは自明である。しかしマヤのテキストの場合，まったく同一の文字が使われることは少ない。そ

れは繰返し生起する句または節の場合にもあてはまる。どこかに違いがあるのだけれども，同一の内容をしるしている可能性が高い句や節が発見される。その場合，表現の仕方を変えたとみることができる例や，同価の異なる文字を使ったとみるほうが妥当な例がある。その判断はむづかしいこともあるが，もしまったく違った内容をしるした資料に同じような交替の例が見出されれば，それは同価の文字の交替例と判定を下すことができる。こうした作業を行なうには，すでに述べたように，同時代に多くのテキストがある遺跡の資料を扱うのが得策である。というのも資料の数が少ないと，文字の生起数が少なくなるばかりでなく，同一の内容を扱った資料も少なくなる。逆に同時代に多量のテキストがあるなら，文字の生起数が多くなるばかりでなく，同一内容を扱った資料にでくわす可能性が高くなる。ナランホの場合，同時代のテキストがおおいパレンケ (Palenque) やヤシュチラン (Yaxchilan) などに比べても，テキストの量ではひけをとらない。繰返し出現する文字列は結構おおいので，変化をおうことができる。もちろん同時代の他の遺跡のテキストも参考にしなければならない文字もおおい。『マヤ文字の分析』と題した本シリーズは，対象とする遺跡のテキストを個々に扱って，最終的に全遺跡の相互関係を考察するつもりではあるが，ナランホの場合，カラコル (Caracol)，ティカル (Tikal)，ウカナル (Ucanal)，マチャキラー (Machaquilá) のテキストと共通する日付または文字をもっているので，少なくとも共通する部分は本論では考察に含めたい。それはナランホの王朝を扱う場合には必要であるからである。この第2の作業で王朝の歴史とともに，暦の文字以外の文字の使われ方を考察することになる。

V. 暦 の 文 字

暦の文字と称する文字には次のものがある。

(1) イニシャル・シリーズ (Initial Series; IS と略す) と称されている文字群。これには，次の文字が含まれる。

(a) 導入文字

(b) Baktun, Katun, Tun, Uinal, Kin とそれぞれよばれる期間の文字

(c) 260日暦の文字。260日暦は13の数字と20の日が組合わさってできる暦であるので，20の文字がある。これを日の文字とよぶことがある。20の日の名は，Imix, Ik, Akbal, Kan, Chicchan, Cimi, Manik, Lamat, Muluc, Oc, Chuen, Eb, Ben, Ix, Men, Cib, Caban, Etz'nab (Etznab と書くことの方がおおい)，Cauac, Ahau である。

(d) 365日暦の文字。365日暦は20日が一単位の月が18に，5日しかない月 Uayab が加わりできる365日が1周期の暦である。19ある文字を月の文字とよぶことがある。月の名は，Poop (Pop と書くことの方がおおい)，Uo, Zip, Zotz' (Zotz と書くことがある)，Zec (Tzec と書くことの方がおおい)，Xul, Yaxkin, Mol, Ch'en (Chen と書くことの方がおおい)，Yax, Zac, Ceh, Mac, Kankin, Muan, Pax, Kayab, Cumku, Uayab である。

(e) 補助シリーズ (Supplementary Series) とよばれ，通常 G, F, E, D, C, X, B, A と分類されている。文字なおEはDの係数が20以上のときにしかあらわれない。

(2) 通常 IS の次に生起する一連の暦の文字で，セカンダリー・シリーズとよばれることがある文字群。

(a) 前後の日付を関連づけるディスタンス・ナンバー (Distance Number ; DN と略す) とよばれる文字群。Kin, Uinal, Tun といった期間を表わす文字に数字がついている。ここでの期間の文字は IS の期間の文字とほぼ同じであるが，Kin の文字の場合のように，まったく異なることもある。なおふつう期間の文字には DN 特有の接字がつく。

(b) DN の前にはふつう導入文字が生起する。

(c) DN の次には，ふつう DN を足すか引くかを示す文字が生起して，

(d) 260日暦と365日暦で表わされる日付が生起する。因みに，この2つの組合わせはカレンダー・ラウンド (CR) とよばれる。

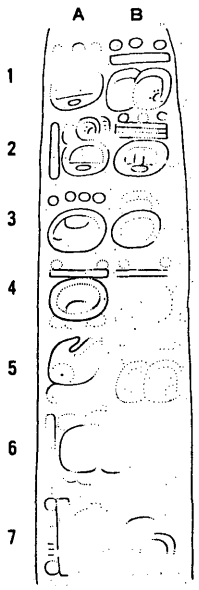
以上のような文字が生起して日付の枠組が構成される。すなわち，マヤのテキストは，日付 (CR) ―その日付に関する文または節―(DN 導入文字)―DN―(DN を足すか引くかを指示する文字)―日付 (CR) という繰返しにより構成されている。

その他の暦に関する文字としては，

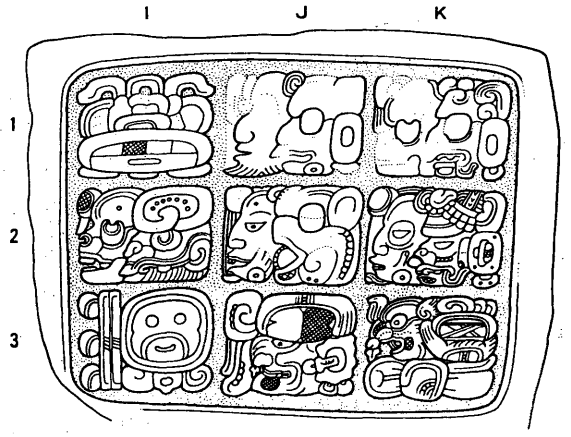
(3) 区切りのいい期間の完了の文字，すなわち，5 Katun, 10 Katun, 10 Tun などの終了時に出現する文字，

(4) 10周年記念とか20周年記念とかの，ある日を記念してそれからくぎりのいい年月がたったことをしるす文字で，マヤでいうと 1 Katun 記念とか 2 Katun 記念とかをしるした文字がある。

付表2はナランホの各テキストにあらわれる日付を計算したもので，それをシリーズごとにわけて年代順にならべかえて示したものが付表3である。括弧でくくられている数字または月日は計算から出したことを意味している。月日の文字ではっきり識別できないものもかなりあるが，そのほとんどは前後関係から補える。しかしなかに



石碑25
8.5.18.4.0 7Ahau 3Kankin
[615年]



階段碑文
HS
9.10.10.0.0 13Ahau 18Kankin
[642年]

図2　IS の 文 字

表1　IS をしるした碑の数

シリーズ	碑の数	ISをしるした碑の数
I	6	2
II	15	13(+1)
III	13	4

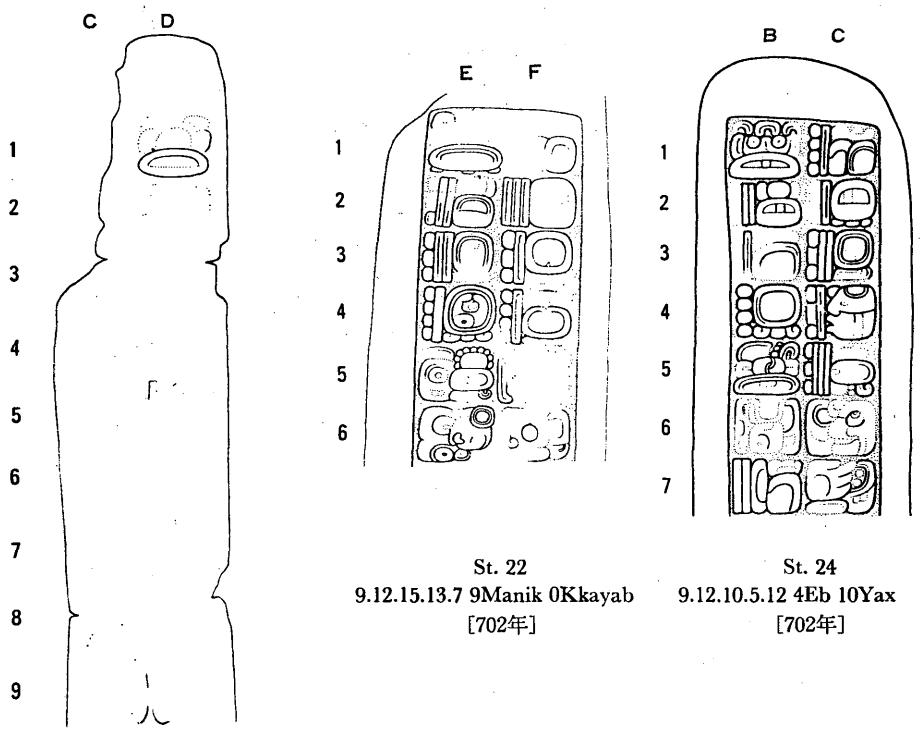
は確実でない日付もあり，それには？をつけた。そしてとくに疑問と思われるものは??とした。この他にも不明な日付がある。

図2には IS の文字群を Graham & von Euw [1975] ならびに Graham [1978] を利用して，生起そのままの形であげた。石碑の名前とともに，IS がしるす日付と奉納された年をそれぞれの下にしるした。

全体の流れと個々の文字の使われ方について述べる。

第II期の石碑20はおそらく IS を記しているにちがいないが，損傷が激しく判読できないので，括弧の中にプラス1としておいた(表1)。

表1から，IS は第II期で好まれたことがわかる。時はおりしもマヤ文明の絶頂期であり，Teeple が統一期，Proskouriakoff が装飾期と名付けた期間である [Teeple 1930; Proskouriakoff 1950]。文字の標準化が進んだ時代であるとともに，IS 表



St. 1
[702年]

St. 22
9.12.15.13.7 9Manik 0Kkayab
[702年]

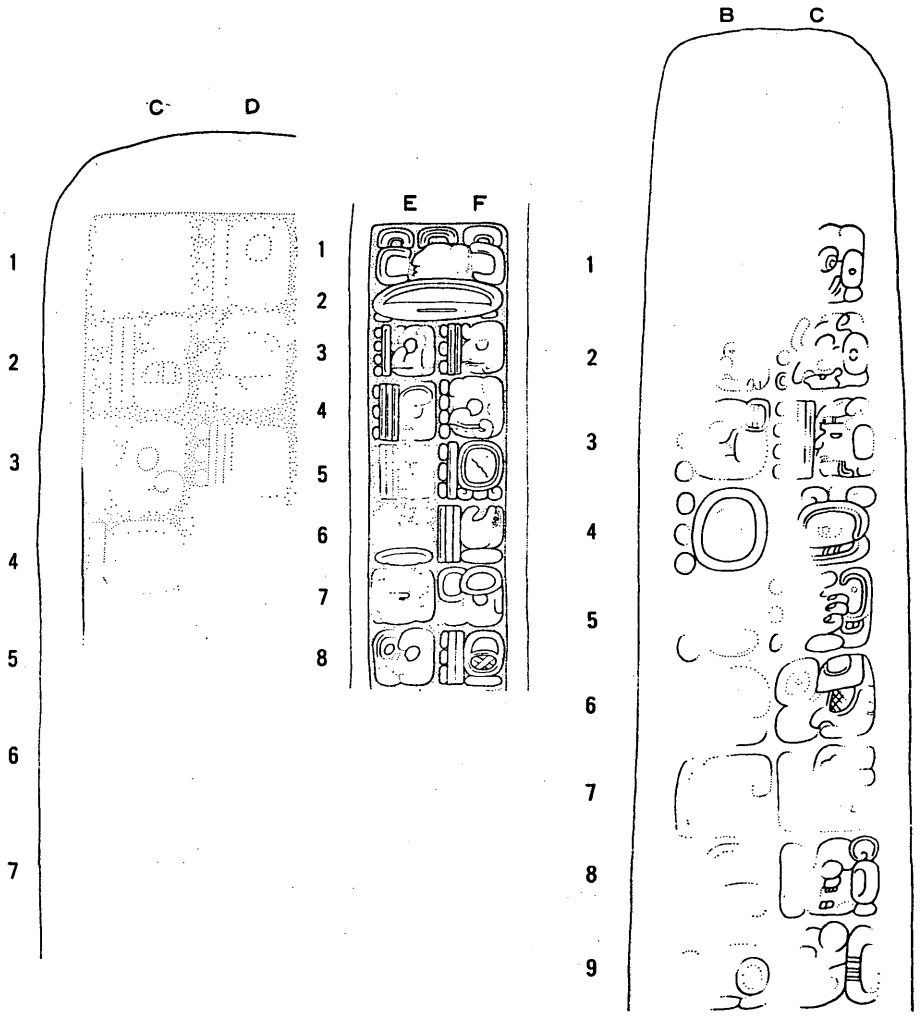
St. 24
9.12.10.5.12 4Eb 10Yax
[702年]

図 2-2

記が好まれた時代でもあり，それがナランホの碑文にも反映している。

マヤ暦で 9. 16. 0. 0. 0 (751年) をすぎると，反乱期または激動期とよばれ，これまで文字をもたなかった弱小都市にも碑が建てられるようになるのであるが，暦に習熟したためであろうが，長たらしい IS 表記をすて，より簡単に暦を表記するようになる。ナランホでもそれは如実にあらわれており，IS 表記は第Ⅲ期では13石碑中わずか4本にすぎなくなっている。暦を簡単に表記するということは，いいかえれば，冗長性をへらし，碑に少しでも多く内容のあることをしるし残そうとしたということである。スペースを節約する工夫を，ここにあげた例のなかにもみることができる。すなわち，補助シリーズの中間に節をはさみ込んでいる。石碑13と石碑8では A と365日暦の間 (F8–E9, D7–D8)，石碑14では F と260日暦の間 (D7–C8) に2～3文字が生起している。残念ながら，はさみ込まれた節の意味が不明なので，はっきりしたことはいえないが，これは，Kubler がいうように，同一日にふたつの異なる節をできるだけ簡略にしるそうとした工夫のように思われる [Kubler 1973]。

表2は補助シリーズの文字の出現を簡単にしるしたものである。



St. 21
9.13.1.3.19 5Cauac 2Xul
[706年]

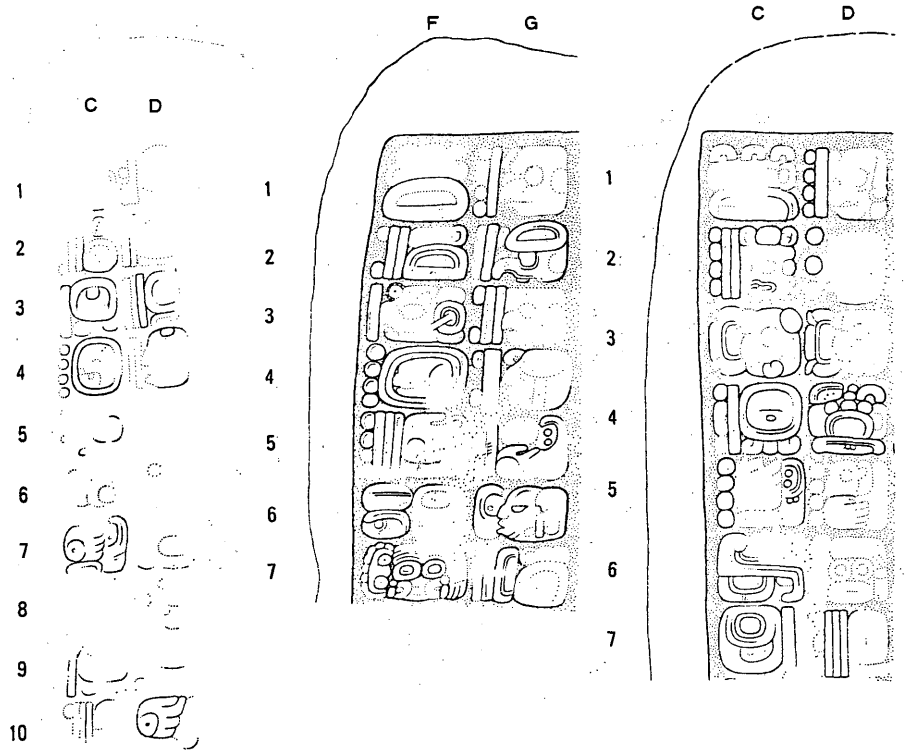
St. 23
9.13.18.4.18 8Etz'nab 16Uo
[711年]

St. 2
9.14.1.3.19 3Cauac 2Poop
[713年]

図 2-2

ナランホでは714年になってはじめて，標準形ともいえる形が出現するのであるが，その年にはAとBの文字を反対に配列したもの（石碑29）もあり，あたかもまだ標準形の採用にとまどいがあるように思える。しかしそれ以後は標準形に則って書きしるされている。もっとも石碑14のように，GFがAのあとにきて，2つの文字が生起したのちCRがくるといった規範から逸脱したものもあるようになる。

Dの係数は，月令を表わすので，計算から検証できる。実際にしるされている値



St. 3
9.12.10.5.12 4Eb 10Yax
[713年]

St. 29
9.12.10.5.12 4Eb 10Yax
[714年]

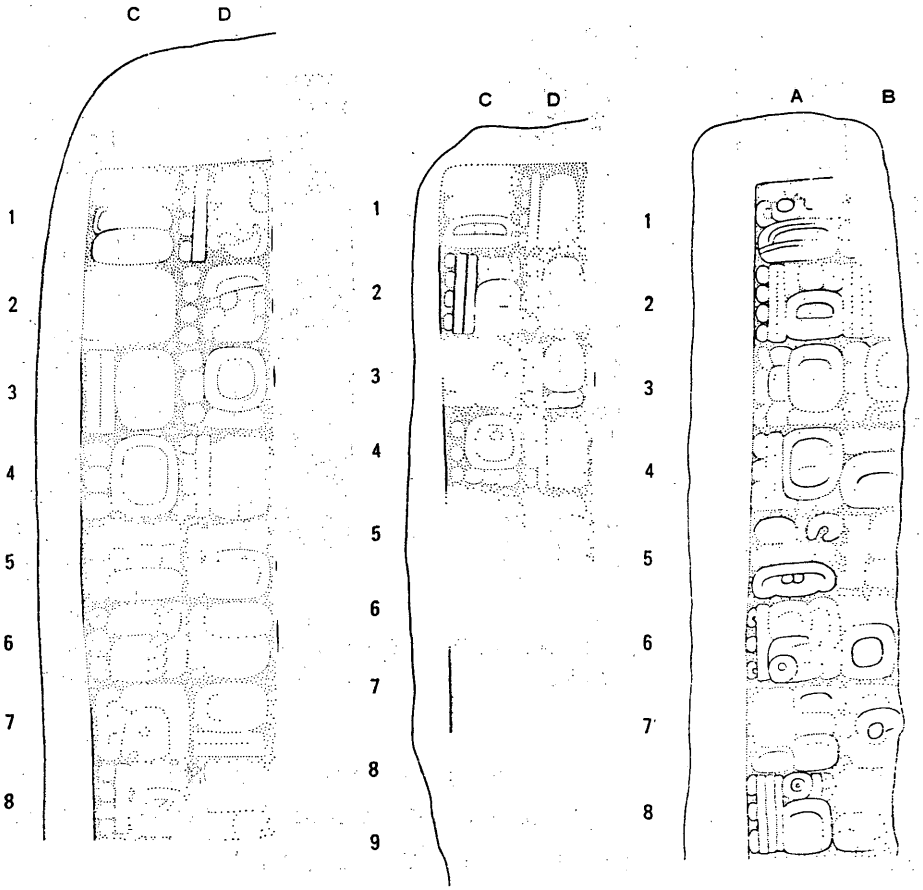
St. 30
9.14.3.0.0 7Ahau 18Kankin
[714年]

図 2-3

表 2　補助シリーズの文字の生起順

年代	補助シリーズ	石碑
642	(260日暦) G9	HS
702	(260日暦) 5ED 1C (365日暦)	22
	(260日暦) G4 F 18D 1C 10A (365日暦)	24
711	(260日暦) G8 F 15D C X A (365日暦)	23
713	(260日暦) G F D C 10A (365日暦)	2
714	(260日暦) G4 19D 6C X1 A B (365日暦)	29
714	(260日暦) G9 F 4D 4C X4 B 9A (365日暦)	30
721	(260日暦) G4 F D 3C X B 10A (365日暦)	28
726	(260日暦) G9 F D 6C X1 B A (365日暦)	18
780	(260日暦) G9 F 7ED 4C X4 B 9A ++ (365日暦)	13
790	D 2C X3 B 9A G2 F ++ (260日暦) (365日暦)	14
800	(260日暦) G9 F 1ED 2C X B 9A +++ (365日暦)	8
807?	(260日暦) G F 3ED C X B A ++ (365日暦)	6

((260日暦) は260日暦の文字の生起する場所，(365日暦) は365日暦の文字の生起する場所，＋は暦以外の文字をそれぞれ表わす)



St. 28
9.14.4.7.1 1Imix 9Zip
[721年]

St. 31
9.14.4.12.7 3Manik 15Mol
[721年]

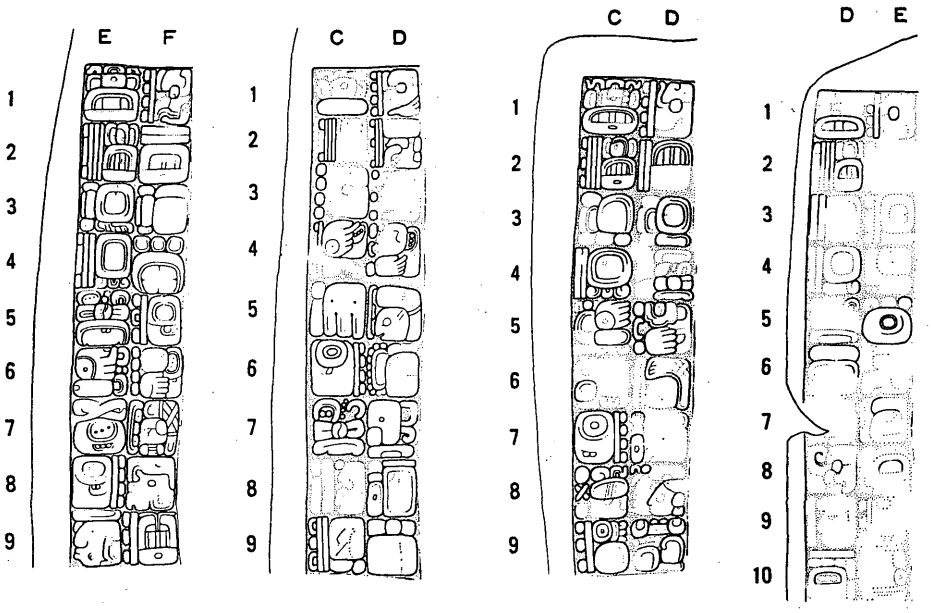
St. 18
9.14.15.0.0 11Ahau 18Zac
[726年]

図 2-3

と計算値とを，参考までに掲げておきたい（表 3）。なお D の係数は19までであり，それ以上は E と E の係数で表わされる。すなわち，E は20に相当する文字といえる。ここではこれも D の係数として扱う。計算は 9. 17. 0. 0. 0 が月令 0 日であることを基準にした Schlak の計算式を利用した [SCHLAK 1983]。

計算値には0. 6日の誤差が許されるのであるが [SCHLAK 1983: 83]，しるされた値はいずれも計算値と一致しており，判別不可能な碑の D の係数の復元に計算値が応用できる。しかし±0. 6日の誤差が許されるのであるから，たとえば12. 3の場合，11か12のどちらかとなり，残念ながら一方に特定はできない。

表 3 の計算値のつぎの欄は IS の日付をユリウス暦に変換したものである。この変



St. 13　9.17.10.0.0 12Ahau 8Pax　[780年]
St. 14　9.17.13.4.3 5Akbal 11Poop　[790年]
St. 8　9.18.10.0.0 10Ahau　[800年]
St. 6　8Zac　[755年または807年？]

図 2-4

換式は現在もっとも利用されている Thompson の Ahau 値(マヤ暦元のユリウス数) 584283をもちいたものである [Thompson 1971: 303–310]。表3の最終欄は Goldstine の表を利用してそれぞれの日付の直前の新月の日と時間をだしたものである [Goldstine 1973]。新月の日時は，マヤ地域を西経90°の位置として計算した。ユ

表3　Dの係数と月令

碑	IS	Dの係数	計算値	ユリウス暦	新　月
22	9. 12. 15. 13. 7	25?	24. 4	688 1/1	12/10 7:19
24	9. 12. 10. 5. 12	18	18. 5	682 8/25	8/8 15/09
23	9. 13. 18. 4. 18	15	14. 5	710 3/17	3/5 1:51
2	9. 14. 1. 3. 19		12. 4	713 2/10	1/30 20:27
29	9. 12. 10. 5. 12	19	18. 5	682 8/25	8/8 15:09
30	9. 14. 3. 0. 0	4	3. 8	714 11/13	11/11 21:45
28	9. 14. 4. 7. 1??		2. 7	716 3/28	3/28 0:49
31	9. 14. 4. 12. 7		20. 1	716 7/12	6/23 22:58
18	9. 14. 15. 0. 0	12?	12. 3	726 9/11	8/31 14:56
13	9. 17. 10. 0. 0	27	26. 8	780 11/26	11/1 2:38
14	9. 17. 13. 4. 3	8?	8. 6	784 2/2	1/26 18:58
8	9. 18. 10. 0. 0	21	21. 3	800 8/13	7/25 7:42

表4　C の 係 数

石碑	IS	Cの係数	計 算 値
22	9. 12. 15. 13. 7	1	1
24	9. 12. 10. 5. 12	1	1
23	9. 13. 18. 4. 18	1?	6
2	9. 14. 1. 3. 19		6
29	9. 12. 10. 5. 12	6	1
30	9. 14. 3. 0. 0	4	4
28	9. 14. 4. 7. 1??	3	3
31	9. 14. 4. 12. 7		4
18	9. 14. 15. 0. 0	6	6
13	9. 17. 10. 0. 0	4	4
14	9. 17. 13. 4. 3	2	2
8	9. 18. 10. 0. 0	2	2

リウス暦の月日から新月の月日をひくと，月齢がでる。その値と計算値を比べると約2日の誤差がでる。この誤差をなくするためには，Ahau 値として 584285 をもちいるとよい。Thompson は最初 Ahau 値として 584285 をもちいていたが [Thompson 1935]，かりに GMT 説と称されるこの説が正しいとすると，584285 という値の方がデータに合致するように思われる。しかしながら，マヤ暦の西暦への変換は大勢が Thompson が提案した Ahau 値 584283 をみとめているものの，いまだ疑義をはさむものもあり，検討しなおす必要がある。この問題についてはあらためて扱う予定であるので，これ以上深入りしないことにする。

C の係数は，6カ月を一単位にした数であり，これはある基準のときを決めて計算した数であるから，相対的であるが，第II期では，9. 12. 0. 0. 0 での C の係数が 0，すなわち 1C であることを基準にし，第III期では 9. 17. 0. 0. 0 で 2C であることを利用して計算すると，表4のようになる。

ここでも計算値と実際にしるされている係数が一致している。ただし石碑29だけは計算値とあわないが，これと同じ日をしるしている石碑の場合，計算値とあっている。D の係数でも，石碑24と石碑29は同一日をしるしているにもかかわらず，18と19とちがいをみせている。石碑24が19で石碑29が18であれば，C の係数の 6 のつぎは 1 にもどるのであるから，19日目が C の係数のかわるときと解釈できるのであるが，実際は石碑24の係数が18で，石碑29のほうが19であるので，その解釈は正しくない。同一日のこの違いは，異なる計算の基準を用いたとしか解釈のしようがない。

次に全期間を通してみた字体の交替や，配列の傾向について言及しておきたい。第I期，第II期は，頭字体なら頭字体で，幾何体なら幾何体で統一されており，例外は

わずか石碑28のKinの文字1例である。しかし第Ⅲ期になるとBaktunのみ頭字体で，その他は幾何体で書かれている。石碑14だけが頭字体で統一されているにすぎない。

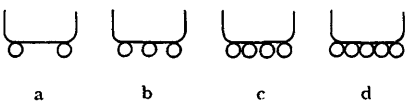
数字は初期の1例すなわち段階碑文 (HS) のみ頭字体が使われているだけで，あとは点と棒で表記されている。Ⅰ期は上，Ⅱ期，Ⅲ期は左に，点と棒で表わされた数字は置かれている。例外は石碑13のTunの場合だけで，上に棒2本が置かれている。これはおそらくとなりのKatunの文字の構成素となっているTunの文字素とバランスをあわせるため，またはそれにつられて，すなわちKatunの上の文字素T 25.528. 25のかわりとして，その場所を埋めあわせるために，上に置かれたように思われる。

つぎに各々の文字について述べる。

1. 導 入 文 字

ISの最初に生起するため導入文字と呼ばれる文字は，全期間通じて安定している。ただ丸が2つまたは3つの文字素 (T 314) がつかないほうが多い[3]。これのあるなしにより，なんら意味の変化は生じないようであるので，装飾要素であり，文字の下に生起するところから，文字の「支え」ともよびうるであろう。導入文字の文字素のひとつTunの文字素は，Ⅰ期，Ⅱ期の場合，第Ⅲ期に比べて平たいように思える。導入文字はふつう他の文字に比べて大きく，2つから4つの文字枠をしめるのであるが，ナランホの場合，1例（石碑23）を除き，他の文字と同じくひとつのますしかしめていない。

Tunの文字の上でT 25にはさまれた空間に，月の守護神とよばれている文字が生起する。それらのほとんどは判読不能であるが，判読できる文字はいずれも他の遺跡でみられる文字ととくに変わったことはない。しかし一例だけ言及しておかなければならないものがある。それは石碑18である。月はZacであるが，Grahamの手書きをみても写真をみても，Yaxの守護神である星の文字T 510eが生起しているように思われる[4]。はっきりとした形で保存されていないので，断定はできないが，もしそ



T314

3) T 314は丸が4つまたは5つが下接字として生起したものしかあげられていない。T 142は丸が3つの接字であるが，主字の前と上と下に生起するものとして挙げられている。どちらも適切ではないので，T 314に丸が2つ以上の下接を含めることにし，必要に応じ，小文字のアルファベットで区別することにする。

4) Thompsonのカタログでは T 510にはこの文字は登録されていないが，この文字はT 510bを半分にした文字であり，T 510bと等価であるので，T 510のうちに分類し，T 510eとしておく。なお，T 510にはaからdまでの文字素があるが，それらは等価ではないので，いずれ分類をかえる必要があるが，ここではできるかぎりカタログを尊重し，修正をくわえるだけにしている。

うなら，間違いということができる。

2. 期間の文字

いずれもはっきりした形を保存したものはないので，時代的な変化やナランホの特徴をとりだすことは不可能であるが，残存している部分からみて，たとえば Baktun 文字の頭字体でいえば，あごのところが手でおきかわっているように，他の遺跡と共通の，マヤの伝統に従った文字が使われているとみてよいように思われる。

3. 補助シリーズの文字

第 I 期では，階段碑文の G の文字しか識別できない。IS にならって G も頭字体がもちいられている。前接字がここでは興味深い。すなわち石碑13でみられるように，T 135 にかわるものと考えられるからである。

補助シリーズの文字ではっきり読めるものは少なく，なんとか読み取れるものも細部が不明であり，くわしい比較は不可能であるが，全体的に他の遺跡でつかわれている文字とかわるところはないように思われる。二，三気付いたところをしるすことにする。

G の文字は G9 と G4 がはっきり読みとれるのみで，それらはマヤの伝統的表記とかわるところはない。G と F の融合例は711年にはじめてみられる。

D の文字では，T 181（石碑30）とT 126（石碑13）の交替例をみることができる。

B では，前接字で，T 1 と T 34 の交替を石碑13と石碑29にみることができる。頭字体（石碑13, 14）と幾何体（石碑29，30）の交替もある。

A では数字の 9 がつく場合は点と棒であらわされ，10がつく場合は頭字体が好まれている。

4. カレンダー・ラウンドの文字

図 3，図 4 はおのおのの暦の文字ごとにまとめた図である。各シリーズごとにわけて，それぞれのシリーズ内では，左から右に，上から下に年代が新しくなるように並べた。各文字の下には，生起場所をしるした。

まず全体的な特徴について述べる。Ⅲ期を通じて資料のある文字は，260 日暦のほうはわずかに Ik, Akbal, Ix, Ahau の 4 つしかなく，365 日暦のほうは Uo, Zip, Zotz', Xul, Zac, Kankin, Muan, Pax, Kayab と 9 つあるが，それぞれの例は少ないので，時代的な変化を充分に調べることはむづかしい。しかし，それでもいくつかの変化や時代的な特徴を挙げることが可能である。最初に文字についている接字につ

いて述べ，つぎに月日の文字について述べることにする。

ふつうの文字は，下接字 T 125 をもつが，それのついていないものもある。それがついていても，ついていなくても意味は変わらないので，この接字は装飾物とみることができる。T 125 がついている割合は，

第Ⅰ期	8/22	36%
第Ⅱ期	9/39	23%
第Ⅲ期	7/37	19%

で，これだけみると，時代とともに減少の傾向があるとみることができるが，果してこれが一般的な傾向であるのかどうかは，他の遺跡についても調べたあとでなくては，いうことができない。しかし数字のつき方をみた場合，顕著な特徴がみられる。数字は左につくか上につくかどちらかであるが，上につく割合をみると，

	260 日暦		365 日暦	
第Ⅰ期	11/22	50%	10/22	45%
第Ⅱ期	0/39	0%	1/38	3%
第Ⅲ期	22/37	59%	20/36	56%

となり，第Ⅰ期，第Ⅱ期，第Ⅲ期では，上におかれる場合と左におかれる場合はほぼ同数であるが，第Ⅱ期では，好んで左に数字がおかれたことがわかる。

細部がはっきりみえるものは少ないので，数字を表わす丸や棒の装飾について述べることはむづかしいが，判読できる限りでは，Ⅰ期，Ⅱ期では装飾がみられるのに対し，Ⅲ期ではひじょうに少ない。第Ⅲ期では，1を表わす丸が1つか2つしかなく余白がある場合，×の字がしるされて余白を埋めることがある。これはマヤの碑文の後期の特徴のひとつである。

つぎに日の文字について述べる。第Ⅰ期の祭壇1の Ix には，初期の碑文にあらわれる特別な文字がついている。ここでは挙げていないが，祭壇1にはもう1つこの接字がついた日の文字がある。この接字 T 51/53 は初期の碑にみられるものである。気がついたものを挙げると，つぎのようになる。

Tikal

石　碑　9	9. 2. 0. 0. 0	(475)
石　碑　7	9. 3. 0. 0. 0	(495)
石　碑　15	9. 3. 0. 0. 0	(495)

	石　碑　8	9. 3.　2. 0.　0	(497)?
	石　碑　23	9. 3. 16. 8.　4+	(511)
	石　碑　25	9. 4.　3. 0.　0	(517)
Copan			
	石　碑　24	9. 2. 10. 0.　0	(485)
	石　碑　15	9. 4. 10. 0.　0	(524)
	石　碑　9	9. 6. 10. 0.　0	(564)
	石　碑　22	?	
Yaxchilan			
	リンテル48	9. 4. 11. 6. 16 +	(526)
	リンテル35		

これからわかるように，およそ 9.2. 0. 0. 0 から 9. 6. 10. 0. 0 にかけての流行とみることができる。しかし，カラコルでは石碑 6 (9. 8. 10. 0. 0) に T 51/53 がみられ，のちに述べる第 I 期の内容からみても，これが直接の影響を与えたものとみることができる。

第 I 期には，このほかにも初期の碑文の特徴をみることができる。ひとつは Ahau の文字の両端真中がくびれているところである。Ahau の文字が最初にあらわれるのはワシャクトゥンの石碑 9 (8. 14. 10. 13. 15 328年) と思われるが，その文字は両端真中がくびれている。くびれていない Ahau があらわれるのは，おそらくティカルの石碑18 (8. 18. 0. 0. 0) が最初であり，その後はそれにおきかわっていくのであるが，くびれた Ahau はその後もしばらくみることができる。ワシャクトゥンの石碑22 (9. 3. 10. 0. 0) にはそれがあり，そのころまでの特徴とみることができよう。ナランホの祭壇 1 では，T 51/53 という初期の特徴をしるしているにもかかわらず，Ahau の文字はくびれた Ahau ではなく，新しい特徴をそなえた Ahau が描かれており，くびれた Ahau は石碑38，階段碑文にのみあらわれている。

もうひとつ古い特徴をもつのは，Kan の文字である。石碑22の H13 の Kan と比べるとわかるように，下部の横線が円を描いており，上部の丸にくっついている。ティカルの石碑23 (9. 3. 16. 8. 4) に同じ形の Kan の文字をみることができる。その他はのちの形と同じであるので，第 I 期は古い形と新しい形をともにとりこんだ不安定な時期とみることが可能である。

日の文字で各期間を通じてもっとも生起数が多いのは，Ahau の文字である。それらを時代にそってながめれば，少しずつ変化していっているのがわかる。Ahau の文

字を目と鼻と口と口の周りの線の4つの要素からなりたっているとみて，それらの各要素の時代的な違いをあげることで，変化のあとをたどることができよう。第Ⅰ期にはくびれた Ahau があることはすでに述べた。この古い特徴をもつ Ahau の文字の口は長細く両端が上向きになっている。のちの Ahau の文字の口は小さな丸であるので，これも古い特徴とみることができる。第Ⅱ期では上向きの口，細長い口，小さな丸い口があり，第Ⅲ期では小さな丸になっているところから，ナランホの Ahau の文字の場合，第Ⅱ期ではまだ書体は確立されず，第Ⅲ期になってやっと書体は安定したということが可能かと思う。第Ⅰ期には，くびれた Ahau とともにくびれていないとふつうの Ahau があるが，まだ鼻は描かれていない。そして口の周りの線は丸い。それに対して，第Ⅱ期では，鼻をあらわす縦線が描かれ，口の周りの線はゆるやかな曲線，または直線にちかくなり，内周の横の線についている。口の周りの線は第Ⅲ期ではまたもとにもどり，丸くなり，線は内周の下側についている。

日の文字の多くは，頭字体と幾何体をもっているが，ナランホでは，両方の字体をみることができるのは，わずかに Eb の文字においてのみである。

つぎに365日暦の文字，すなわち，月の文字について述べる。月の文字の時代的変化を述べるのはむづかしい。たとえば Uo の文字は，第Ⅰ期では3つの部分からなり立っているが，第Ⅱ期以降は2つの部分からなりたっている。細部が不明なので，はっきり認めることはできないが，第Ⅰ期の文字の一番上の文字素は黒を表わす文字素 T 95 であり，黒を表わす格子の要素が，第Ⅱ期以降では主字の中にはいっているものと思われる。それを時代的な変化とみなすべきか，それとも簡単に書き方の違いとみるか。Uo の文字の6例を比べると，確かに第Ⅱ期以降は文字素 T 95 が主字の中にはいって2文字素からなるという時代的な傾向を読みとることができるが，Uo の生起するテキストはリンテル1，石碑23，石碑12の各シリーズに1つずつしかないので，これを時代的な変遷と結論づけるわけにはいかない。そのような結論を得るためには，他の遺跡ではどうかをみる必要がある。これはすべての遺跡のテキストを検討したあとに述べる問題で，いま述べることはできないので，ここでは書き方の違いというにとどめておきたい。

Poop の文字の内部には kan cross とよばれる十字の文字素がある。第Ⅱ期の2つの例の一方は右上，もう一方は右下にある。第Ⅲ期では右下にあり，こうした場合であると，その違いは書き方の違いとはっきりいうことができる。

Uo の文字についてはふれたが，第Ⅲ期の文字の違いにはふれなかった。同一テキストの文字であるが，主字に上接字と下接字がついて3つの部分からなる文字と，主

字と下接字の2つの部分からなる文字と，主字だけの文字の3つの違いがみられる。細部は不明であるが，主字はいずれも同じに違いない。石碑12の B7b の Uo は3つの部分からなるが，上接字は2つにわかれているので，T 95 と異なるように思われる。また同じくらいの大きさであるので，石碑 10 の B1 の Zip の文字にあらわれる T 87 とも異なるように思われ，よくわからない。下接字をもたない Uo は1例だけしかないが（石碑12の E15a），同様な構成の仕方の Zip の文字の場合でも下接字は省略されうるので，あまり重要な文字素でないと考えることができる。

Zip は T 109 と T 552 の場合と，それに Uo につく下接字とおそらく同じ文字素がつく場合がある。T 109 は最初は上，つぎに左，それからまた上方についている。文字ますが横長であると，それにあわせて T 109 は主字の左におかなければバランスがとれなくなるのであり，文字ますに規定される部分が多いが，第Ⅲ期の石碑10の B1 では，数字と文字の間に T 87 と思われる文字素がはさまれている。これはおそらく数分類詞の役目を果す文字素と思われるが，それがはっきりとみとめられるのはナランホではこの1例のみであるところから，文字のバランスをあわせるために，義務的ではないこの文字素をはさみこんだとみたい。そうすると，第Ⅲ期では T 109 は主字の上に置かれるというある種の規範が確立していたとみることができそうである。

Zotz' は，いずれもこうもりの頭を文字にしたものであり，時代的な変化をみとめることはむづかしい。しかし，Ⅰ期，Ⅱ期，Ⅲ期それぞれに特徴がある。

Zec は，細部が不明であるが，T 25 と T 520 と T 130 の文字素から構成されていることはまちがいない。第Ⅱ期の石碑22の H 8 では T 25 はひとつであるが，H 11 では T 25 が2つある。T 25 はひとつでも2つでも同じであることは Mac の文字においても検証される。

Xul の主字は，動物の頭の文字であるが，1例を除き，これに T 116 がついている。T 116 は Yaxkin にも5例中2例ついている。それゆえ T 116 は省略可能な文字素であることがわかる。T 116 は Kankin の文字にも1例だけだがついている。残りの3例は T 130 がつき，2例はなにも接字がついていない。いずれも Kankin の文字であるので，T 130＝T 116＝#（零要素）という等式が導かれるが，これが有効かどうかは他の例で検証しなくてはならない。

Yaxkin の上接字 T 16 は左についてもよさそうだが，ナランホでは，いずれも上についている。

Mol は縦長の形と丸い形があるが，これは文字ますの収り具合に影響されたものであろうが，時代が下ると丸くなる傾向をみることができる。

Ch'en, Yax, Zac, Ceh は T 60: 528 に T 95（黒），T 16（緑），T 58（白），T 109（赤）の接字がついて構成される。T 528 の第 I 期の例は古い形をしめしている。すなわち内部の右下の線が，大きく，右横から下に曲線を描いている。のちの文字はそれが小さく，右横につくので，時代的な変遷をみとめることができる。T 60 は3例ばかり省かれており，なくてもよい文字素であることがわかる。第Ⅲ期に1例だけある Ch'en の文字には接字がついていない。内部が判読できないが，黒の要素である格子があるものと思われる。それには T 314 が下接字としてついている。同じ接字は，第 I 期の階段碑文 B'1b と第Ⅱ期の石碑22の F 15 にもみられる。これが飾りの要素であることはすでにふれた。石碑22の G 14 の文字はその他の文字と幾分形を異にする。計算からは 2 Zac であるので，棒とみられる要素は T 58 の一部であり，2を表わす2つの丸は T 58 の一部を食っているとみることができる。

Mac には2つの書き方がある。T 74 : 617 : 25 と T 74 に T 25 を頭字体にかえた文字素 (T 205) がついた2種である。最初のほうは，さきに Zec のところでふれた，T 25 を二重化した変化形がある。T 25 は ca[ka] と読まれている。それの頭字体も当然 ca という音価をもつ。Thompson は T 205 を接字に分類しているので，この分類は適切でない。おそらくそれの主字にあたるものが T 738 であろう。T 738 には魚の文字とそれを人物化した文字が含まれているが，人物化した文字素がそれにあたるものとおもわれる。もしそうなら，魚は cay であるので，頭音法 (acrophony) を利用したものであることができる。

Kankin, Muan の文字に変化をみとめることはむづかしい。

Pax には頭字体の例をみることができる（第 I 期の石碑25）。第Ⅱ期の石碑 3 の Pax には T 314 がついているが，これはすでに述べたように，装飾要素とみることができる。

Kayab の文字は T 57 の接字がつく形がふつうであるが，第Ⅲ期の文字はかわっている。上接字は T 57 ではなく，T 87 のようであり，もしそうなら，これは Kayab の文字を構成する要素ではなく，さきに Zip のところでみた数分類詞の役目をはたす文字素と考えることができる。そうみると，T 126 が T 57 のかわりにおかれているので，T 126＝T 57 という等式を導くことができそうである。しかし他の遺跡の Kayab の文字と比べると，それは正しくないことがわかる。ふつう T 57 と T 126 の両方がつくからである。つまりナランホでは，接字 T 57 と T 126 は片方ずつしかついていない。わずかに階段碑文の N3b の Kayab において T 57 と T 126 の両方がついているだけである。もっともそこでは T 126 の右半分しか描かれておらず，

	Series I	Series II	Series III
Imix		28 E10	32 Q3, 32 Y1
Ik	HS X Vla	21 A1, 18 H4	12 D8a
Akbal	HS VI Mlb, Alt. 1 E12	23 G8	14 D8, 8 A1
Kan	25 A8, 25 C1, 25 C3, 25 C5, 25 D9	22 H13	
Chicchan		22 E15	
Cimi			
Manik		22 E4, 29 H7	
Lamat		24 A1, 22 D1	12 D15b
Muluc			
Oc		22 F20	
Chuen			12 D5a
Eb		24 B4, 3 C4, 29 F4	19 C1, 12 B1, 12 B7a, 10 A1, 32 A'3
Ben		22 G6, 22 G8	12 E11a, 35 D8, 11 A1
Ix	Alt. 1 B11, HS XIII A'lb	22 E17, 18 H8	35 D1
Men		29 G18, 23 F17	12 G3b
Cib			12 B9a
Caban	Alt. 1. D12	22 G11	
Etz'nab		23 F5	12 C14b, 6 A1
Cauac		22 E9, 22 F12	
Ahau	Alt. 1 I5, Alt. 1. 17, Alt. 1 I9, Alt. 1 J8, Alt. 1 K10 38 A6, 38 A9, 38 B3 HS IV 13, HS VI N3a L.1 G2	22 A1, 22 G19, 24 E14, 21 E9, 23 G11 29 H11, 29 H16, 30 A1, 30 C4, 30 F2 31 A1, 31 I13, 18 A4, 18 I6 41 A1	19 A1, 14 A1, 14 F12a, 13 A1, 13 E4, 33 A1 36 A, 35 E9, 8 C4, 10 A7, 10 A10a 7 A1a, 7 A4a, 32 01, 32 X1, 32 W7, 32 A'5b

図 3　260日暦の文字

	Series I	Series II	Series III
Poop		29 I11, 18 G5	14 C9
Uo	L1 B1	23 F8	12 B7b, 12 B9b, 12 B15a, 12 E15a
Zip	Alt. 1 K8, 25 C10, HS P1b	22 H6, 21 A2, 23 H8	12 C1, 10 B1, 32 U2
Zotz'	Alt. 1 F12, 25 C8	24 A2a, 24 E1, 18 G9	32 Z1
Zec		22 H8, 22 H11	12 D5b
Xul	Alt. 1 C1, 25 D5	22 F9	32 X7
Yaxkin		22 E13, 23 E18	19 C2, C3, 8 A2, 12 F4a
Mol		28 E5	10 B7, 7 A1b, 32 P1, 32 R3
Ch'en	38 B5, Alt. 1 H10, Alt. 1 J11		12 D8b
Yax		24 B7, 29 G7, 29 H1	
Zac	25 D3, HS B'1b	22 F15, 22 G14, 18 A8, 18 J5	35 F9, 12 F12b, 10 A10b, 7 A4b
Ceh			35 C9, 12 E11b
Mac		31 A2, 31 J13, 1 A2	14 A2, 14 F12
Kankin	Alt. 1. A3, Alt. 1. H8, HS V1b	29 I16, 30 A2	11 A1b
Muan	HS Nla	22 F17, 23 H17	6 A2
Pax	25 D1	21 F9, 3 E12	13 B1, 13 F9, 19 B1, 33 A2, 36 B
Kayab	Alt. 1 E1, L1 H2, HS N 3b	22 E6, 24 C12, 29 I7	32 Y4
Cumku		1 E6, 22 A2, 22 G1, 22 H19	35 C2
Uayab	Alt. 1 H6		

図 4　365日暦の文字

両者は融合している。

Cumku の文字の主字は T 506 で Kan の文字と同じである。接字は T 155 と思われるものが2例（石碑1，石碑35）ある。これはふつうの形である。しかし石碑22の3つの例はかわっている。3例とも3つの部分にわかれうるが，細部が判読できるのは H 19 の真中の要素だけである。5つの点があり，これは独立した文字素としても生起する T 585 である。その他の2例も構成のしかたが同じであるから，同じ文字素とみることができよう。この形をとる Cumku の文字はコパン (Copan) 石碑3にみることができる。この上接字はひとつの文字素と考えたいが，Thompson のカタログには登録されていないので，かりに T 60 (585) としておくと，T 155＝T60 (585) という等式が成り立つ。これが同価である理由はよくわからない。

5. ディスタンス・ナンバーの文字

ディスタンス・ナンバー (DN) を構成する文字は，イニシャル・シリーズ (IS) に使われる期間の文字とほぼ同じ文字が使われるが，生起する順は IS とは逆の，小さい単位から大きい単位の順に，すなわち，Kin, Uinal, Tun, Katun…… という順に並ぶ。ふつう Kin の文字は省かれ，その値は Uinal の文字の左につく。そして Uinal の値は上につく。まれに Uinal の文字の左に Uinal の値がつき，上に Kin の値がつくことがあるが，ナランホでは，その例はなく，すべて，左に Kin の値が，上に Uinal の値がついている。左につく Kin の数字のほうが大きく，左上方を占めるので，上と左につく接字は等価であるが，読み順は左上方をしめる方が先という原則が導き出される [八杉　1982: 40–41]。

しるされている単位はほとんどが，Tun までであり，Katun までしるされているのは8例しかなく，そのうち6例は 2 Katun までであり，碑文の大部分は人の一生の間の出来事をしるしたものであることがここでも納得できる。Katun 以上をしるしたものは，Baktun までしるしたもの（祭壇1），Pictun までしるしたもの（祭壇1），Calabtun までしるしたもの（石碑1），それぞれ一例ずつある。

DN にはふつう導入文字がつくが，ナランホでは第 I 期には13例中3例ついているだけで，第 II 期ではまったく導入文字は用いられていない。しかし第 III 期では，19例中12例とかなり好まれたことがわかる。導入文字はあってもなくてもわかるのであり，第 III 期は IS 表記をやめて，スペースの節約をはかったという点からみれば，むしろ時代に逆行するものである。これも一種の流行であろう。

DN 導入文字は前／上接字—主字—後／下接字からなる。主字は T 573 で下接字

Series I

Alt. 1

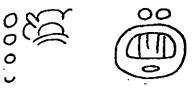
A6　B6　A7　B7　A8　2.13.13.?.?.4

D8　C9　D9　C10　D10　2.2.6.3.3

F10　G10　F11　19.10.7

J5　K5　J6　12.0.0.0

St. 25

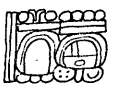


D6　C7　2.0.4

L. 1

F4　G1　H1　2.5.7.12

HS.



H2　14.7.10

L1b　M1a　1.4.9

M3　1.1.17

O1　13.1

U1　1.13.10

V2b　14.2

A'1a　3.?.?

Series II

St. 1

E1　7.12.?

F7　E8　F8　E9　F9　E10　F10

5.12.10.13.15.?.?

St. 22

F8　5.8.12

E12　1.0

F14　4.6

F16　4.9

F19

E20　1.2.16

G5 H5

1.3.3

H7

1.3.0

G10 H10

1.0.4

G13

5.7

H18

9.15

St. 24

B11 C11

5.7.15

B18 C18

11.8.1

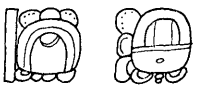
E13 D14

2.14.12

St. 23

E17

4.17


G7 H7

1.1.5

G16

11.17

St. 2

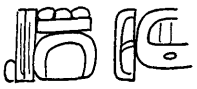
E14

10.9

St. 3

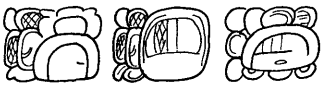
F12　E13　　7.9.3.15

St. 29



H6　I6　　5.7.12

H10　I10　　7.4.13



I14　H15　I15　　1.0.0.0

St. 30

E1　F1　E2　　3.0.0

F7　F7　　1.3.19

E12　　8.5

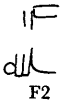
H1　　1.10

H3　　9.10 ?

G8　　13.8 ?

G12　　12 ?

St. 18



F2　　5.12

F6　E7　F7　　2.3.10.13

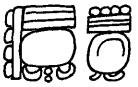
G4　　8.17

G8　　3.12

J4　　7.6

Series III

St. 14



E11　F11a　　19.15.8.?

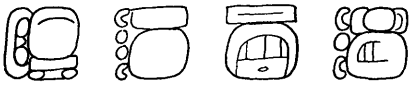
St. 13

G14　H14　G15　H16　　5.13.10

St. 35

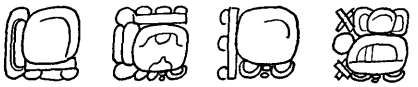
E7　F7　E8　　17.7

St. 6



F2　E3　F3　E4　　1.10.?.2.?

St. 12



C4　B5　C5　B6　　1.8.6.0

C8b　　4

C14a　　2

D4b
E4
2.13
D7b
E7
4.11
E10b
D11
2.11
E14a
E14b
D15a
8.15
F3a
F3b
G3a
4.7
F11b
G11
4.5
St. 10
A5
B5
A6
B6
1.19.15.8
St. 32
M1
N1
15.17
T2
1
S4
T4
U1
V1
5.13.19
X5
W6
X6
3.0
Z3
12.11
A'5a

図5　DNの文字

はT 12である。第Ⅲ期の石碑13のG14の場合の1例だけ，T 229に置き換わった例がある。後接字としてそれは生起するが，主字の右と下は等価であるので，その位置の違いを問題にする必要はないであろう。T 229＝T 12である。主字の上または前につく接字にはつぎのものがある。

T 1　祭壇1のD8, F10,
　　石碑6のF2
　　石碑12の7例は細部が不明であり，よくわからないが，T 1がつかわれているものとおもわれる。
　　石碑32のS4

T 3　段階碑文の01a

T 11　石碑13のG14

T 13　石碑35のE7

T 200?　石碑10のA5（細部が不明なので，確かでないが，T 528が3つ縦に並んだ文字素のようにみえる。T 200はT 528が2つ並んだ文字素として登録されているので，T 200bと仮りに番号をつけておく。）

これらは等価に文字素とみなされるが，なぜそのような交替が許されるのかわからない。これらはThompsonがcount groupと名づけた一群の接字に分類できる[Thompson　1971: 186–190]。

DNのあとにはふつうDNを足すか引くかを指示する文字が生起する。これは後の日，前の日を示す文字といいかえてもいい。ナランホではこの文字の生起する率は少なく，第Ⅱ期にわずかに2例，第Ⅲ期でも3例にすぎない。主字は513またはT 516cと思われるが，石碑1のF10，石碑13のH16のそのままの形はThompsonのカタログにはないので，登録する必要がある。そしてそれらをひとつにまとめる必要がある。

第Ⅱ期の2例は，ともに前の日を示す文字，すなわちDNを引くことを示す文字である。接字はともにT 59とT 126と思われる。しかし位置が異なる。石碑1の場合はT 59は後接字として，T 126は下接字として生起し，T 59が右下をしめている。それに対し石碑30の場合は，T 59は下接字として，T 126は後接字として生起して，T 126が右下隅をしめている。それゆえ右下隅をしめる方をあとに読むという原則は，ここではあてはまらない。

第Ⅲ期にみられる3例はいずれも後の日を示す文字，すなわちDNを足すことを示す文字である。石碑13と石碑32の例はいずれもT 679とT 59が接字としてつい

ているが，石碑13の T 679 の文字素は半分だけしか描かれていない。半分だけであろうと，全部描こうと文字の働きは一緒であることがわかる。T 59 は右を向いておろうと，左を向いておろうと，変わらないこともわかる。

つぎに各期間の文字について述べていくことにする。

Kin の文字はふつう省かれ，Kin の数値だけ Uinal の文字につけられるが，Kin を表わす文字が第 I 期に 2 例，第 II 期に 1 例，第 III 期に11例ある。第 II 期の石碑30の G12 も日の文字と思われるが，消えて不明であるので，これにはふれない。第 I 期の Kin の文字は，IS にあらわれる Kin の文字 T 544（祭壇 1）と IS には使われることのない T 574（階段碑文）の 2 種類がある。第 II 期の Kin の文字はたいへんかわっている（石碑29 F18）[図17-2]。前の日からつぎの日までは 3 日であり，石碑29の F18 のこの文字には 3 を表わす丸が 3 つあることから，Kin を表わすと考えられるだけで，ふつうなら Kin の文字として同定されることはない文字である。第 III 期では，T 544（石碑12の F3b）と T 574（石碑12の D11a, E14b, G11a, 石碑32の M1）の他に，石碑35の F7 の文字，石碑32の T2, X5 の文字でも表わされている。その他（石碑12の C8b, C14a，石碑32の T4）は不明である。石碑32の T2 の文字は細部が不明であるが，形から，空と大地の文字のあいだに kin がはさまれた文字に違いない。おそらく太陽が昇るさまを描いた文字であり，Kin の文字と交替しうる理由がわかる。しかしその他の交替の理由はよくわからない。Kin の文字につく接字は T 23 であり，その他の期間につく接字と異なっているが，その理由も不明である。

Uinal の文字は細部に小さな変化がみとめられるが，どれもすぐさま Uinal の文字とわかるほど比較的安定している。第 I 期の Uinal の文字には，内部の要素のうちの上につく要素が，丸いものと丸の先端がつきでたものの 2 つがある。丸の先端がつきでたものは第 III 期では下についている（石碑35の E8，石碑12の B5, G3b，石碑32の Z3)。Uinal の頭字体は第 I 期の階段碑文 M3b と O1b にあるが，その後は幾何体しか生起しない。石碑35の E8 にはめずらしい接字がついている。

Tun の文字も比較的安定している。ただ第 II 期の石碑22の E20 と石碑24の C18 の Tun には T 585 が接中字化されていることは問題にしなくてはならないであろう。T 585 は第 I 期のリンテル 1 の G1, 階段碑文の H2b, M3c, U1b の接字の一部として生起している。それが石碑22と石碑24では接中字化されたものと思われるが，その理由はわからない。Tun にも頭字体があり，それは階段碑文の M1a と M3c にあらわれている。どちらも丸で 1 は表わされておらず，指の文字で 1 が表わされている。

Katun の文字も Tun の文字と同様全期間を通じて一目で識別できる。頭字体は石

碑10の B6 にみられるが，Tun の部分が頭字体にかわっただけのものである。

Baktun は3例のうち2例まで頭字体で書かれている。Pictun は2例とも幾何体であり，Calabtun も幾何体で書かれている。祭壇1にみられる Baktun と Pictun の幾何体を構成する T 528 の文字素は古い形を保持している。

6.　期間の完了，記念の文字

図6では，完了を表わす文字や期間の半分を表わす文字や，年令を数える場合に使われると考えられている ben-ich katun とよばれる文字などを碑ごとに挙げている。

完了を表わす文字は手の形をした文字が主字となっている。その形は5種類識別できるが，それぞれ伝える意味が少しずつ異なるものと思われる。もっとも多く生起するのは T 528.116: 713a であり，前接字に T 1 がもちいられる形がいちばん多い。その場合あとに期間の文字が生起している。T 1 またはそれと同価の T 232 があり，そのあとに期間の文字がつかない場合は石碑41，14，10，32と数えることができるが，期間の文字があって，T 1 がない例はない。

祭壇1の I6では期間の文字にも T 1 がついているが，同似の石碑38のほうではついていない。T 1 は文法的な接辞 u とみられており，それがなくても意味は通じるからであろう。もしこれまでの仮定通り，T 1 が文法的な接辞であるとすると，マヤ文字には表句文字があることになる。

石碑38の B6にはかわった接字がついている。3を表わす丸に T 12 がつき，3 katun の文字がある。そのまえまではマヤ暦の 9. 6. 0. 0. 0 である第 6 katun, 9. 7. 0. 0. 0 である第 7 katun, 9.8.0.0.0 である第 8 katun が完了したことを表わすのに対し，これはその3つの katun がたったことを意味し，同じような Katun の文字の意味の違いを表わそうとしたものと思われる。

石碑10と石碑32の完了の文字の接字は，これまでの生起順をみだしている。T 116 が石碑32では最後についている。これらの石碑はナランホの最後期の石碑であり，そのことと関係があるように思われる。

石碑29の T 528?.116: 713a は期間の完了ではなく，I12 が表わす出来事が終わったという意味につかわれているものと考えられる。それから 1 Katun 後の H17 に，前とほぼ同じ文字群が生起する。1 Katun 経った祝いをしたとみられるが，この場合 T 59 が余分についている。

祭壇1の I10，K6 の手の文字はリンテル1の G3，階段碑文の U2a の手の文字と同じ働きをすると思われる。しかしさきの T 528.116: 713a との意味のちがいをは

Series I

St. 38

A5

A7

A8

B1

B2

B4

B6

B7

Alt. I

H5

I6

H7

I8

H9

I10

H11

K6

J7

K7

J9

K9

St. 25

B10

C2

D2

C4

D4

C6

D8

C9

D10

C11

L. 1

G3

HS

U2a

Series II

St. 1

F6

E7

St. 22

G20

H20

St. 24

E15　D16

St. 21

E10

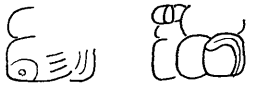
St. 23

H16　G18　H18　G19

St. 30

E4　F4

E9　F9　E10



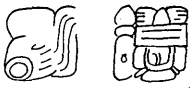
H13　G14

St. 29

H12　I12

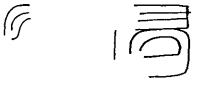
H17

St. 31



I14　J14

St. 18



I6　J6

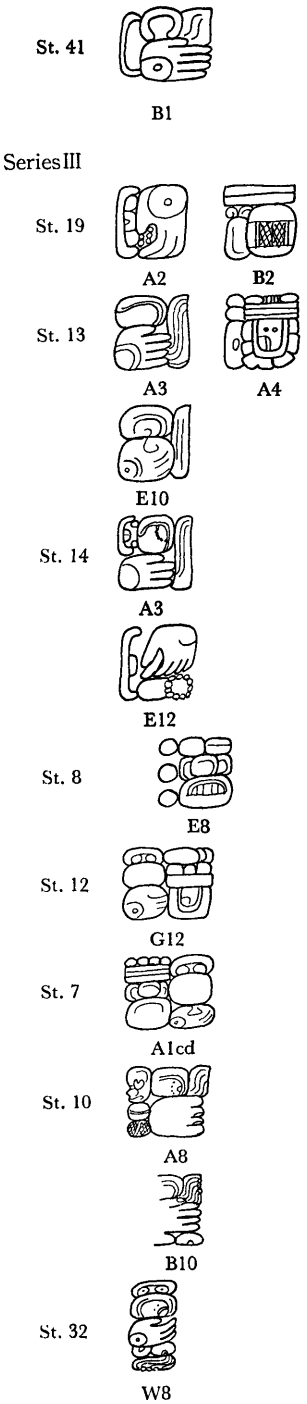

St. 41
B1
Series III
St. 19
A2
B2
St. 13
A3
A4
E10
St. 14
A3
E12
St. 8
E8
St. 12
G12
St. 7
A1cd
St. 10
A8
B10
St. 32
W8

図6　完了と記念の文字

っきりさせることはできない。

祭壇1の K9 の手は石碑19の A2 と同じ文字と思われる。この文字の生起するテキストに付随する場面ではふつう王が水または種をまいているので，その行為を表わす文字であることはまちがいない。この文字も区切りのいい期間の完了のときにあらわれる。

祭壇1の J9 は石碑23の H16 と，接字にわずかの違いがあるが，同じ文字である。hotun (5 tun) ごとの記念を表わす文字と考えられている。

石碑25の D10 は石碑1の E7, 石碑22の H20, 石碑24の D16, 石碑31の J14, 石碑13の A4, 石碑12の G12b と同じ文字である。これは期間の半分，たとえば 1 Baktun の半分となる 10 Katun を表わす文字である。石碑25の D10 以外は，T 59 がついており，その前の完了を表わす文字には T 1 はついていない(例外：石碑12の G 12)。石碑25の D10 は，そのあとに 4 katun の文字が生起している。日付をたどっていくと，この文字は 4 katun に半分たらない，すなわち，3 katun 半を意味していることがわかる。その他の場合と使い方に差があり，それが接字によっていることがわかる。しかし，この文字そのものの時代的な変化はみることができない。

石碑30の E9, F4 の手の形はこれまでのとちがう。石碑23の G18 の手の文字と同じとみられるが，接字に違いがある。しかし，意味するところは同じく完了である。微妙な違いがあるのであろうが，よくわからない。

Ⅵ. テキストの歴史的解釈と文字の分析

ナランホのテキストは，すでに述べたように，9. 10. 10. 0. 0 から 9. 12. 10. 0. 0 までと 9. 15. 0. 0. 0 から 9. 17. 0. 0. 0 までの歴史がしるされていないことで，3つの期間にわけられる。ここでは第 I 期から順に王朝の歴史をみながら，文字の使われ方について考察する。

1. 第　I　期

Heinrich Berlin は第 I 期の支配者として3人の人物をあげている [Berlin 1977: 122–125, 184–185]。そしてそれを Ia, Ib, Ic と命名している。しかしながら，第 I 期はカラコルと共通する節を持っているが，それらと比較すると，3人の支配者がいたとするのは適切ではないことがわかってくる。すなわち王と考えられるのは，Ia 王のみであり，Ib, Ic はカラコルの人と考えられるからである。Ib, Ic はナランホの

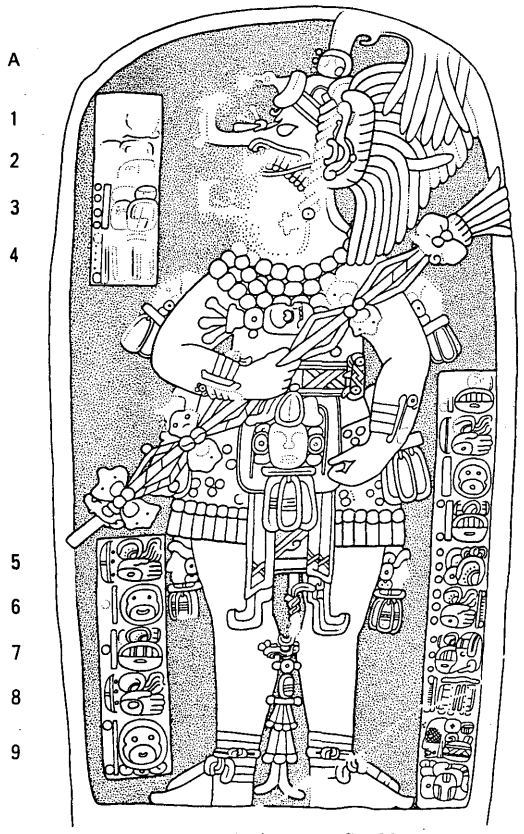


図7　石碑38　St. 38
[GRAHAM 1978] より

征服王とみなせないこともないが，もし Ib, Ic をもナランホの王とするなら，それらが生起するリンテルにしるされている人物すべてを王としなければならない。リンテルにはもう1人，Berlin が見逃した，Ic とそっくりの文字であるが，カラコルのテキストをみると，Ic とはあきらかに違うカラコルの人物が登場するので，3人の支配者ではすまなくなる。それゆえ Berlin の第Ⅰ期の王の同定は適切でないということができるのである。そこで，カラコルのテキストと比較しながらナランホの第Ⅰ期のテキストを分析していきたい。

1.1　ナランホの最古の石碑は石碑38である。ここには，Berlin が Ia とした人物が登場する (A4, B8)。

B9b はナランホの紋章文字であり，この人物はナランホの王であったとみることができる。このナランホの紋章文字の接字は通常のものと違い，人物の横顔が前接字として描かれている。これと，のちに第Ⅱ期でみる「ティカルの女性」の名をあらわす句の最後に生起する紋章文字の接字（石碑24 D18）と比べると，たいへんおもしろい。「ティカルの女性」のほうについている横顔の接字は女性を表わしているとみられるのに対し，こちらはどうみても女性にはみえないからである。女性には女性の横顔の接字が用いられるといえよう。

Ia 王は祭壇1の G2, I4, I11, J10 に4度，それに石碑27の A2 にも登場する。石碑25の A7 は損傷が激しく読みとることがむづかしいが，接字と主字の一部から，これも Ia 王を表わす文字のように思われる。もうひとつ第Ⅱ期の石碑3の E14 に Ia 王は登場する。過去をふりかえった部分で，それに関する日付は 9. 6. 12. 0. 4 4Kan 7Pax である。

その言及された日付をひろうと，9. 4. 10. 8. 17 から 9. 9. 2. 0. 4 (主に 9. 8. 0. 0. 0) までとなる。

祭壇1の I12 と K3 には，Jones が母一子，父一子の関係を示すとした文字が生起する [Jones 1977]。その文字が生起するさまざまな事例を検討すると，Jones の説は正しいとみられる。ここでもそれらの文字を含む I12 から K4 にかけての節は，母と父を記した節とみることができる。

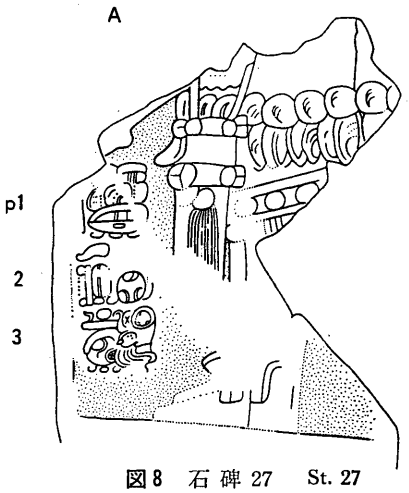


図8　石碑 27　St. 27
[Graham 1978] より

K4 は，一見すると，その次に DN があるところから，DN 導入文字と簡単に考えてしまいそうだが，よくみると 7 の数字といわゆる ben-ich 接字 (T 168) が T 573 についており，DN 導入文字ではないこと

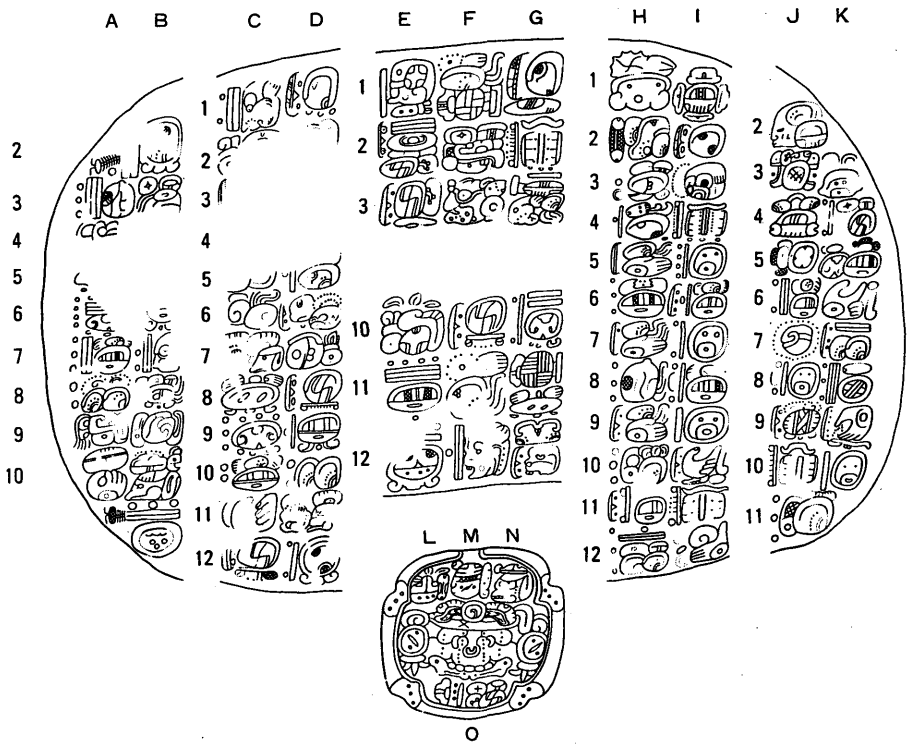


図9　祭壇 1　Alt. 1
[Graham 1978] より

がわかる。これとほぼ同じ文字が石碑38にも生起する (A3)。しかし石碑38の場合は9の数字がついており，そのつぎにIa王が生起している。もう1例，8の数字がついたものが祭壇1のOに生起する。7と8と9の数字がついた文字があり，7はIa王の父，9がIa王に関係しているとみることができそうである。

T 573 は Thompson によって hel と読まれた [Thompson 1971: 161]。ユカテクマヤ語の hel には「かわる」とか「継承」とかいう意味がある。筆者は以前ヤシュチランの碑文の分析で，この文字素に6，7，8といった数字のついた文字は，6代，7代，8代という王の御代を表わすと推測した [八杉 1979]。ここでもそれを表わすとすると，数字の順はあう。ただし，父は7で，子は9であるので，あいだにもう1人いることになる。その人物は8 Helの文字の前の祭壇1のLMNの文字が表わすとすると，ひじょうに都合がよい。

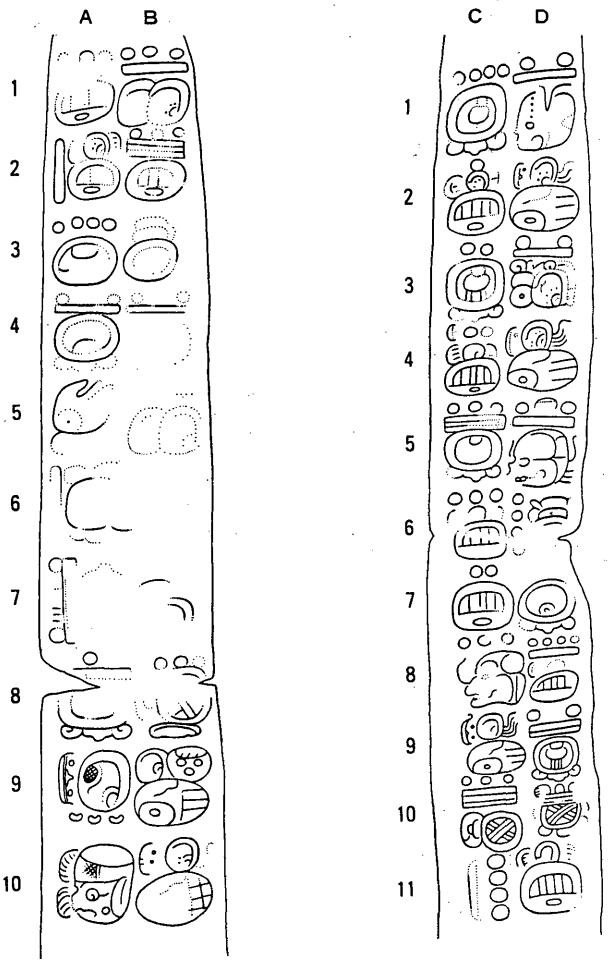


図10　石碑 25　St. 25
[Graham 1978] より

ところで，石碑25はほぼそれと同時代の日付をしるしている。

IS 以外は，260日暦と365日暦の組合わせによる日付表示，すなわちカレンダー・ラウンド(CR)でしか日付はしるされていないが，1，2，3，4というKatunの完了の文字と，D8C9の9 Katun完了という期間の完了表示を手掛りに，付表2でみるように日付は解釈できる。

8. 5. 18. 4. 0 7Ahau 3KankinというISの日

付は，現実の日付としてはあまりに早すぎるので，歴史以前の日付とみたい。ここで興味をひくのは，CR の 7Ahau 3Kankin である。この碑が刻まれた時代の 9. 7. 0. 0. 0 がちょうど 7Ahau 3Kankin の CR にあたり，それとの関係を意識したものに違いない。7Ahau 3Kankin という日が巡ってくるのは 2. 12. 13. 0 ごとであり，IS の日付と 9. 7. 0. 0. 0 までの間はその 8 倍となる。

9. 7. 0. 0. 0
8. 5. 18. 4. 0
1. 1. 1. 14. 0＝2. 12. 13. 0×8＝260×584

それは神聖暦といわれる 260 日暦と金星の周期の 584 の倍数になっており，金星の周期を考慮にいれたものかもしれない [cf. Berlin　1977]。

石碑25は，石碑38や祭壇 1 とほぼ同じ日付をしるしているにもかかわらず，Ia 王は石碑25に登場していない。しかし，不明の A5～B7 のあいだにしるされている文字のうちの A7 が，その形からみて，Ia 王を表わしている可能性が高いが，A9 の文字のあとにはふつう人の名が生起するので，B9A10 がこの石碑の主人物である可能性も否定できない。しかしながら，A10 と祭壇 1 の M が同じ文字であり，それはまた石碑38の B9a と同じとしたなら，この文字は人物の名ではなく，称号かそれに類する文字とみる必要がある。この文字はティカルの神殿 IV のリンテル 3 の D7, E6, さらにはパレンケの碑文の神殿の中央パネルの L5 や M2 などに生起する文字とも同じように思われる。

上のように考えられるのであるが，もし B9A10 が人物を表わし，それが，祭壇 1 の LMN の文字と同じとしたなら，年代的に解釈はすっきりしてくる。すなわち，父親は 7Hel である。それが登場するのは，子の Ia 王の最後の日付 9. 8. 0. 0. 0 の日付の節であるが，その日付は Ia 王に関係する日付であり，父親に直接関係する日付でないことは明白である。子の Ia 王は 9Hel であり，活躍する期間は 9. 4. 10. 8. 17 から 9. 8. 0. 0. 0 頃までである。親と子の間に存在するとみた石碑25の B9A10 の関係する日は 9. 5. 12. 0. 4 であり，これは年代的にみて Ia の幼少時代である。それゆえ B9A10 の人物が親と子の間で活躍したとみることができる。ところが，9. 5. 12. 0. 4 は Ia 王に関する日である。それは第 II 期の石碑 3 から明らかである。つまり，石碑 3 では 9. 6. 12. 0. 4 という日付があり，そこに Ia 王が登場しているからである。問題の石碑25でも，その日に関係する 9. 5. 12. 0. 4, 9. 6. 12. 0. 4, 9. 7. 12. 0. 4, 9. 8. 12. 0. 4, 9. 9. 2. 0. 4 という日付があり，9. 5. 12. 0. 4 は Ia 王に関する日であることはまちがいない。それに，祭壇 1 の LMN と石碑25の B9A10 は文字か

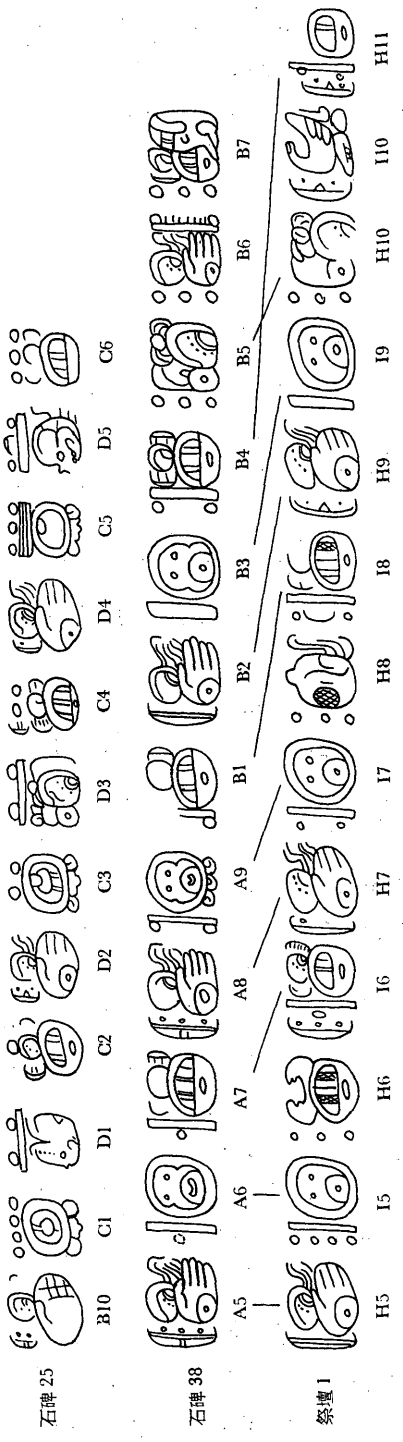


図11　石碑25，38，祭壇1の比較

らみてひじょうに異なるので，まったく違う可能性のほうが強い。それゆえ，B9A10をIa王と異なる人物とみて推論した上の説はうけいれがたい。しかしその場合でも以下の推論は成立つ。祭壇1に登場する父親の文字は，月の文字Macと同じであり，Macという名前であったとみることができるのであるが，彼が亡くなったとき，Ia王は幼少であり，Macのおそらく兄弟が後見したとみる推論である。それは16世紀以降の文献，たとえばLandaなどが書いていることから推測される事態である。

「首長が死んで，息子があとを継ぐ年齢に達していないとき，首長の兄弟がいれば，最年長，または最も利発なその兄弟が後を継いで支配し，息子が成長したときに備えて習慣や祭礼を彼に教えた。この兄弟は，たとえ後継者である息子が統治できる年齢になっても，引きつづきその生涯にわたり支配力を持っていた。」[ランダ 1982: 333]

いわゆるHel文字（T.573）を主字とする問題は解決がついたようにみえるのであるが，実はそうではない。違う解釈についてはのちに述べることになるが，もう1つ，祭壇1のE2には35の数字のついたHel文字が生起し，同じくE3には，数字のかわりにT1が前接字としてついた文字が生起している問題についてもふれておかなくてはならない。9. 4. 10. 8. 17 7Caban 5Kayabのこの節にはIa王が生起しており，35がついた文字はIa王と関係するとみられるからである。それゆえ，いわゆる

Hel 文字が王の世代を表わすとみた仮説が正しいといいきれないのである。この節の意味が現状では理解できないので，35Hel がどのように Ia 王と関係するかわからないが，第Ⅱ期の IIb 王または IIb 王が後を継いだとみられる人物に 38Hel がついているのと何らかの関係があることは疑いようがない。ところで Hel 文字に関して，最近同様の説を Riese [1984] にみることができたが，時代の下った IIb 王のほうに数字の大きな数がついているところから，Riese はナランホでは2つの数え方があったのではないかと推測している。ところが，ここで注意しなければならないのは，35, 38の数字がつく文字のほうは，T 21 の接字が T 573 (Hel) の後についており，7, 8, 9 の数字のついた文字と違いをみせていることである。さらに，7, 8, 9 の数字のついた文字のほうは，T 21 が前についているばかりでなく，いわゆる ben-ich 接字がついている。この違いは大きい。それを無視して，ナランホには2つの世代の数え方があったのみるのはおかしいといわなければなるまい。石碑24に生起する38の数字のついた Hel 文字の後には，名前の文字が生起する。それが名であることは，その後にナランホの紋章があることからわかる。その前には IIb 王の名前があることから，この名の表わす人物は IIb 王の父親と推測できる。その推測が正しいとすると，この人物はほかには出てこず，また妻たる「ティカルの女性」のほうが出現回数が多いので，すぐさま亡くなったとさらに推測を重ねることができる。B16 に人物が下向きになった文字があることもそういう見方をとらせる。そうすると，そういうところに，接字の取り方の違いが反映されているのかもしれない。

さて石碑25をみると，C1D1 は CR で始まり，1 Katun の文字，完了をあらわす文字がつづき，そして CR が生起し，2 Katun, 完了を表わす文字という順になっているので，完了の文字は前について，CR から完了の文字までが1節を構成するように思われる。ところが，よく似た文が生起する石碑38と祭壇1の同似文を比べると，それは正しくないことがわかる(図11)。

この比較で文の切れ目がはっきりする。すなわち，完了の文字で節は始まるのである。この文字は T 1 の文字が接字としてついていることに注目しておきたい。T 1 はユカテクマヤ語の3人称形の u と広く認められている。言語事実と照らしあわせると，T 1 は文頭，句頭にくるとの予測をたてることができるのであるが，ここでその1つの証拠がえられたとみることができよう。

ここで Ia 王の生涯をまとめておきたい。まず Ia 王の関係する日を取り出すと，次のようになる。

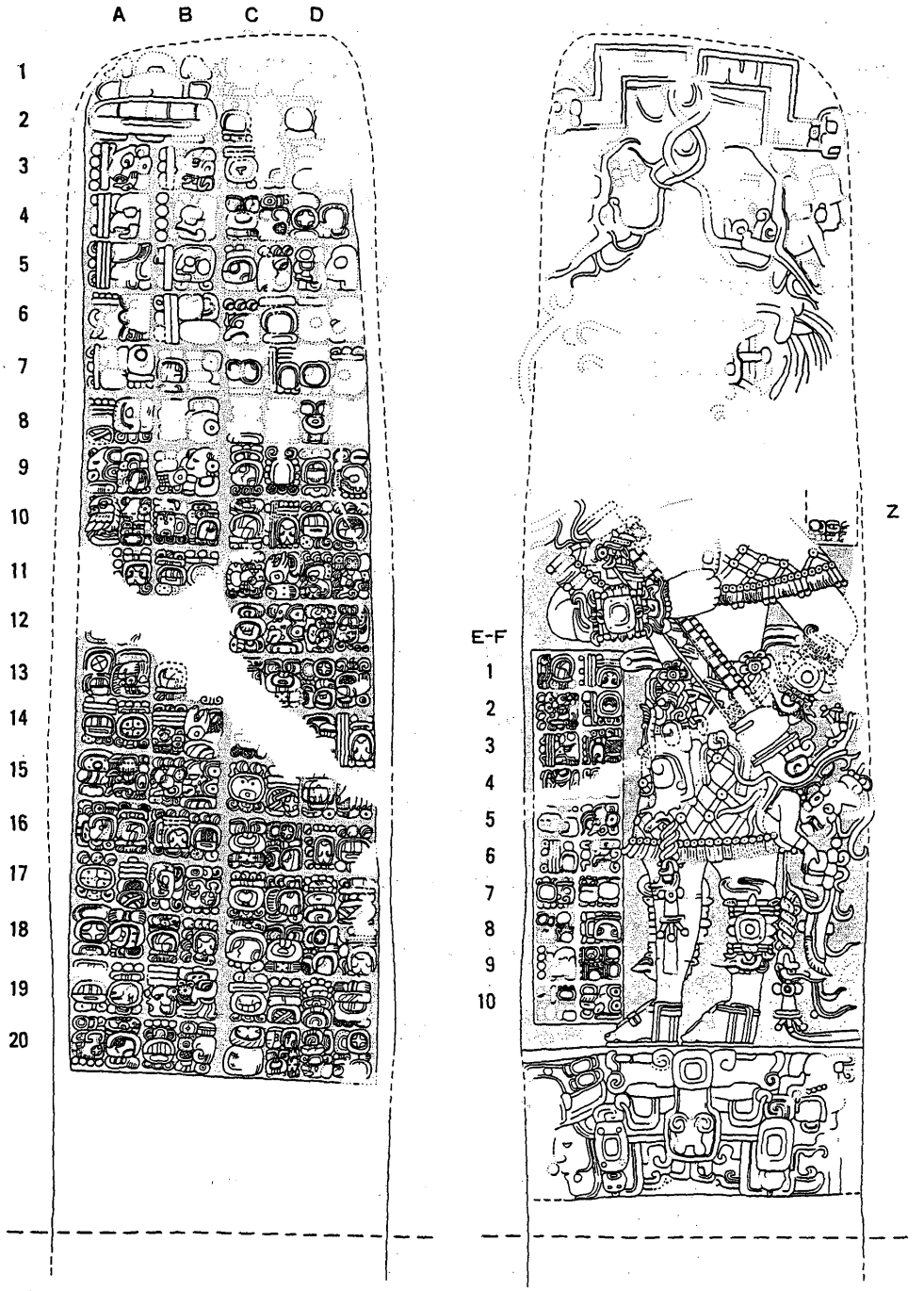
8. 5. 18. 4.　0　　7Ahau 3Kankin　　石　碑　25

9. 4. 10. 8. 17	7Caban 5Kayab	祭 壇 1
9. 5. 10. 1. 3	7Akbal 11Zotz'	祭 壇 1
9. 5. 12. 0. 4	6Kan 2Zip	石 碑 25
9. 6. 0. 0. 0	9Ahau 3Uayab	祭 壇 1，石 碑 38
9. 6. 12. 0. 4	4Kan 7Pax	石 碑 25，石 碑 3
9. 7. 0. 0. 0	7Ahau 3Kankin	祭 壇 1，石 碑 38
9. 7. 12. 0. 4	2Kan 7Zac	石 碑 25
9. 8. 0. 0. 0	5Ahau 3Ch'en	石 碑 38，祭 壇 1
9. 8. 10. 0. 0	4Ahau 13Xul	石 碑 25
9. 8. 12. 0. 4	13Kan 7Xul	石 碑 25
9. 9. 0. 0. 0	3Ahau 3Zotz'	石 碑 25
9. 9. 2. 0. 4	12Kan 17Zip	石 碑 25

すでに述べたように，最初の日は現実の日ではないと考えられるので，Ia 王に関係する最初の日は，9. 4. 10. 8. 17 7Caban 5Kayab ということができる。通常ある人物に関係する最初の日は誕生日とみることができるが，ここでも誕生日とみてなんら問題はないように思われる。9. 5. 12. 0. 4 6Kan 2Zip は Ia 王にとってもっとも重要な日であることは，その日の 1Katun 記念，2Katun 記念，3Katun 記念，3Katun 半記念を石碑25でしるしていることから確かである。即位の日とみて問題ないであろう。しかしこれらの日付すべてを Ia 王の生存中のものとみると，問題が生じてくる。すなわち最初の日から最後の日までは，4.11.9.7 となり，約91年となる。これは人の一生としては少し長すぎるように思われるからである。石碑38と祭壇1では 9. 8. 0. 0. 0 であるので，Ia 王はそのころまでしか生存しなかったのではなかろうか。9.6.0.0.0 や 9.7.0.0.0, 9.8.0.0.0, 9.8.10.0.0 は区切りのいい日であり，Ia 王個人に直接関係する日ではない。いわば時の里程標である。そうすると残りは，9. 5. 10.1.3 7Akbal 11Zotz' だけになる。この日は Ia 王に結びつく日ではないように思われる。おそらく，Ia 王の父 (Jaguar-Mac) の死，またはのちにみる Ib 王に関する日のように思われる。

1.2 Ib 王，Ic 王

Berlin が同定した Ib, Ic 王は，リンテル1に登場する。両者はカラコルの石碑3にも登場する。カラコルの石碑3の IS は 9. 6. 12. 4. 16 5Cib 14Uo で，その日付の次には T 740 を主字とする文字が生起し，Berlin が Ib とした文字が生起している。T 740 を主字とするこの文字は「生まれた」という意味であることはすでに認め



Stela 3: Back.　　Stela 3: Front.

図12　カラコル石碑 3
[Beetz & Satterthwaite 1981] より

られている。つまり，Ib はその日に生まれたのである。カラコルの碑文を研究した Beetz は，この人物を God C-Star とあだ名をつけている [Beetz 1981]。一方，Berlin は Car. V（カラコル王 V）としている [Berlin 1973]。それから3節目にまた T 740 を主字とする文字が生起し，それに続いて，Berlin が Ic とした人物が登場する。その文字は Ic とまったく違った文字であるが，9. 9. 4. 16. 2 10Ik 0Poop の日付の節に，その文字と並んで Ic を表わす文字が生起し，その日を境にして，その後は Ic を表わす文字にかわることから，その文字は Ic の別名であり，Ic の幼少名ということができる。

ここでカラコルの石碑3の日付を計算しておく。

9. 6. 12. 4. 16 6. 7. 4	5Cib 14Uo	A1–A8a
(9. 6. 18. 12. 0) 12. (4. 8)	8Ahau (8Mol)	B11b–A12a
(9. 7. 10. 16. 8) 3. 12. 0	9Lamat 16Ch'en	A14b–B14a
(9. 7. 14. 10. 8) 5. 3. 4	3Lamat 16Uo	A17
(9. 7. 19. 13. 12) (1. 5. 2. 10)	8Eb 15Zotz'	A19b–B19a
(9. 9. 4. 16. 2) 15. (6)	10Ik (0Poop)	C3
(9. 9. 5. 13. 8) 3. 14. 17	(4Lamat) 6Pax	D7
(9. 9. 9. 10. 5) 7. 15	3Chichcan 3Ceh	D10b–C11a
(9. 9. 10. 0. 0) 3. 4. 4	2Ahau (13)Poop	C15
(9. 9. 13. 4. 4) 17. 1	9Kan 2Zec	C17
(9. 9. 14. 3. 5) 4. 12. 18	7Chicchan 18Zip	C19
(9. 9. 18. 16. 3) 1. 1. 17	7Akbal 16Muan	F2–E3
(9. 10. 0. 0. 0)	1Ahau 8Kayab	E7

4. 7. 0		
(9. 10. 4. 7. 0)	8Ahau 8Zec	F9ab
−19. 8. 18		
(9. 9. 4. 16. 2	10Ik 0Poop)	E10ab

カラコルのこのテキストから，Ic は 9. 7. 14. 10. 8 3Lamat 16Uo に生まれたことがわかる。Beetz は Ic を Lord Storm-Water-Moon と名づけ，Berlin は Car. W（カラコル王 W）とした。それと同じ日がリンテル1の (A1) B1 にあり，Ic が C1 に生起している(図13)。

そこで，この日付の節は，A2 は欠けているが，そこには T 740 があったはずで，誕生をしるした節であるとみることができる。C4 には Berlin が Ib とした文字が生起する。カラコルの石碑3のテキストから，この人物は母親と推測できる。F3 には Berlin が見逃した人物が生起する。これを Beetz は Lord Water と名づけている。Berlin はこれにふれていないが，Berlin の命名法でいうと，Car. U となろう。そのすぐ後に Ic についている文字 (C2) と同じ文字が生起する (E4)。これはカラコルの紋章文字と考えられている (Beetz 1981)。このリンテルでは，Ic (Lord Storm-Water-Moon, Car. W), Ib (God C Star, Car. V) と子—母の順にならび，つぎに Lord Water が生起している。マヤのテキストでは一般的に子—母—父の順にならんでいるので，母—子，父—子の関係をしめす文字はないが，同じようにこの三者を子，母，父とみてよいと思われる。それを検証するために，カラコルのテキストをみることにする。

リンテル1の F3 の文字 Lord Water (Car. U) は，カラコルでは 9. 5. 19. 1. 2 9Ik 5Uo から 9. 8. 10. 0. 0 4Ahau 13Xul にかけて登場する（石碑1，石碑6，石碑14)。Beetz は 9. 5. 19. 1. 2 9Ik 5Uo を即位日と推測しているが，筆者はこの日を誕生日とみたい。それは第1に，誕生日とみた日から数えると，9. 6. 0. 0. 0 は 1katun 目であるが，その日付をしるした石碑1に (1) katun の文字があり，次に 9. 8. 19. 1. 2 までは 3 katun 目にあたるが，9. 8. 10. 0. 0 の日

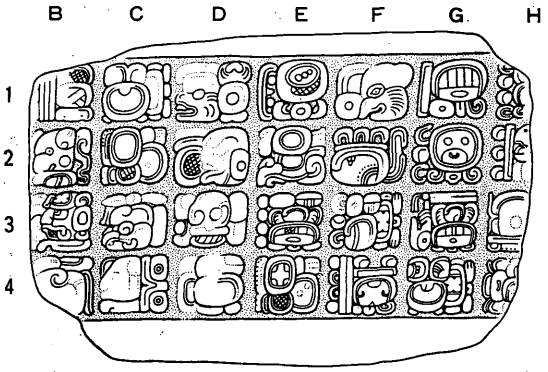


図13　リンテル1　L. 1
[Graham 1978] より

に関する節で 3 katun表記があり，さらにまた，ナランホのリンテルの 9. 10. 0. 0. 0 の日の前の節に 4 ben-ich katun 表記があることから，誕生日から数えるとその表記はうまくあうからである。Proskouriakoff は，いわゆる ben-ich katun 表記は年令を示す文字と推測した [PROSKOURIAKOFF 1963: 153]。カラコルでは ben-ich 接字はないが，この場合 ben-ich katun 表記と同等とみると，Proskouriakoff の説に矛盾はない。Brinton はマヤでは年令を katun できき，katun で答えることをしるしており，言語的にも裏づけられる。

> ...To ask one's age the question was put *haypel* (sic) *u katunil*? How many katuns have you? And the answer was, *hunpel* (sic) *katun*, one katun (twenty years), or, *hopel* (sic) *in katunil*, I am five katuns or a hundred years old, as the case might be. [BRINTON 1882: 53]
> （ここで pel はppel または pel [p'el] と書くべきである）

第2に，9. 8. 5. 16. 12 5Eb 5Xul の節に，即位の文字と認められている T 644 に似た文字があるばかりでなく，即位に関する文字とみてよい T 168: 518: 130 の文字，T 168: 60: 23 (?) の文字があることから，この日が即位日とみられるからである。

T 168: 518: 130 については次の章でふれることにし，T 168: 60: 23 が即位に関する文字とみることができるのは，ナランホの階段碑文の U2b の文字からである。U1～V2a には，1. 13. 10 の DN, 8Ik 5Kankin という日付，1 Katun 記念の文字，それに Ic の文字が生起するところから，日付を特定できる。

(9. 10. 3. 2. 12	2Eb 0Poop)	
1. 13. 10		U1
(9. 10. 4. 16. 2)	8Ik 5Kankin	V1

カラコルの石碑3の C3 に生起する日付は，10Ik 0Poop で 9. 9. 4. 16. 2 と計算から導くことができた。この日はすでにふれたように，幼名に加え新しい名を得た日である。その日からちょうど 1 Katun たった日が HS の日となっている。HS の U2b の文字はこれまで知られている即位を表わす文字とは違うので，即位とみることには問題があるかもしれないが，さきにみたように，即位に関するとみてよい文字が3つ生起することから，これを即位の文字とみてもよいように思われる。これ (U2b) とさきほど述べた T 168: 60: 23 が同じ文字とみられるからである。

そこで Lord Water (Car. U) の略歴をしめすとつぎのようになる。

9. 5. 19. 1. 2	9Ik 5Uo（誕生）
9. 8. 5. 16. 12	5Eb 5Xul（即位）
9. 8. 10. 0. 0	4Ahau 13Xul（カラコルでの最終言及日）

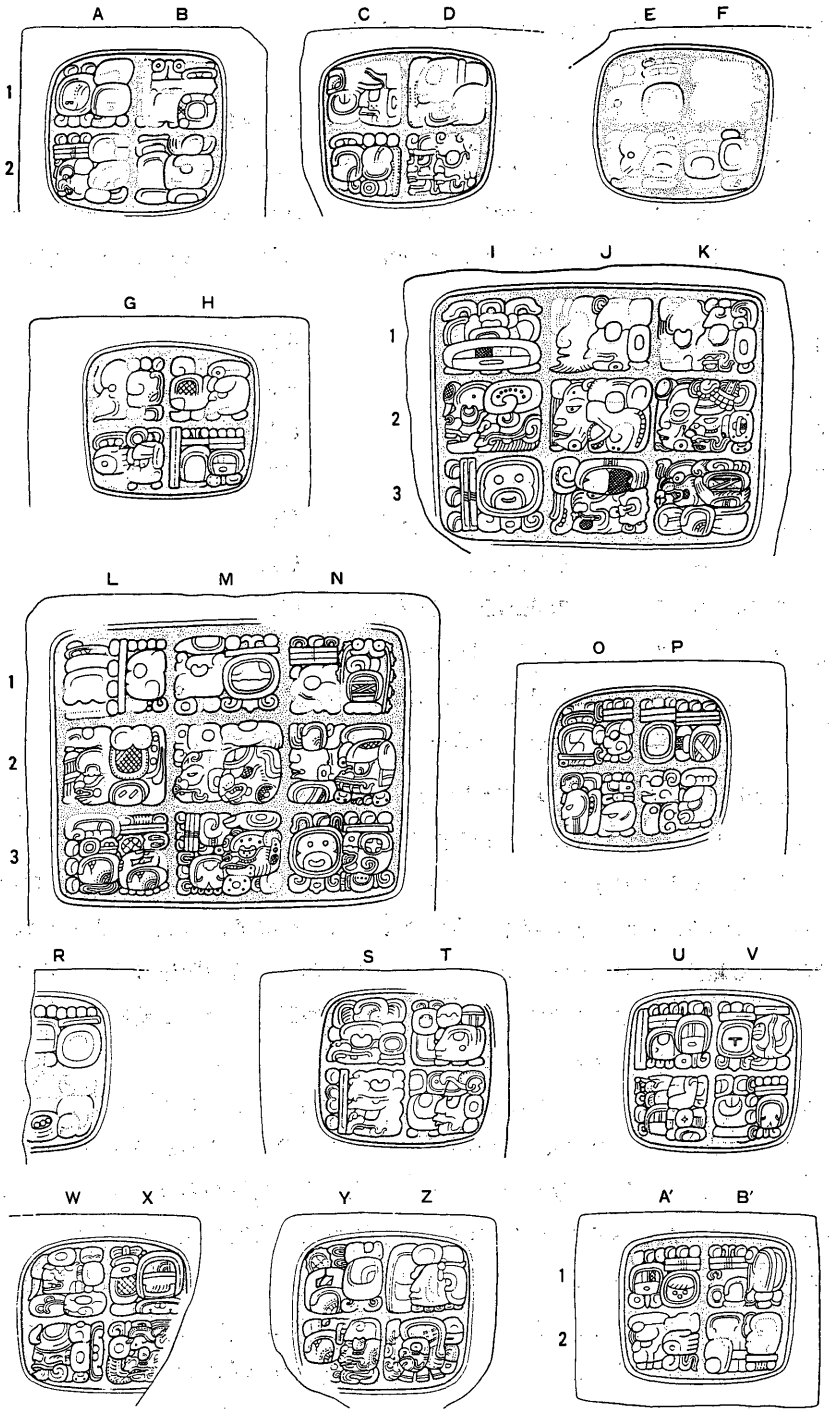


図14 階段碑文
[GRAHAM 1978] より

Ib, Ic については，石碑3からつぎのようになる。

Ib		
9. 6. 12. 4. 16	5Cib 14Uo	A1–A8a（誕生）
9. 6. 18. 12. 0	8Ahau 8Mol	B11b–A12a
9. 7. 10. 16. 8	9Lamat 16Ch'en	A14b–B14a
9. 9. 9. 10. 5	3Chicchan 3Ceh	D10b–C11a（最終言及日）
Ic		
9. 7. 14. 10. 8	3Lamat 16Uo	A17（誕生）
9. 7. 19. 13. 12	8Eb 15Zotz'	A19b–B19a
9. 9. 4. 16. 2	10Ik 0Poop	C3, E10a（即位）
9. 9. 5. 13. 8	4Lamat 6Pax	D7
9. 9. 10. 0. 0	2Ahau 13Poop	C15
9. 9. 13. 4. 4	9Kan 2Zec	C17
9. 9. 14. 3. 5	7Chicchan 18Zip	C19
9. 9. 18. 16. 3	7Akbal 16Muan	F2–E3
9. 10. 0. 0. 0	1Ahau 8Kayab	E7
9. 10. 4. 7. 0	8Ahau 8Zec	F9ab

この三者を親子とみると，Ib が18才のときにカラコルに来て，22才のときに Ic を生んだ。そのとき父 Lord Water は35才であった。彼は46才の時に即位し，母 Ib は57才で死んだ。そして息子 Ic は30才の時に即位した。母と子の年令は矛盾しないが，父とみた Lord Water は少し年がいきすぎているように思われる。しかしそれは充分許容される範囲であり，ナランホのリンテル1でみた三者の関係はみとめられうる。そこでこれをもとに，さらに他のカラコルの碑文を検討し，その王朝の系図をつくると，図15のようになるであろう。

Lord Water は祭壇1の H3 にも登場する。その前の文字は cab を主字とする文字で，この文字のあとにはよく名前の文字が生起するので，まちがいないであろう。そのあとには Ia 王の名の文字がある。それゆえ，その当時からカラコルとナランホは関係をもっていたとみることができる。この両者を年代的に比べると同時代であるが，両者の最初の日をみると，

9. 4. 10. 8. 17	7Caban 5Kayab (Ia 王)
9. 5. 19. 1. 2	9Ik 5Uo (Lord Water)

となり，約28才の開きがある。もしかすると，両者は兄弟であったかもしれない。両

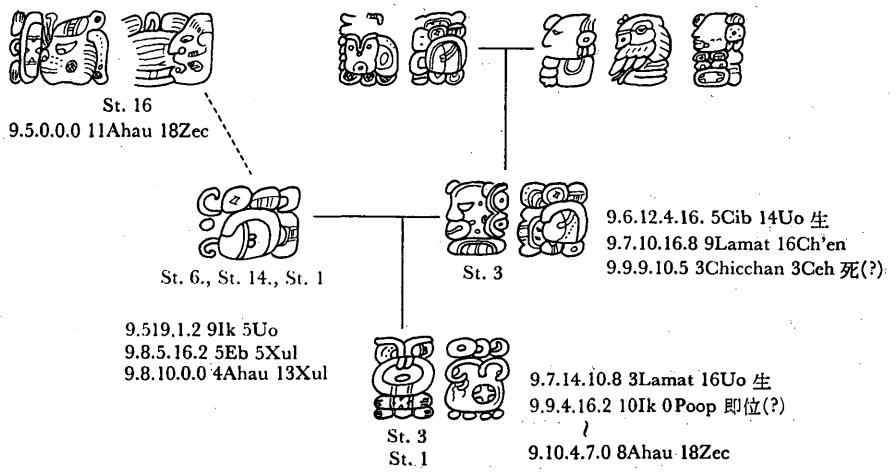


図15　カラコルの系図

者が兄弟だというのは，Lord Water の前の王 Lord Jaguar の文字のつぎの文字は mac の文字のようであり，Ia 王の親も Mac であるから，両者は同一人物である可能性が高いからである。もしそうなら，両者は兄弟の関係となる。祭壇 1 の I3 が両者の関係をしめす文字のように思われる。

ところが，Lord Water と Lord Jaguar が親子関係であることを明示している個所がない。それゆえ，Lord Jaguar—Ia—Lord Water ということも考えられる。その方が28才という年齢の開きをうまく説明できる。さらに祭壇の F3G3 の文字は，カラコルの石碑16の A15～B16 までの文字とほぼ同じであり，Lord Jaguar を表わしている可能性が高い（図16)。祭壇の E3 の主字は hel であり，それが文字どおり「継承」という意味を表わすとすると，ジャガー王を継いだのが Ia 王だということになるからである。

そうなると Hel にまつわる考察をかえる必要がある。7 Hel は Mac という人物のうしろに生起している。8 Hel の文字も句の最後である。すると，石碑38の 9 Hel もそこで句は切れ，そのあとの Ia 王とは直接に結びつかないとみることができる。

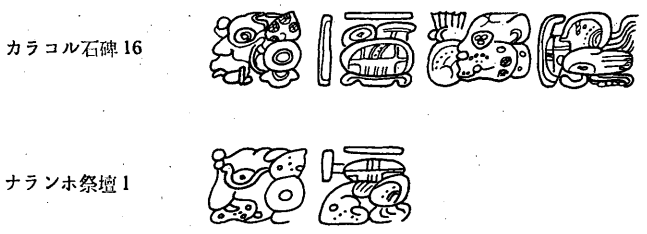


図16　祭壇 1 とカラコルの石碑16の比較

9 Hel の前には2文字あり，通常なら CR の文字が生起するのであるが，どうもそうでないように思われる。残念ながら識別できないので，想像するしかないが，もしそこに Lord Water の文字が刻まれているとしたら，彼こそ 9 Hel の人物とみることができる。Ia 王は実は 8 Hel であったとみればよい。祭壇1の L～0 は祭壇の中心にあり，中心人物である Ia 王のことを述べていてなんら不思議でないからである。以上の推測が正しいとすると，三者の関係と Hel 文字の関係は実にぴったりと合致する。

その推測が正しくないとしても，少なくともその当時からカラコルとナランホは関係をもっていたとみることはできる。カラコルでは 9. 3. 0. 0. 0 から文字資料があることを考えあわせると，ナランホはカラコルから文字をえたとみることができよう。

リンテル1の E1E2 にはいわゆる月の文字と動物の文字が生起している。これと関係があると思われる文字がカラコルの石碑6の C23 から B24 と，石碑1の G1H1 にある。石碑1の場合，その前に Lord Water の頭字体とみられる文字が生起し，その後には Ic (Lord Storm-Water-Moon) が生起するので，その文字は Ib (God C Star) に関係する文字ではないかと推測される。リンテル1の問題の文字のまえには Ib を表わす文字があり，あとには Lord Water の文字があることから，問題の文字はカラコルのと同じ文字で，Ib の名の延長だと考えたい。

階段碑文 (HS) には Ic が少なくとも3度登場する。そのうちの1つはさきにみた U1～V2 の節に登場する。あと2つは C1a と T2a に生起するが，HS にはそのほかカラコルの石碑3と共通の日が2つある。そのうちの1つは 9. 10. 0. 0. 0 1Ahau 8Kayab の期間の終了をしるした節で，HS のほうはそのあとの節がなく，石碑3のほうは判読不可能であるので，ここではとりあげない。もう1つの日 9. 9. 18. 16. 3 7Akbal 16Muan のすぐ次に生起する文字はほぼ同じであるので，同じことをしるしたものとみることができる (HS の M1b～N, カラコルの石碑3の F2～F3)。そのあとに生起する文字は少し異なることは確かであるが，石碑3のほうが判読できないので，どのようにいいかえたのか残念ながらわからない。

階段碑文では，たとえばヤシュチランやドスピラス (Dos Pilas) のように，征服のテーマが好まれるように思われるが，カラコルとの関係を考えると，果して征服をテーマにしたものか疑問である。階段碑文で，碑文に直接関係しないが，これに関することで興味深いことが2つある。1つは階段碑文は13部分から成立つが，その順が不明であること。すなわち，碑文にしるされた日付が，日付どおりに並んでいないばかりでなく，日付が結びつかないのである。これを説明しようとすれば，階段碑文の一

部をもちだし，意味のない並べ方にしてしまったという以外にないであろう。2つ目は，13番目の碑文がウカナルから発見されたことである。1つ目の碑文の一部をもちだしたとする推測を裏づける事実であるが，さらに征服ということを考えさせる発見である。第II期の碑文にウカナルの人物がおそらく捕虜として登場する。捕えた方のナランホの碑文の一部を，捕えられた方のウカナルにわざわざもっていったということになる。とはいえ，もっていったのは事実であるが，これをその時と断定するわけにはいかない。しかし考えれば奇妙なおこないである。階段碑文の内容がよく理解できないので，征服をテーマにしているのかどうかわからないが，これまで知られている征服に関する文字はみあたらないので，征服に関するものだと積極的にいうことはできない。

祭壇1には同じ文字が2度でてくる。F2 は F11G11a と同じである。しかし後者は2ますにわたっている。F11b は C8 と同じ文字であるが，半ますしか占めていない。文字はふつう1ますに1文字がはいるが，このように文字ますは文字を限定しない。それは F3G3 の文字についてもいえる。これはすでにふれたようにカラコルの石碑16の A15〜G16 と同じ文字とみることができる。カラコルでは4ますを費やしている。

2. 第　II　期

第II期はティカルと深いつながりをもつ。第II期は異なる石碑に共通する節や句があり，わかりにくいので，年代順に線形にテキストをならべかえることにする(図17)。

それぞれのテキストの文字数は以下のようになる。ここでの文字数は，正確にいうと，文字ますの数であり，文字の数ではないことを断わっておく。つまり，判読不可能な箇所では文字のますは数えることができるが，それぞれのますにいくつ文字がはいっているか数えようがないので，文字ますの数で数えている。ひとつのますにはだいたいひとつの文字がおさまっているが，一文字以上はいっていることもあり，ますの数よりはおおくなることは確かであるが，ほぼ文字の数に一致するので，これによって文字の概数はわかるはずである。

石　碑	文字ます数	暦の文字
石碑 24	82	29
石碑 22	91	48
石碑 29	104	30＋
石碑 20	10	2

石　碑　3	71	22＋
石　碑　21	61	12＋
石　碑　1	74	23＋
石　碑　23	113	30＋
石　碑　30	106	40
石　碑　5	15	2
石　碑　28	139	30＋
石　碑　31	138	26＋
石　碑　18	96	34
石　碑　41	5	3
	1105	331＋

判読不能箇所に暦の文字があり，その数が不明であるので，はっきり数えられる数に＋をつけている。なお暦に関する文字は第V章でしるしたので，完了の文字以外は図では省いている。図にしるしていないのは，つぎの箇所である。

石　碑　29	(表)	A1～A19	19文字
石　碑　3	(表)	A1～A9, B1～B5	14文字
	(横)	C1～F3	21文字
石　碑　21	(裏)	C1～F8	38文字
石　碑　1	(表)	A1～A9, B1～B3	12文字
	(横)	C1～E5, F7～F15	58文字
石　碑　23	(表)	A1～A18, B～C, D1～D7	28文字
石　碑　2	(横)	D1～D9	17文字
石　碑　5	(表)	A1～A8, B1～B7	15文字
石　碑　28	(裏)	I1～J15	30文字
石　碑　31	(表)	A1～A11, B1～B7	18文字
	(裏)	C1～J15	120文字
石　碑　41	(表)	B2～B3	2文字
			392文字

計算では第II期の最初の日付は 9. 12. 10. 0. 0 となるが，この日付は確かでないし，しるされている文字も不明であるので，ここではふれないことにする。

2.1　実質上の最初の日付は 9. 12. 10. 5. 12 4Eb 10Yax で，これは石碑24，29，

3の3カ所にしるされている。その節に登場する人物は女性で，ティカルの紋章文字をもつところから，「ティカルの女性」とみることができる。その節の最初の文字はいまだ解読されていないが，ティカルからナランホへ来たことに関する文字と推測できる。しかしながらこの文字と同じと思われるものが，前節でみたカラコルの石碑3の B14 と C11b に生起している。手がカラコルの場合のほうがとじているが，人差指をのばし，中指を親指のほうにまげている特徴を共有しているところから，同じ文字とみることが可能かと思われる。しかしカラコルの2例の下接字は異なり，またそれはナランホの場合とも異なるように思われる。それらの接字は交替可能の接字とみるか，それともその接字によりまったく異なる意味となるのかは大変興味深いことであるが，どちらにしても，ナランホのほうの下接字の細部が不明であるので，この下接字のあるなしにより意味がかわるかどうか判断しなくてはならない。文字の3つの構成素のうち2つが同じ文字素で，違うのはそのうちのもっとも小さな構成素である下接字だけであるので，たとえその下接字で違った意味を伝えようとしても，それはこの文字の意味をがらりとかえるものではないと推測するのがふさわしいように思われる。その文字が生起してのち，カラコルの場合は約3年，ナランホの場合は約5年後に，子供が誕生している。ナランホの場合もカラコルの場合も，女性が主語であることに解決の糸口があるのかもしれない。そうすると，この文字は来たことを意味したとしても，ティカルからナランホに来たこと以上のこと，つまり結婚をしに来たのでないと，そのすぐつぎの節にカラコルの場合だと誕生の節が生起することの意味がなくなるように思われる。しかし結婚を表わすと考えられている文字には石碑23の F13 があり，その決定はいましばらく保留にしたい。手の文字という手掛りがあるし，他の遺跡にあらわれる場合をくわしく検討していないので，そうした手掛りを研究したあと，もう一度この問題に戻りたい。

「ティカルの女性」と名づけた文字は3つの文字からなる。その生起場所は次のようになる。

石　碑　24　　C9～C10, G10～G11, A6～A8, D6～D7, D17～D18
石　碑　29　　I4～I5, H13～H14

このように少なくとも7例数えることができる。3つの文字のそれぞれの主字は同じであるが，それにつく接字に少しずつ変化がみられる。T 1002b の文字は女性を表わす文字と考えられ，額の前とこめかみの後に網目の模様をもち，耳飾りをつけている。頬に IL の印をもつものとそれが識別できないものの2つの形がある。後接字は棒に3つの丸がついているが，はっきりみえる文字には3つの丸の上と下には点の

縁取りがみえるので，それらは装飾要素であり，6を表わす文字素と考えられる。この文字は書き方に若干差があるのみで，まったく同じ文字とみなすことができる。

そのつぎの文字はいわゆる「空」の文字 T 561 が主字で，上接字として ben-ich 接字の変化形，後接字として T 24 または T 232? がついている。上接字の右の要素はいわゆる ben 文字であるが，左の要素は識別できない。1例，石碑29の I13 では網目模様がみられ [図 17–13]，ben-ich とは異なることがわかるが，その他の例では細部が不明であるので，どのような交替がおこったか不明である。T 24 と交替する接字については T 232 としたが，Thompson のカタログではその文字そのままの形は登録されていない。ティカルではこの「空」の文字がよく生起し，「空の家族」とでもいえるほど，王朝の特徴となっているが，ここでもそのすぐ後にティカルの紋章文字が生起し，ナランホに来たこの女性はその一員とみなすことができる。

ティカルの紋章文字では，これまで認められてきた紋章文字の同定に役立つ接字群の交替例をみることができる。しかし，いわゆる「水グループ」の接字の T 35 から T 41 にぴったり分類できる文字は生起しない。1例「水グループ」の接字ではなく，女性を表わす T 1000F (T 1000 に分類された文字は多いので F をつける）に置き換わった例をみることができる（石碑24の D18 [図 17–23]）。

ティカルの女性の前に1例以上生起する文字群がある。このうち T 1000, T 1001, T 1002 の文字が生起する句はこの女性の名の延長，たとえば称号などを表わすものとみたい（石碑29の G8〜F10 [図 17–2]，石碑24の A5 [図 17–19]，E4〜E5 [図 17–19]，E16 [図 17-23]）。このうち石碑24の E4 には，T 181 が接字としてついている。この接字は動詞の過去形をあらわす接字で -ah と読まれている。しかしこの文字を動詞とみることはよくない。それは D11 の文字において生起する T 181 についてもいえる [図 17–19]。D11 の前の文字は父一子の関係を示す文字であり，この場合も「ティカルの女性」の父親を示す句とみとめられる。その句が動詞で始まるのは納得しがたいからであり，それはいま問題にした E4 でもあてはまる。

石碑29の G8 [図 17–2]，石碑24の A5 [図 17–18]，E16 [図 17–23] は同じ文字とみられるが，接字に違いがみられる。石碑24の2つの例の接字はほぼ同じである。A5 の左下の要素を別にすると，T 35 とみられる文字素が主字の上か，接字 T 182 の上，いいかえれば主字の左上に置かれるかの違いをみせている。上と左の位置が同価ということを示す1例である。しかし左上隅をしめる接字は同じではないので，左上隅をしめるほうをさきに読むとした読み順の原則にあわない。石碑24の A5 の上接字 T 35 が左上隅をしめるように描くと，その文字素は横にまのびしてしまい，美しくなくな

る。たとえ T 35–T 182 という読み順があり，左上隅をしめるほうをさきに読むという原則があったとしても，美しさを犠牲にしてまでそれに従うことはなかったのではなかろうか。石碑29の方は幾分異なる接字がつかわれている。

石碑24の B8〜B9 [図 17–1] と石碑29の H3〜H4 [図 17–4] は同じ句と思われる。すなわち，C8 と I3, B9 と H4 が同じであり，それにつづく文字が同じであることと，B8 と H3 の場合，右上が同じで，その他の部分は不明であるが，形が似ていることから，B8 と H3 も同じ文字と考えられる。そうすると，暦の文字のところで3つの丸の文字素を飾りの要素とみたが，ここでもそれがあるなしで意味に変化がない飾りの要素とみなすことができる。この句の最後の文字の主字はナランホの紋章文字の主字であるので，少なくともナランホに関することを述べた句とみなせよう。

「ティカルの女性」の母と父をしるしたとみられる節が，石碑24の E7〜D13 [図 17–19] と石碑29の E1〜E10 [図 17–20] の節にみられる。石碑29のほうの母を言及したところは前半部が不明であり，わずかに後半の2文字が識別できるだけである。石碑24の母を言及した部分の後2字 (E9D10) は石碑29では父を言及した部分の最後についており(E9E10)，この2文字は母に直接関係する部分でないことがわかる。この最初の文字は西を表わす文字であり，後のほうは方角を表わす文字とともによく生起する文字である。父母が西の人という意味と考えることができ，それゆえ，母の部分に生起してもいいし，父の部分に生起してもよかったのではなかろうか。石碑29の E2 の文字は石碑24にはない文字である。石碑24と石碑29の父を表わす句を比べると，両者に共通するのは，石碑24の D11E11 と石碑29の E6E7 であることがわかる。それゆえこれが父の名を表わすもっとも大事な部分であるとみることができる。E11 の右部分を E7 では頭字体にかえているが，これは神 K の文字であり，そして右の要素はいわゆる空の文字であるところから，ティカルの家系に関する文字とみることができる。そうすると父の名を表わす部分は D11, E6 と特定できる。父を表わす句の最後はティカルの紋章文字が生じるので，「ティカルの女性」の両親はティカルの人であり，高位の人であったとみられる。しかし，その名はティカルの碑文に登場しない。しいてあげれば，祭壇5によく似た文字が生ずる。年代的にもあう。

9. 13. 3. 0. 0 9Ahau 13Poop の節は完了の文字のつぎに T 528. 528 を主字とする文字が生起し，「ティカルの女性」の名がつく。その 1 Katun 後の 9. 14. 3. 0. 0 7Ahau 18Kankin の日に同じ T 528.528 を主字とする文字が生起している。1 Katun たったことを記念する節である。(9. 13. 3. 0. 0) 9 Ahau 13Poop はティカルの神殿 I のリンテル3のテキストの冒頭の日であり，ナランホの石碑29の場合とほぼ同じ文字

(T 16. 124: 528. 528: 314b) が生起している。ティカルのほうは下接字としてT 314bがあるが，これはすでにみたように装飾要素であり，意味に変化は生じないことは確かである。上接字に少し違いがあるように思えるが，残念ながら，ナランホの場合はどちらも細部が不明である。しかし同じ日付であり，主字が同じであるから，同じことをしるしたものであることはまちがいない。しかしナランホでは「手」を主字とする完了を表わす文字 (T 528?: 9713a. 116) があるが，それはティカルでは欠けており，しかも主語とみられる「ティカルの女性」はそのテキストに登場しない。主語になりうるものはA王と名付けられている人物であり，異なる。この文字に関することで大切なもうひとつのことは，1 Katun 記念の場合，T 59 [ti] が接字としてついていることである。[ti] の読みを証明する場合の例のひとつになりうるであろう。

石碑24のA9 [図 17–18] とE18 [図 17–23] には，いわゆる bacab 文字が「ティカルの女性」の文字のあとに生起する。これのもっとも生起率の高い形はT 501. 25: 501 であるが，ここではT 757?. 205: 501 とT 757?. 25: 501 と書かれている。T 757? とみた文字はT 501 の頭字体とみるか，それとも同音異字とみるか問題であるが，図1でみたようなT 501 を顔の形にかえたものが頭字体であり，頭字体は1種類しかないとしたなら，同音異字と結論を下すことができる。T 25 は魚の文字 T 738a と交代可能であり，また頭字体とも交代可能であるが，Thompson のカタログではそれはT 205 にあたる。魚の文字は接字としてはT 203 に分類し，それと交替可能な頭字をT 205 としている。同じ魚の文字でも主字としてはT 738 と分類し，その中に頭字体を含め，それにT 738c という番号を与えている。それゆえ，新しいカタログを作成するときには，上の交替の例をうまくおおえるように分類しなおす必要がある。

「ティカルの女性」が登場するのは石碑24と石碑29のみであり，「ティカルの女性」が関係する日をひろうと，つぎのようになる。

9. 12. 10. 5. 12	4Eb 10Yax	石碑24，29
9. 12. 10. 5. 15	7Men 13Yax	石　碑　29
9. 13.　3. 0.　0	9Ahau 13Poop	石　碑　29
9. 13.　7. 3.　8	9Lamat 1Zotz'	石　碑　24
9. 13. 10. 0.　0	7Ahau 3Cumku	石　碑　24*
9. 14.　3. 0.　0	7Ahau 18Kankin	石　碑　29*

* をつけた日は「リス王」も関係する日であり，「ティカルの女性」にとって重要な日とみることはできない。4Eb 10Yax とともに重要な日は，4番目の 9Lamat 1Zotz'

である。石碑の前面と後面の2カ所でふれられているからである。その節で特に重要と思われる文字は A4, D2, D4 の文字であるが [図 17–18, 19], いずれも意味をつかむことはできない。

「ティカルの女性」に関する文字で，1度以上生起し，興味をひく例は他にないので，その他の遺跡を扱うときに問題にすることになろう。

2.2 9. 12. 15. 13. 7 9Manik 0Kayab は IIb 王の誕生である。その王の主字はリスであり，その前に T 122 がついている。これを何にみるかで，これまで Scroll Squirrel とか Smoking Squirrel とか Mex Cuc などの名がつけられてきた[MARCUS 1976; HOUSTON 1983; 八杉 1979]。ここでは単にリス王ということにした。

リス王を表わす文字は3字からなる。その最後はナランホの紋章文字である。その接字のうちで興味深いのは，石碑22の E8 [図 17–6], F11 [図 17–8], H17 [図 17–17] のものである。石碑21では，その接字が独立した文字と T 36 の2つにわかれて書かれている [図 17–25]。独立した文字のほうを仮りに T 1016x と番号をつけておくと，それは石碑23の H12 にも生起する [図 17–29]。ナランホの紋章文字の主字がそのあとにあるが，接字は異なる。T 1016x は石碑23の E16 にも生起する [図 17–27]。その前はリス王の文字であるところから，F16 はナランホの紋章文字にかわるものとみなすことができる。

誕生をしるした節のすぐあとの日付は「リス王」5才のときの 9. 13. 1. 3. 19 5 Cauac 2Xul であるが，その日に関する文字は T 87. 168: 518: 116 である[図 17–8]。これは前節で即位かそれと同等の重要な出来事を表わす文字とみた。その日の 1 Katun 後の日が石碑 2，3，30 にしるされている。しかも石碑 3 では IS で日付が書かれ，盛大に 1 Katun の記念を催したことがわかる。そうした記念の日は「リス王」の生涯ではほかになく，もっとも大事な日であったとみることができる。即位以上に重要な日があるであろうか。

石碑22の E14 [図 17–9], H12 [図 17–16] は同じ文字で，石碑24で「ティカルの女性」に足下にされている人物の体に刻まれた文字と同じであるので，捕虜の名とみることができる。西の文字と Caban すなわち土地の文字から成立っているので，これを「西の人」とよぶことにする。

石碑22の G15H15 [図 17–17] と B9C9 [図 17–21] も同じ文字であり，後者の場合，石碑の前面で，王座に座る王に裸で何かを捧げている小さな人物のすぐそばに生起するところから，これも征服された人物とみることができる。この人物の2番目の文字はウカナルの紋章文字であるので，「ウカナルの王」とみることができる。

どちらの人物にも共通の文字が石碑22の G12 [図 17–16], H14a [図 17–17] にあるところから，これは捕虜に関する文字と推測できる。この文字は他に E16 [図 17–10], F18a [図 17–11] にもあるので，こんどは逆にその次の文字は捕虜に関係する文字とみることが可能である。E19 の上接字は楯と etz'nab すなわち石矢であり，戦いを表わす文字のようにみえ，いかにもふさわしい文字が生起している。「西の人」の文字の前にはもう1つ違う文字が生起する (F13 [図 17–9])。この文字も捕虜に関する文字とみてさしつかえないであろう。この文字は H1 にも生起する [図 17–12]。その次には7または T 12 の接字がついたティカルの紋章文字の主字があり (G2)，「捕える」ことを表わす文字が生起する。たいへん興味深いのは，石碑23の H14 である [図 17–29]。ここにはナランホの紋章文字の主字に7の接字がついたものが生起している。ティカルの紋章文字の主字に7または T 12 がついた文字と関連性を否定できない。この文字のすぐ前には，楯の文字に石矢の文字が生起しており，ここでも戦いに関連する句がとりだされるのである。

石碑21の A13A14 の文字 [図 17–25] と同じとみなすことができる文字が，石碑20の B4 [図 17–42] と石碑30の B5B6 [図 17–44] にも生起する。この文字群の前には「リス王」の名があること，2つからなるこの文字群の2つ目の文字は，3つとも「こうもり」に T 116 の接字がついたものであり同じであること，1つ目の文字の接字は6の数字で同じであることから，その主字は頭字体と幾何体の交替とみることができる。幾何体はよく知られた Caban の文字であり，その頭字体ということができる。Caban の文字は大地を表わすことがあり，頭字体は女性を表わしているようにみえるので，大地の女神の文字とみることが許されるであろう。

石碑 21 の A6 には，S を横にした文字素 T 632 を主字とする文字が生起する [図 17–25]。この文字素は石碑2の D18 [図 17–33], C15 [図 17–34], 石碑30の A10 [図 17–44], それに第Ⅲ期の石碑13の G9 にも生起する [図 18–6]。接字に差がみられるが，いずれも節の途中にあり，1，2文字後に王の名をあらわす句が生起する共通のパターンをもっている。

石碑21の B11〜B13 [図 17–25] は石碑13の E15〜F16 とほぼ同じである [図 18–6]。B13 の頭文字は，石碑13の F16 の主字 T 585 の頭字体とみることができる。そして B12 と F15 は，同一文字の変化体とみることができる。

石碑20では，これまで即位を表わすと考えられてきた文字で，「歯痛の文字」とあだ名がつけられている文字が生起する (A4 [図 17–42])。その節の最後の1ますにおさまっている2文字 (B4) は，すでにみたように，その他の例ではいずれも「リス王」

のあとにつく。最後から2つ目はナランホの紋章文字 (B3) で，その前は，同じく「リス王」の名の一部を構成する文字 (B2) である。そのもう1つ前の文字の接字も「リス王」につく接字である。主字は T 528. 528 であり，T 528 の文字素は cu [ku] と読まれている。それが2つ続いているから，cu-cu>cuc と読まれうる。cuc はユカテクマヤ語でリスの意味をもつので，この文字は「リス王」の幾何体による表示とみなす意見がある [Kelley 1976: 240]。しかし上接字，下接字は異なる。さらに石碑20の日付は 6/7/8 Cib 14Ch'en であり，いずれの日であっても，「リス王」生涯中で即位とみなしてふさわしい日にならない。図では 9. 14. 2. 12. 16 7Cib 14Ch'en としたが，よくわからない碑である。

ティカルの紋章文字 (T 569) は石碑23の E14 にも生起する [図 17–27]。前接字として，女性を表わす文字がついている。その前の文字は Förstemann 以来結合をあらわす文字とみられてきた [Förstemann 1906: 101]。Marcus は結婚と解釈している [Marcus 1976: 61]。もし結婚を表わしているとすると，先の「ティカルの女性」と別人でなくてはならない。これの生起する節の日付は 9. 13. 18. 4. 18 8Etz'nab 16 Uo である。「リス王」は22才であり，結婚であってもなんらおかしくない。しかし文字は T 1000F. 569 だけであり，これだけではティカルの女性というだけの意味しかなく，名前を表わす文字がない。しかし石碑3には同じ T 1000F. 569 の文字のあとに T 1000F のついた文字が生起している [図 17–35]。これと同一人物である可能性が高い。もしそうなら，石碑18に登場する女性とは別人物である。石碑28にも T 1000F が生起する。このテキストが，問題の鍵を握ると思われるが，残念ながら侵食が激しく読みとれない。

2.3 石碑5，28，31，18，41 と第II期の後期になると，テキストはいずれも損傷が激しく，文字を読みとることがほとんどできない。「リス王」は少なくとも 9. 14. 10. 0. 0 までは言及されていることは確かであるが，その後は別の人物にかわったように思われる。というのは石碑18はこれまでのものと文字の形が異なるばかりでなく，あらわれている文字も異なるからである。石碑18では少なくとも3人の登場人物がいる。そのうち2人はティカルの紋章文字をもった男女である。もう1人は，石碑18の H2〜H3 [図 17–55]，J2〜J3 [図 17–57] の文字群が表わす人物である。この文字群の最後の文字 H3，J3 は，Ia 王についた文字であり，IIIa，IIIb 王にもつく文字であるから，この文字群は人物を表わしていることはほぼまちがいないと思われる。前2つの文字は「リス王」とよく似ているので，「リス王」である可能性は否定できないが，全体的にこれまでのテキストと異なること，最後の文字が異なることから「リ

ス王」とは別人物のように思われる。しかし残念ながらよくわからない。

3. 第　Ⅲ　期

Berlin は第Ⅲ期では3人の王の同定をし，それぞれ IIIa, IIIb, IIIc と命名した。彼が推定したそれぞれの王の即位の日はつぎのようになる [Berlin 1973]。

	即　位			石　碑
IIIa	9. 16. 17. 14. 3	9Akbal	11Muan	6
IIIb	9. 17. 13. 4. 3	5Akbal	11Poop	14
IIIc	9. 19. 4. 1. 1	1Imix	19Mol	32

石碑6の CR の 260 日暦の日の文字の細部は不明であるが，月の Muan が11であるので，Akbal, Lamat, Ben, Etz'nab の4つにしぼることができる [cf. 八杉 1982: 54–55]。Proskouriakoff によって，様式の変化の研究からだされた日付は 9. 14. 10. 0. 0±2 katuns である [Proskouriakoff 1950: 191]。写真からはまったく判断できないが，Graham の手書きによると，Etz'nab と読むことができる。それをとりいれると，9Et'nab 11Muan となるのであるが，長期暦上のいつにあたるかとなると問題である。Peter Mathews は Etz'nab とみ，9. 18. 17. 5. 18 とした [Graham 1978: 111]。しかし Mathews が読んだより，1CR 前の 9. 16. 4. 10. 18 の可能性も否定できない。CR のつぎの文字は即位の文字とみられているいわゆる「歯痛の文字」である。前節ではこの文字とそれが生起する日付の解釈に困った。ここでもまったく同じである。即位を表わすと考えられる文字の中心部はどちらも同じであるが，接字 T 59 が石碑20では前についているのに対し，石碑6では後につき，さらに細部が不明の接字が下についている。このような違いが両者にあるが，伝える意味は同じか，違っていてもさほどかわらないと思われる。同じような文字の生起する節がともに，日付の長期暦上の位置がわからず，名前を表わすとみられる句が幾何体で書かれているのはなぜであろう。この2つの石碑は，ほかのテキストの流れからはずれており，興味をひくのであるが，そのなぞに現在のところうまくこたえることはできない。

第Ⅲ期の文字数は以下のようになる。

	文字ます数	暦に関する文字数
石　碑　19	38	9
石　碑　13	84	24
石　碑　33	6	2
石　碑　36	4	2

石　碑　14	63	21
石　碑　35	57*	9
石　碑　8	51 (54)	16
石　碑　11	4 (6)	1
石　碑　6	51	24
石　碑　12	100 (179)	45
石　碑　10	22 (24)	12 (13)
石　碑　7	5 (14)	2 (6)
石　碑　32	89 (92)	27+
	574 (+98+)	194 (+4+)

括弧は少なくとも判別可能な文字数であるので，合計は文字ます数より，少なくとも98ふえることを意味している。ここでもテキストの約30%が暦に関する文字でしめられていることがわかる。

前節と同じように，年代順にテキストを線形に書きかえることにする。

判読不明で図にはいれなかった箇所はつぎのとおりである。

石　碑　19	(裏)	D～M	15文字
石　碑　35	(表)	A1～A4, B1 B6, G1～G3	13文字
	(裏)	C1～C8	15文字
石　碑　6	(裏)	C1～F11	44文字
石　碑　32	(表)	A1～L2	24文字
			111文字

シリーズ最初の確かな日付は 9. 17. 0. 2. 12 13Eb 5Zip である。計算ではこれより一日前の日が導きだされる（石碑14)。石碑14の日付につづく文字は，石碑10，12と同じく，「かえる」の文字であることはほぼまちがいないので，記録のまちがいの可能性が高い。その場合２つの可能性がある。Graham の手書きでは，その日を導く DN は 19. 15. 9 であるが，写真からは読みとることができないので，９は８であるかもしれない。もしそうなら Graham の手書きのまちがいであるが，まちがいなく９としるされているなら，オリジナルのまちがいとなる。しかしながら，どちらもまちがいでないとすると，石碑14と石碑10，12の文字の違いに反映されているとみなくてはならない。誕生に関して，誕生したその日だけがしるされるとみる必要はなんらないからである。しかしながら石碑 14 の F11b は，「かえる」の文字 T 740 と接字 T 181 が融合した文字としかみることができない。これはスペースがないためにやむ

をえずした工夫に違いない。そうするとやはり 9. 17. 0. 2. 12 の日をしるそうとしたものとなる。そこで，ここでは，DN は 19. 15. 9 ではなく，19. 15. 8 と訂正し，図では石碑10，12と同じ日に含めるつもりで [18–3] におくことにした。

誕生した人物は，Berlin が同定した IIIb 王である。IIIb 王はそれ以後 9. 17. 13. 4. 3 まで登場しない。それまではそれと異なる人物，Berlin の名づけた IIIa 王があらわれる。

IIIa 王に関する最初の日付は 9. 17. 5. 8. 12 9Eb 20Yaxkin で，活躍期間は 9. 17. 10. 0. 0 12Ahau 8Pax までのわずか5年弱である。それ以後は IIIb 王にかわるのであるが，9. 18. 10. 0. 0 10Ahau 8Zac にもう一度登場する（石碑8の F8〜E10 [図 18–25]。名前を表わす文字の前には 3 ben-ich katun の文字があることから，そのとき，IIIa は生まれて 3 katun 目，すなわち，40 から60才の間だったと推測できる。そうすると誕生は 9. 15. 10. 0. 0 前後となる。

石碑6はこの節の最初で問題にした [図 18–0]。A4〜A5 を幾何体で表わされた人物名とみることには問題ないであろう。A4 には IIIa と共通の接字 T 122 があり，A5 には T 561 : 23 がある。それゆえ，A4 の主字は3つの文字からなる IIIa 王の名の最初の文字（石碑19では B4）の主字(T 1030?) の幾何体で，A5 の主字は2番目の文字 (A5) の主字の幾何体とみることが可能である。しかし T 122 はナランホの王によくつく文字素であり，IIIa 王の2番目の文字もそうであるので，それを IIIa とみるわけにはいかない。IIIa とみても許される唯一の根拠は，石碑19の IIIa 王の名の句と石碑6の句の似かよりからである [図 18–10]。すなわち，石碑19の A6 と石碑6の B1〜B2 がよく似ているからである。これ以外にどれかの名前と結びつけることができるものはない。それゆえ，石碑6の人物を IIIa 王とみることには問題がある。しかし，もし石碑6が IIIa 王であり，A3 がこれまでみとめられてきた即位の文字と同じとしたなら，9. 16. 4. 10. 18 9Etz'nab 11Muan という日をこの石碑はしるしているとみたい。それは IIIa 王の24才前後のことであり，しるされている日付，9. 17. 5. 8. 12 Eb 20Yaxkin から 9. 17. 10. 0. 0 12Ahau 8Pax より以前となるからであり，また，1CR あとの日付，9. 18. 17. 5. 18 9Etz'nab 11Muan だと，言及範囲を越えてしまうからである。しかしどちらにしても，この節の最初で述べた問題が，解決されたことにはならないように思われる。

IIIa 王に関係の深い女性が石碑13の G4〜H5 に登場する [図 18–6]。G4H4 は石碑8の B1 と同じ文字のように思われる [図 18–24]。石碑13では2文字にわけて書いているのに対し，石碑8では1文字にまとめて書いている。ともに T 576 が主要

素であり，女性を表わす文字 T 1000F がついている。その他の部分が異なるので，両者は異なる人物のようであるが，仮りに同一人物のいいかえであるとすると，IIIa 王の妻であり，IIIb 王の母という推測がその生起する年代から成立つ。しかしもうひとり IIIa 王と関係があると思われる女性が石碑 8 の E5〜E6 に登場している [図 18–25]。おそらくこちらのほうが IIIa 王の妻であり，IIIb 王の母であろう。なぜなら，第Ⅱ期で「ティカルの女性」の母父を同定した節の最初の文字と F4b が同じとみられるからである。F4b の文字の細部が不明であるので断言できないが，マヤのテキストで一般的な子 — 母 — 父という語順にここでもなっているから，すなわち IIIb —女性— IIIa という語順になっているところから，その可能性は高い。

では石碑13の G4〜H5 の登場する女性は一体 IIIa 王とどういう関係なのであろうか。そしてまた石碑 8 の B1〜B3 の女性はどういう関係なのであろうか。ともに T 576 をもつが，この二人を同一人物とみるのは無理なように思われる。石碑13のほうは IIIa の母であり，石碑 8 のほうは IIIb の妻であろうか。石碑13のほうのこの女性が登場する節の最初の 2 文字 (G1〜H1) は，これまた「ティカルの女性」のところでみたものと同じものとみられる [図 18–6]。それゆえ IIIa 王の母とみなすことが可能である。そのあとに，父親の名前が生起すると予測されるのであるが，それを表わす文字の中心部は H10G11 と思われる。一見すると，「リス王」の文字とそっくりである。違うところといったら，H10 の右上 2 つの文字素だけである。それゆえ「リス王」の頭文字を幾何体にかけたものとみなしうる。しかしそうすると，石碑20の「リス王」とみた幾何体と矛盾する。どちらの見方にも一長一短がある。石碑20のほうは，すでに述べたように，上接字と下接字が「リス王」に馴染みのないものであった。しかしそのあとにつく文字は「リス王」につく文字である。石碑13のほうは，前接字と下接字は「リス王」と同じ文字であるので，その他の構成要素は幾何体に書きかえたとみなすことができる。しかしそのあとにつく文字は「リス王」に馴染みのない文字である。そこで石碑13の問題の文字のあとを調べることにする。G12 には第Ⅱ期の石碑24の B17 と同じ文字が生起している。石碑 24 のほうは接字がついているが，主字は同じである。そのあとには 2 または 3 katun の文字があり，H13 には Ia 王についた文字と同じ文字が生起している。この文字は IIIa, IIIb にもつく。第Ⅱ期の最後から 2 番目の石碑18の人物にもこの文字がついている。2 または 3 katun を年令を数える ben-ich katun と同じものとすると，9. 14. 10. 0. 0 または 9. 15. 10. 0. 0 前後がこの人物の誕生と推測される。石碑18は 9. 14. 15. 0. 0 付近の出来事を扱っているので，そこに登場する H2〜H3, J2〜J3 の人物と同じとするとなんら年代

的に矛盾しない。ただ石碑13の H12 を 3 katun とみなければならない。写真をみると，3を表わす3つの丸の真中が他の2つより幾分大きいので3とみるのには少し抵抗がある。しかしその大きさのちがいを考慮に入れないと，非常にすっきり解釈できる。すなわち，石碑13は IIIa があり，つぎにその母があり，そして父が生起する語順になっており，父は第II期の最後の王 IIc にあたる。それは石碑18に登場する人物である。ここで1つ気掛りなのは，母と考えた名の文字が，石碑18に登場する女性を表わす文字と異なるように思われることである。この推論の証明は，ここでもやはり石碑28にかかっているようである。

女性を表わすと考えてよい文字は石碑8の D8, C10 にもある [図 18–25]。C10 の主字は石碑35の E3 と同じ文字素のようであるが [図 18–21], この女性についてはよくわからない。

IIIb 王は 9. 17. 0. 2. 12 13Eb 5Zip のつぎは 9. 17. 13. 4. 3 5Akbal 11Poop に登場する。この日を即位の日とみなすことに異存はない。もっとも文字の細部が不明なので，それを文字の上から確認できたわけではないが，その日を境に IIIb 王への言及がはじまるので，即位の日とみてもよさそうなのである。IIIb 王13才のときである。

IIIb 王の名前を表わす文字の変化は興味深い。頭文字の前におそらく「楯」を表わす文字が接字としてついた文字が，この王のもっとも大切な部分である。同定した IIIb 王の生起場所はつぎのとおりである。

石　碑　12	B3–C3	[図 18– 1]
石　碑　10	B2–A3	[図 18– 2]
石　碑　14	D11–D12	[図 18–12]
石　碑　14	A5–A8	[図 18–14]
石　碑　35	E4–F5	[図 18–21]
石　碑　8	B6	[図 18–24]
石　碑　8	F1	[図 18–25]
石　碑　12	G13–F14	[図 18–26]
石　碑　12	A2–A3	[図 18–28]
石　碑　35	F10–E11	[図 18–29]
石　碑　7	A2–A3a	[図 18–31]
石　碑　10	B8	[図 18–32]
石　碑　10	A11	[図 18–34]

石碑14の D11C12 [図 18–12], A5A6 [図 18–14], 石碑35の E4F4 [図 18–21], 石碑12の G13F14 [図 18–26] は，同一文字で，IIIb 王の名の一部を構成する文字とみられる。石碑14の D11 の場合だけ頭字体で書かれ，その他の3例は幾何体で書かれている。いずれもそのあとに IIIb 王の名の中心となる楯の接字のついた頭文字が生起するが，石碑12の場合はそれが生起せず，いきなりナランホの紋章文字がつづいている。それゆえ，一見すると異なる人物のように思えるが，G13F14 の文字はその他の3例では IIIb 王の前につく文字であるので，ここではそれを省略したもので，やはり IIIb 王を表わしているとみることができる。楯のついた頭文字のつぎは，T 122 のついた頭文字が生起するのがふつうである(石碑12の C3 [図 18–1], 石碑10の A3 [図 18–2], 石碑14の A8 [図 18–14], 石碑35の F5 [図 18–21])。しかしその文字の変化もおもしろい。石碑14の D12 のあとにはそれは生起しない。それは E1 と F1 の文字におきかわっている [図 18–12]。石碑8の B6 [図 18–24], F1 [図 18–25], 石碑10の B8 [図 18–32], A11 [図 18–34], 石碑7の A2 [図 18–31] では楯のついた頭文字は省略され，T 122 がついた頭文字，またはその幾何体が，いきなり楯の文字についている。これは文字ますを節約したかったためと考えられる。T 122 のついた文字は頭文字と幾何体のどちらかで書かれている。石碑8の B6 [図 18–24], 石碑12の A3 [図 18–28], Lb [図 18–27], 石碑35の E11 [図 18–29] は幾何体の例である。

IIIb 王は 9. 19. 0. 3. 0 4Ahau 18Zac まで言及されている。それ以後は IIIc 王にかわる。

IIIc 王は石碑32にしか登場しないので，線形にテキストをなおすことはせず，Graham の手書きをここにかかげることにする。

テキストは4つの部分にわけてしるされている。最初の部分は損傷が激しく読みとれない。読みとれる部分は M1 N1 からである。最初に DN の 15. 17 があるので，消えている部分のうちの CR の1つが復元できるのみで，A1 から L2 までは不明である。N2 には即位の文字とみられる文字があるので，O1P1 の 13Ahau 18Mol の日が即位の日とみられる。9. 19. 4. 1. 0 となる。IIIb 王は 9. 19. 0. 3. 0 までであったので，消えて読めない部分は 9. 19. 0. 3. 0 から 9. 19. 4. 1. 0 の間の出来事と考えられる。

IIIc 王の名は2つの文字からなる。D2E1, O2P2, T3Q4, X2U3, X8W9 にあるが，そのうち3例にナランホの紋章文字があるので，それは王の名にまちがいないことがわかる。IIIc 王の名を構成する2番目の文字はこれまでの王の名につくものと同じで，T 122 がついている。そのあとにつく文字は幾何体であり，IIIb のそれと

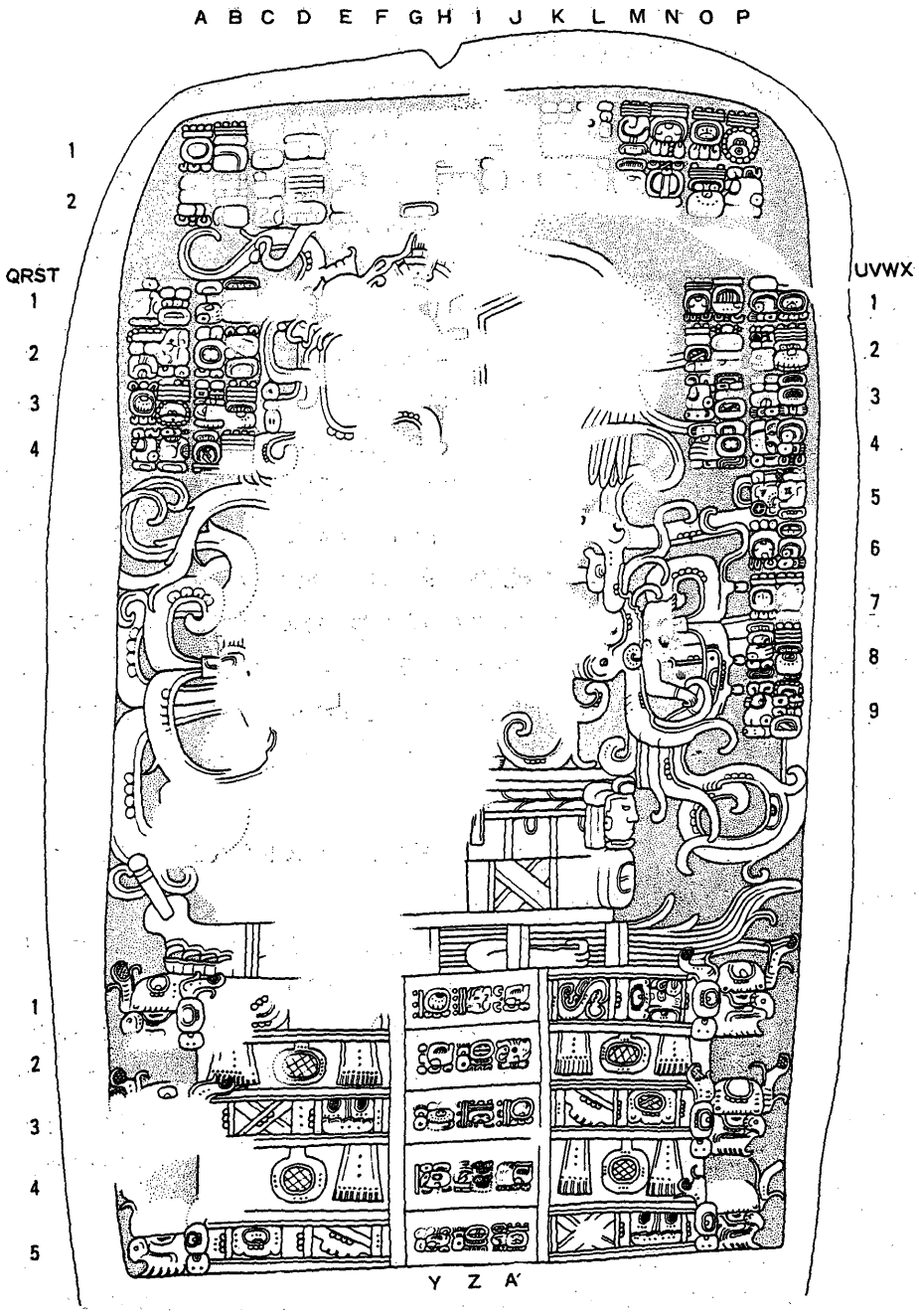


図19　石碑 32　St. 32
[Graham 1978] より

同じである。

テキストを構成する上と両横の部分は，浮彫りによって文字は描かれているが，下に描かれた4番目の部分は，刻文であり，たいへんちがった印象をうける。文字も異なるばかりでなく，日付も前と結びつかないので，独立したテキストとみることができる。その最初の日付は 9. 19. 4. 15. 1 8Imix 14Zotz' であり，これと同じ日付をマチャキラー (Machaquilá) の石碑3にみることができる [GRAHAM 1967]。このような区切りのわるい日を共有することはまれなので，マチャキラーとなんらかの関係があったとみられそうであるが，その日付をしるす石碑3と共通する文字はないので，それを肯定するわけにはいかない。

Ⅶ. おわりに

文字についてなにかを論じようとする場合，言及する文字は，文字そのものをしるすか，カタログの番号でしるす必要があるのではなかろうか。その文字を知っている人を対象にするなら，文字をいちいちしるす必要はないかもしれない。しかしその文字を知っている人でも，おそらく言及された文字が記載されている文献をひろげるにちがいない。もしその文献をもっていなければ，おそらく，その論文を理解することはむづかしいにちがいない。そうしたことを考えた場合，やはり文字について述べようとするときには，どこかにその文字をのせておくことが望ましい。しかもその文字を単独でのせたのでは，その文字について述べられたことを検証することは無理であるので，その生起環境をともにしるすほうがよいように思われる。

そうして言及する文字についてしるしていくと，少なくとも，その部分部分は理解されるはずである。しかし全体のなかでどうような位置をしめるのか理解することはむづかしいに違いない。文字というのは体系をなしているので，その体系がわからなければ，文字を理解したという気持になかなかなれないものである。表音文字の体系であれば，その理解はさほどむつかしくないかもしれないが，マヤ文字のような文字体系であれば，表音文字と表意文字の混合体系だとはいっても，その内容はどのようなものなのかいまだはっきりと把握されていないので，たいへんわかりにくくなることが予測される。内容が複雑であるので，文字に言及する場合，それが理解されるためにはどのようにすべきかを考えなければならないであろう。

そこで，ここではナランホのテキストを分析するのであるから，少なくともナランホに存在するテキストはあまさず記載するのが一番わかりやすいと考えた。簡単なテ

キストの場合はそのままの形で引用し，複雑なテキストの場合はわかりやすい形に書きかえたものをしるすことにした。マヤのテキストは日付があり，その日についての文字群があり，また日付があり，その日の説明があるという構造になっているので，日付順にテキストを線形になおした形が一番わかりやすい形と考えた。日付の流れにそってテキストをみることができるので，王朝の歴史の分析などにはひじょうに有効な提示方法だと考える。しかしある碑のある場所を言及したいとき，線形になおしたテキストではおそらくその場所を探すのに苦労するであろう。その場合は碑ごとのテキストを記載する方が好ましく思える。両方の形でのせれば，その問題は解決がつくが，それでも，いちいち参照するために文字を探すわずらわしさを減らすことはできそうにない。そこで，線形になおしたテキストをのせるだけにとどめ，すぐさま参照できるように，日付ごとに線形になおしたそれぞれの文字群に番号をふることにした。このように文字の提示方法を考えたのであるが，言及されるたびに，本文からはなれて，その文字を探すというわずらわしさは避けることはできない。あまりの煩雑さに結局負けてしまい，たとえ読みおえることができても，十分に理解できなかったということになるかもしれない。

各文字，文字素についてふれるときは，Thompson のカタログを利用した。そのカタログは1962年に出版されたものであるので，不備がめだつ。しかし文章中に文字そのものをあげるわけにはいかないので，Thompson のカタログ番号によらざるをえなかった。それがさらに本論をわかりにくくする原因のひとつにならなければ幸いである。

現状では一番わかりやすい方法を考えたつもりであるが，本論でとった方法が一番いい提示方法なのであろうか。本論が読みやすくなかったかどうか。さらに提示方法や読みやすさという点について今後も考えていきたい。

さてナランホの文字の分析で新しい事実が発見されたのであろうか。王朝の歴史については，これまでよりはっきりしてきた。しかし同定された王達が何をしたのか，ほとんどわからないままであった。文字の使われ方，文字の変遷についてもいくつかの点ではっきりしてきた。しかし大部分はマヤ文字全体を把握してからでないと述べることはできないものであり，このシリーズの終了時までに多くの問題を残すことになった。それゆえ本論の分析はまだまだ不十分であるが，少なくとも他の遺跡の文字との比較にここで提示した文字資料は役に立つはずである。

マヤ文字の分析をおもいたったひとつは，Thompson のカタログの欠点を克服できる新しいカタログの作成を試みようとしているからである。ナランホのテキストの

分析で，いくつかの同価の文字がみつかった。そうしたものはある基準で同一グループにまとめる必要がある。新しいカタログを作成するためには，その方法を論じなければならないが，ナランホのテキストの分析である程度見通しがついたので，本論でいくつかみつかった同価の文字や興味深い文字の使われ方については，カタログの作成の方法を論じるときにあらためて考えてみることにしたい。

文　　献

ADAMS, Richard E. W. and Patrick CULBERT

1977 The Origins of Civilization in the Maya. In Richard E. W. Adams (ed.), *The Origins of Maya Civilization*, University of New Mexico Press, pp. 3–24.

BEETZ, Carl P. and Linton SATTERTHWAITE

1981 *The Monuments and Inscriptions of Caracol, Belize.* The University Museum, University of Pennsylvania.

BERLIN, Heinrich

1958 El glifo "emblema" en las inscripciones mayas. *Journal de la Société des Américanistes* 47: 111–119.

1973 Beiträge zum Verständnis der Inschriften von Naranjo. *Bulletin Société Suisse des Américanistes* 37: 7–14.

1977 *Signos y significados en las inscripciones mayas.* Instituto Nacional del Patrimonio Cultural de Guatemala.

BEYER, Hermann

1930 The Analysis of the Maya Hieroglyphs. *Internationales Archiv für Ethnographie* 31: 1–20.

1932 The Stylistic History of the Maya Hieroglyphs. *Middle American Research Series*, Tulane University, Pub. 4, pp. 71–102.

1934 The Position of the Affixes in Maya Writing. *Maya Research* 1(1): 20–29.

1937 *Studies on the Inscriptions of Chichen Itza.* Contributions to American Archaeology 21, Carnegie Institution of Washington, Pub. 483.

BRINTON, Daniel G.

1882 *The Maya Chronicles.* (Reprint: 1969, AMS Press.)

FÖRSTEMANN, Ernst

1906 *Commentary on the Maya Manuscript in the Royal Public Library of Dresden.* Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University, Vol. IV, No, 2. (Reprint: 1978, Kraus Reprint Co.)

GOLDSTINE, Herman H.

1973 *New and Full Moons 1001 B.C. to A.D. 1651.* Philadelphia: American Philosophical Society.

GRAHAM, Ian

1967 *Archaeological Explorations in El Peten, Guatemala.* Middle American Research Institute, Tulane University, Pub. 33.

1978 *Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions. Volume 2, Part 2; Naranjo, Chunhuitz, Xunantunich.* Peabody Museum, Harvard University.

1979 *Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions. Volume 3, Part 2; Yaxchilan.* Peabody Museum, Harvard University.

1980 *Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions. Volume 2, Part 3; Ixkun, Ucanal, Ixtutz, Naranjo.* Peabody Museum, Harvard University.

GRAHAM, Ian and Eric VON EUW
1975 *Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions. Volume 2, Part 1; Naranjo.* Peabody Museum, Harvard University.
1977 *Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions. Volume 3, Part 1; Yaxchilan.* Peabody Museum, Harvard University.

HOUSTON, Stephen D.
1983 Warfare between Naranjo and Uranal. In Stephen D. Houston (ed.), *Contributions to Maya Hieroglyphic Decipherment,* Human Relations Area Files, Inc, pp. 31–39.

JONES, Christopher
1977 Inauguration Dates of Three Late Classic Rulers of Tikal, Guatemala. *American Antiquity* 42: 28–60.

JONES, Christopher and Linton SATTERTHWAITE
1982 *The Monuments and Inscriptions of Tikal: The Carved Monuments.* The University Museum, Tikal Report No. 33, Part A.

KELLEY, David H.
1976 *Deciphering the Maya Script.* University of Texas Press.

KUBLER, George
1973 The Clauses of Classic Maya Inscriptions. In Elizabeth P. Benson (ed.), *Mesoamerican Writing Systems,* Dumbarton Oaks, pp. 145–164.

ランダ, D.
1982 『ユカタン事物記』林屋永吉訳　岩波書店。

MALER, Teobert
1908 *Explorations in the Department of Peten, Guatemala, and Adjacent Region: Topoxte; Yaxha; Benque Viejo; Naranjo.* Memoirs of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University, vol. 4, no. 2.

MARCUS, Joice
1976 *Emblem and State in the Classic Maya Lowlands: An Epigraphic Approach to Territorial Organization.* Dumbarton Oaks.

MORLEY, Sylvanus G.
1909 The Inscriptions of Naranjo, Northern Guatemala. *American Anthropologist* 11: 543–562.
1920 *The Inscriptions at Copan.* Carnegie Institution of Washington, Publication 219.
1937–38 *The Inscriptions of Peten.* Carnegie Institution of Washington, Publication 437. 5vols.

PROSKOURIAKOFF, Tatiana
1950 *A Study of Classic Maya Sculpture.* Carnegie Institution of Washington, Pub. 593.
1960 Historical Implications of a Pattern of Dates at Piedras Negras, Guatemala. *American Antiquity* 25: 454–475.
1963 Historical Data in the Inscriptions of Yaxchilan, Part I. *Estudios de Cultura Maya* 3: 149–167.
1964 Historical Data in the Inscriptions of Yaxchilan, Part II. *Estudios de Cultura Maya* 4: 177–201.

RIESE, Berthold
1984 Hel Hieroglyphs. In John S. Justeson and Lyle Campbell (eds), *Phoneticism in Mayan Hieroglyphic Writing,* Institute for Mesoamerican Studies, State University of New York at Albany, Pub. 9, pp. 263–286.

SCHLAK, Arthur
1983 Non-Ages with a Hand-Held Calculator. In Stephen D. Houston (ed.), *Contributions to Maya Hieroglyphic Decipherment,* Human Relations Area Files, Inc., pp. 80–87.

TEEPLE, John E.
1930 *Maya Astronomy.* Contributions to American Archaeology 2, Carnegie Institution of Washington, Pub. 403.

THOMPSON, J. Eric S.
1935 *Maya Chronology "Correlation Question"*. Contributions to American Archaeology 14, Carnegie Institution of Washington, Pub. 456.
1962 *A Catalog of Maya Hieroglyphs*. University of Oklahoma Press.
1971 *Maya Hieroglyphic Writing: An Introduction*. (*3rd ed.*) University of Oklahoma Press.
八杉佳穂
1979 『マヤ文字研究 I』手稿。
1982 『マヤ文字を解く』中央公論社。

付表1　碑の奉納日と3つのシリーズ

碑	場所	碑の人物像 男M/女(F)	Series I	Sesies II	Series III
1	A–15	M		9. 13. 10. 0. 0	
2	A–15	M		9. 14. 1. 3. 19	
3	A–15	F		9. 14. 1. 3. 19	
4	A–15	M			
5	A–21	M		9. 13. 7. 3. 8	
6	B–4	M			9. 16. 4. 10. 18?
7	B–4	M			9. 19. 0. 3. 0
8	B–4				9. 18. 10. 0. 0
9	B–18	M			
10	B–23				9. 19. 0. 3. 0
11	B–23	F?			9. 18. 13. 3. 13
12	B–19	M			9. 18. 10. 0. 0
13	B–19	M			9. 17. 10. 0. 0
14	B–19	M			9. 18. 0. 0. 0
15	B–20				
16	B–20	M			
17	B–20	M			
18	B–20			9. 14. 15. 0. 0	
19	B–21	M			9. 17. 10. 0. 0
20	B–13	M		9. 14. 2. 12. 16	
21	C–6	M		9. 13. 15. 0. 0	
22	C–6	M		9. 13. 10. 0. 0	
23	C–6	M		9. 14. 0. 0. 0	
24	C–7	F		9. 13. 10. 0. 0	
25	C–9		9. 9. 2. 0. 4		
26	C–9				
27	C–9		(9. 9. 10. 0. 0)		
28	C–9	M		9. 14. 10. 0. 0	
29	C–9	F		9. 14. 3. 0. 0	
30	C–9	M		9. 14. 3. 0. 0	
31	C–9	F		9. 14. 10. 0. 0	
32	C–9				9. 19. 10. 0. 0
33	B–20	M			9. 17. 10. 0. 0
34	B–20	F			
35	C–4				9. 18. 10. 0. 0
36	B–1				9. 17. 10. 0. 0
37	A–19	M			
38	D–1	M	9. 8. 0. 0. 0		
39	D–1				
40	D–1	M			
41	C–10			9. 15. 0. 0. 0	
Alt. 1			9. 8. 0. 0. 0		
L. 1			9. 10. 0. 0. 0		
HS	B–18		9. 10. 10. 0. 0		

付表2　テキストの日付

石碑1			
			C1～? (IS)
7. 12 ?			E1
(9. 13. 10. 0. 0)	7 Ahau	3 Cumku	F5E6
5. 12. 10. 13. 15. ?. ?	?		F7～E10
	10 ?	13 Kankin	E11F11
	4 ?	5 Mac	A1A2
石碑2			
9. 14. 1. 3. 19	3 Cauac	2 Poop	B1～? (IS)
1. 17. 1. 5. 10. 7 ? ?			D1～E3
	10 Ahau	13 ?	E4D5
(9. 14. 0. 10. 0)	11 Ahau	8 Yaxkin ?	E9D10
10. 9			E14
(9. 14. 1. 2. 9)	12 Muluc	17 Kankin ?	D15E15
石碑3			
9. 12. 10. 5. 12	4 Eb	10 Yax	C1～D6? (IS)
(9. 14. 1. 3. 19)	3 Cauac	2 Poop	E4E5
− 7. 9. 3. 15			F12E13
(9. 6. 12. 0. 4)	4 Kan	7 Pax	F11E12
石碑6			
9.	?		C1～D9 (IS)
1. 5.	?		F3～F4
(9. 16. 4. 10. 18)	9 Etz'nab	11Muan ?	A1A2
石碑7			
(9. 19. 0. 0. 0)	9 Ahau	18 Mol	Alab (PE)
3. 0			A3bc
(9. 19. 0. 3. 0)	4 Ahau	18 Zec	A4
石碑8			
(9. 18. 9. 14. 3)	11 Akbal	11 Yaxkin	A1A2
9. 18. 10. 0. 0	10 Ahau	8 Zac	C1～C9 (IS)
石碑10			
(9. 17. 0. 2. 12)	13 Eb	5 Zip	A1B1
1. 19. 15. 8			B5～B6
(9. 19. 0. 0. 0)	9 Ahau	18 Mol	A7B7
3. 0			B9
(9. 19. 0. 3. 0)	4 Ahau	18 Zac	A10
石碑11			
(9. 18. 13. 3. 13)	6 Ben	6 Kankin	A1
石碑12			
(9. 17. 0. 2. 12)	13 Eb	5 Zip	B1C1
1. 8. 6. 0			B5B6
(9. 18. 8. 8. 12)	8 Eb	5 Uo	B7
4			C8b
(9. 18. 8. 8. 16)	12 Cib	9 Uo	B9

	2			C14a
	(9. 18. 8. 8. 18)	1 Etz'nab	11 Uo	C14bB15a
	2. 13			E4
	(9. 18. 8. 11. 11)	2 Chuen	4 Zec	D5
	4. 11			E7
	(9. 18. 8. 16. 2)	2 Ik	15 Ch'en	D8
	2. 11			D11
	(9. 18. 9. 0. 13)	1 Ben	6 Ceh	E11
	8. 15			E14bD15a
	(9. 18. 9. 9. 8)	7 Lamat	16 Uo	D15bE15a
	4. 7			F3bG3a
	(9. 18. 9. 13. 15)	3 Men	3 Yaxkin	G3bF4a
	4. 5			G11
	(9. 18. 10. 0. 0)	10 Ahau	8 Zac	F12
石碑13				
	9. 17. 10. 0. 0	12 Ahau	8 Pax	E1～F9 (IS), A1A2
	5. 13. 10			H14G15
	(9. 17. 15. 13. 10	2 0c	8 Yax) ?	
石碑14				
	9. 17. 13. 4. 3	5 Akbal	11 Poop	C1～C9 (IS)
	(9. 18. 0. 0. 0)	11 Ahau	18 Mac	F12, A1A2
	19. 15. 8 ?			E11F11a
	(9. 17. 0. 2. 12	13 Eb	5 Zip) ?	
石碑18				
	9. 14. 15. 0. 0	11 Ahau	18 Zac	A1～A8 (IS)
	(9. 12. 10. 0. 0	9 Ahau	18 Zotz') ??	
	5. 12			F2
	(9. 12. 10. 5. 12)	4Eb	10 Yax	E3F3
	2. 3. 10. 13 ?			F6～F7
	(9. 14. 13. 16. 5)	6 Chicchan	8 Yax ?	E8F8
	8. 17			G4
	(9. 14. 14. 7. 2)	1 Ik	0 Poop	H4G5
	3. 12			G8
	(9. 14. 14. 10. 14)	8 Ix	12 Zotz'	H8G9
	7. 6			J4
	(9. 14. 15. 0. 0)	11 Ahau	18 Zac	I5J5 (PE)
石碑19				
	(9. 17. 10. 0. 0)	12 Ahau	8 Pax	A1B1 (PE)
	(9. 17. 5. 8. 12)	9 Eb	20 Yaxkin	C1～C3
		8 ?	14 ?	DE
石碑20				
	(9. 14. 2. 12. 16)	7 Cib	14 Ch'en ??	A1A2
石碑21				
	9. 13. 1. 3. 19	5 Cauac	2 Xul	C1～? (IS)
	(9. 13. 14. 4. 2)	8 Ik	0 Zip ?	A1A2

(9. 13. 15. 0. 0)	13 Ahau	18 Pax	E9F9 (PE)
石碑22			
9. 12. 15. 13. 7	9 Manik	0 Kayab	E1～E6 (IS)
5. 8. 12			F8
(9. 13. 1. 3. 19)	5 Cauac	2 Xul	E9F9
1. 0			E12
(9. 13. 1. 4. 19)	12 Cauac	2 Yaxkin	F12E13
4. 6			F14
(9. 13. 1. 9. 5)	7 Chicchan	8 Zac	E15E15
4. 9			F16
(9. 13. 1. 13. 14)	5 Ix	17 Muan	E17F17
1. 2. 16			F19E20
(9. 13. 2. 16. 10)	5 0c	8 Cumku	F20G1
1. 3. 3			G5H5
(9. 13. 4. 1. 13)	12 Ben	1 Zip	G6H6
1. 3. 0			H7
(9. 13. 5. 4. 13)	3 Ben	16 Zec	G8H8
1. 0. 4			G10H10
(9. 13. 6. 4. 17)	3 Caban	15 Zec	G11H11
5. 7			G13
(9. 13. 6. 10. 4)	6 Kan	2 Zac ?	H13G14
9. 15 ?			H18
(9. 13. 10. 0. 0)	7 Ahau	3 Cumku	G19H19 (PE), A1A2
石碑23			
9. 13. 18. 4. 18	8 Etz'nab	16 Uo	E1～F8 (IS)
4. 17			E17
(9. 13. 18. 9. 15)	1 Men	13 Yaxkin	F17E18
(9. 13. 18. 4. 18	8 Etz'nab	16 Uo)	
1. 1. 5			G7H7
(9. 13. 19. 6. 3)	3 Akbal	16 Zip	G8H8
11. 17			G16
(9. 14. 0. 0. 0)	6 Ahau	13 Muan	G17H17 (PE)
石碑24			
9. 12. 10. 5. 12	4 Eb	10 Yax	B1～B7 (IS)
5. 7. 15			B11C11
(9. 12. 15. 13. 7)	9 Manik	0 Kayab	B12C12
11. 8. 1			B18C18
(9. 13. 7. 3. 8)	9 Lamat	1 Zotz'	D1E1, A1A2a
2. 14. 12			E13D14
(9. 13. 10. 0. 0)	7 Ahau	3 Cumku	E14D15 (PE)
石碑25			
8. 5. 18. 4. 0	7 Ahau	3 Kankin	A1～A4 (IS)
(9. 5. 12. 0. 4)	6 Kan	2 Zip	A8B8
(9. 6. 12. 0. 4)	4 Kan	7 Pax	C1D1
(9. 7. 12. 0. 4)	2 Kan	7 Zac	C3D3

(9. 8. 12. 0. 4)	13 Kan	7 Xul	C5D5
2. 0. 4			D6C7
(9. 8. 10. 0. 0	4 Ahau	13 Xul)	
(9. 9. 0. 0. 0)	3 Ahau	3 Zotz'	D7C8
(9. 9. 2. 0. 4)	12 Kan	17 Zip	D9C10
石碑28			
9. 14. 4. 7. 1	1 Imix	9 Zip	C1～C8 (IS)
4			
(9. 14. 4. 7. 5)	5 Chicchan	13 Zip	D13C14
5. 3			E4
(9. 14. 4. 12. 8)	4 Lamat	16 Mol	F4E5
1. 13			F9
(9. 14. 4. 14. 1)	11 Imix	9 Yax	E10F10
2. 16			E14
(9. 14. 4. 16. 17)	2 Caban	5 Mac	F14E15
13			G8
(9. 14. 4. 17. 10)	2 0c	18 Mac	H8G9
(9. 14. 8. 0. 0)	13 Ahau	13 Mac ?	A1A2
(9. 14. 10. 0. 0	5 Ahau	3 Mac) ?	
石碑29			
9. 12. 10. 5. 12	4Eb	10 Yax	F1～G7 (IS)
3			F18 ?
(9. 12. 10. 5. 15)	7 Men	13 Yax	G18H1
5. 7. 12			H6I6
(9. 12. 15. 13. 7)	9 Manik	0 Kayab	H7I7
7. 4. 13			H10I10
(9. 13. 3. 0. 0)	9 Ahau	13 Poop	H11I11
1. 0. 0. 0			I14～I15
(9. 14. 3. 0. 0)	7 Ahau	18 Kankin	H16I16
石碑30			
9. 14. 3. 0. 0	7 Ahau	18 Kankin	C1～D7 (IS)
3. 0. 0			E1F1
(9. 14. 0. 0. 0)	6 Ahau	13 Muan	F2E3
1. 3. 19			E7F7
(9. 14. 1. 3. 19)	3 Cauac	2 Poop	E8F8
8. 5 ?			E12
(9. 14. 1. 12. 4)	12 Kan	7 Ch'en ?	F12E13
1. 10			H1
(9. 14. 1. 13. 14)	3 Ix	17 Yax ?	G2H2
9. 10 ?			H3
(9. 14. 2. 5. 4)	11 Kan	2 Uo ?	G4H4
13. 8 ?			G8
(9. 14. 3. 0. 12)	6 Eb	10Muan ?	H8G9
12 ?			G12
(9. 14. 3. 0. 0)	7 Ahau	18 Kankin	H12G13, A1A2

石碑31			
9. 14. 4. 12. 7	3 Manik	15 Mol	C1～? (IS)
(9. 14. 10. 0. 0)	5 Ahau	3 Mac	I13J13 (PE), A1A2
石碑32			
(9. 19. 3. 3. 3	8 Akbal	6 Zac)	
15. 17			M1N1
(9. 19. 4. 1. 0)	13 Ahau	18 Mol	O1P1
1			T2
(9. 19. 4. 1. 1)	1 Imix	19 Mol	Q3R3
5. 13. 19			T4～V1
(9. 19. 9. 15. 0)	13 Ahau	8 Zip	X1U2
3. 0			X5W6
(9. 19. 10. 0. 0)	8 Ahau	8 Xul	W7X7
(9. 19. 4. 15. 1)	8 Imix	14 Zotz'	Y1Z1
12. 11			Z3
(9. 19. 5. 9. 12)	12 Eb	5 Kayab	A'3Y4
(4. 8. 8)			
(9. 19. 10. 0. 0)	8 Ahau	(8 Xul)	A'5b
石碑33			
(9. 17. 10. 0. 0)	12 Ahau	8 Pax	A1A2
石碑35			
	12 Ix	? Cumku	D1C2
(9. 18. 9. 0. 13)	1 Ben	6 Ceh	D8C9
17. 7			F7E8
(9. 18. 10. 0. 0)	10 Ahau	8 Zac	E9F9
石碑36			
(9. 17. 10. 0. 0)	12 Ahau	8 Pax	AB
石碑38			
(9. 6. 0. 0. 0)	9 Ahau	(3 Uayab)	A6A7
(9. 7. 0. 0. 0)	7 Ahau	(3 Kankin)	A9B1
(9. 8. 0. 0. 0)	5 Ahau	3 Ch'en	B3～B5
石碑41			
(9. 15. 0. 0. 0)	4 Ahau	13 Yax	A1A1 (PE)
祭壇1			
	?	18 Kankin	B2A3
2. 13. 13. ?. ?. 4			A6～A8
(7. 2. 4. 5. 14)	13 Ix	12 Xul	B11C1
2. 2. 6. 3. 3			C9～D10
(9. 4. 10. 8. 17)	7 Caban	5 Kayab	D12E1
19. 10. 6			G10E11
(9. 5. 10. 1. 3)	7 Akbal	11 Zotz'	E12F12
(9. 6. 0. 0. 0)	9 Ahau	3 Uayab	I5～I6
(9. 7. 0. 0. 0)	7 Ahau	3 Kankin	I7～I8
(9. 8. 0. 0. 0)	5 Ahau	3 Ch'en	I9～H11
12. 0. 0. 0			J5～J6

(10. 0. 0. 0. 0)	7 Ahau	18 Zip	K7～K9
(9. 8. 0. 0. 0)	5 Ahau	3 Ch'en	K10J11
リンテル1			
(9. 7. 14. 10. 8)	(3 Lamat)	16 Uo	A1B1
2. 5. 7. 12			F4～H1
(9. 10. 0. 0. 0)	1 Ahau	8 Kayab	G2～G3
階段碑文			
(9. 9. 1. 5. 4	12 Kan	2 Ch'en)	
13. 1			0 1b
(9. 9. 2. 0. 5)	13 Chicchan	18 Zip ?	P1
3. ?. ?			A'1a
(9. 9. 18. 16. 3)	13 Ix	12 Zac	A'1b～B'1a
1. 4. 9			L1b～M1a
(9. 9. 18. 16. 3)	7 Akbal	16 Muan	M1b～N1a
1. 1. 17			M3
(9. 10. 0. 0. 0)	1 Ahau	8 Kayab	N3
(9. 9. 4. 16. 2	10 Ik	0 Poop)	
(9. 10. 3. 2. 12	2 Eb	0 Poop)	
1. 13. 10			U1
(9. 10. 4. 16. 2)	8 Ik	5 Kankin	V1
14. 2 ?			V2b
(9. 10. 5. 12. 4	4 Kan	2 Yax) ? ?	
9. 10. 10. 0. 0	13 Ahau	18 Kankin	I1～I3 (IS)

付表3　年代順にならべた日付

Series I

GREGORIAN					MAYAN LONG COUNT						
MON	AUG	11	3114	BC	0. 0. 0. 0. 0	4 Ahau	8 Cumku				
TUE	FEB	6	310	BC	7. 2. 4. 5. 14	13 Ix	12 Xul	AL	01	B11	C01
THU	MAR	16	158	AD	8. 5. 18. 4. 0	7 Ahau	3 Kankin	ST	25	A01	A04
SAT	FEB	17	525	AD	9. 4. 10. 8. 17	7 Caban	5 Kayab	AL	01	D12	E01
WED	JUNE	3	544	AD	9. 5. 10. 1. 3	7 Akbal	11 Zotz'	AL	01	E12	F12
THU	MAY	5	546	AD	9. 5. 12. 0. 4	6 Kan	2 Zip	ST	25	A08	08B
WED	MAR	20	554	AD	9. 6. 0. 0. 0	9 Ahau	3 Uayab	AL	01	I05	H06
WED	MAR	20	554	AD	9. 6. 0. 0. 0	9 Ahau	3 Uayab	ST	38	A06	
MON	JAN	20	566	AD	9. 6. 12. 0. 4	4 Kan	7 Pax	ST	25	C01	D01
SUN	DEC	5	573	AD	9. 7. 0. 0. 0	7 Ahau	3 Kankin	AL	01	I07	H08
SUN	DEC	5	573	AD	9. 7. 0. 0. 0	7 Ahau	3 Kankin	ST	38	A09	
FRI	OCT	7	585	AD	9. 7. 12. 0. 4	2 Kan	7 Zac	ST	25	C03	D03
FRI	APR	18	588	AD	9. 7. 14. 10. 8	3 Lamat	16 Uo	L	01	A01	B01
THU	AUG	22	593	AD	9. 8. 0. 0. 0	5 Ahau	3 Ch'en	AL	01	I09	H10
THU	AUG	22	593	AD	9. 8. 0. 0. 0	5 Ahau	3 Ch'en	AL	01	K10	J11
THU	AUG	22	593	AD	9. 8. 0. 0. 0	5 Ahau	3 Ch'en	ST	38	B03	B05
SAT	JULY	2	603	AD	9. 8. 10. 0. 0	4 Ahau	13 Xul	ST	25		
TUE	JUNE	25	605	AD	9. 8. 12. 0. 4	13 Kan	7 Xul	ST	25	C05	D05
MON	MAY	10	613	AD	9. 9. 0. 0. 0	3 Ahau	3 Zotz'	ST	25	D07	C08
WED	AUG	17	614	AD	9. 9. 1. 5. 4	12 Kan	2 Ch'en	HS	07		
THU	MAY	4	615	AD	9. 9. 2. 0. 4	12 Kan	17 Zip	ST	25	D09	C10
FRI	MAY	5	615	AD	9. 9. 2. 0. 5	13 Chicchan	18 Zip	HS	07	P01	P01
SAT	MAR	7	618	AD	9. 9. 4. 16. 2	10 Ik	0 Poop	HS	10		
WED	MAR	19	623	AD	9. 9. 10. 0. 0	2 Ahau	13 Poop	ST	27		
SAT	OCT	2	630	AD	9. 9. 17. 11. 14	13 Ix	12 Zac	HS	13	A'1	B'1
SUN	DEC	25	631	AD	9. 9. 18. 16. 3	7 Akbal	16 Muan	HS	06	M01	N01
FRI	JAN	25	633	AD	9. 10. 0. 0. 0	1 Ahau	8 Kayab	HS	06	N03	N03
FRI	JAN	25	633	AD	9. 10. 0. 0. 0	1 Ahau	8 Kayab	L	01	G01	H01
WED	MAR	2	636	AD	9. 10. 3. 2. 12	2 Eb	0 Poop	HS	10		
WED	NOV	22	637	AD	9. 10. 4. 16. 2	8 Ik	5 Kankin	HS	10	V01	V01
FRI	AUG	31	638	AD	9. 10. 5. 12. 4	4 Kan	2 Yax	HS	10		
SUN	DEC	4	642	AD	9. 10. 10. 0. 0	13 Ahau	18 Kankin	HS	05	I01	I03
WED	MAR	13	830	AD	10. 0. 0. 0. 0	7 Ahau	18 Zip	AL	01	J08	K08

Series II

MON	JAN	20	566	AD	9. 6. 12. 0. 4	4 Kan	7 Pax	ST	03	F11	E12
MON	MAY	8	682	AD	9. 12. 10. 0. 0	9 Ahau	18 Zotz'	ST	18		
MON	AUG	28	682	AD	9. 12. 10. 5. 12	4 Eb	10 Yax	ST	03	C01	D06
MON	AUG	28	682	AD	9. 12. 10. 5. 12	4 Eb	10 Yax	ST	18	E03	F03
MON	AUG	28	682	AD	9. 12. 10. 5. 12	4 Eb	10 Yax	ST	24	B01	B07
MON	AUG	28	682	AD	9. 12. 10. 5. 12	4 Eb	10 Yax	ST	29	F01	G07
THU	AUG	31	682	AD	9. 12. 10. 5. 15	7 Men	13 Yax	ST	29	G18	H01

WED	JAN	4	688	AD	9. 12. 15. 13. 7	9 Manik	0 Kayab	ST	22	E01	E06
WED	JAN	4	688	AD	9. 12. 15. 13. 7	9 Manik	0 Kayab	ST	24	B12	C12
WED	JAN	4	688	AD	9. 12. 15. 13. 7	9 Manik	0 Kayab	ST	29	H07	I07
MON	MAY	29	693	AD	9. 13. 1. 3. 19	5 Cauac	2 Xul	ST	21	C01	
MON	MAY	29	693	AD	9. 13. 1. 3. 19	5 Cauac	2 Xul	ST	22	E09	F09
SUN	JUNE	18	692	AD	9. 13. 1. 4. 19	12 Cauac	2 Yaxkin	ST	22	F12	E13
TUE	SEP	12	693	AD	9. 13. 1. 9. 5	7 Chicchan	8 Zac	ST	22	E15	F15
SUN	DEC	10	693	AD	9. 13. 1. 13. 14	5 Ix	17 Muasn	ST	22	E17	F17
WED	JAN	30	695	AD	9. 13. 2. 16. 10	5 Oc	8 Cumku	ST	22	F20	G01
FRI	MAR	1	695	AD	9. 13. 3. 0. 0	9 Ahau	13 Poop	ST	29	H11	I11
SAT	MAR	28	696	AD	9. 13. 4. 1. 13	12 Ben	1 Zip	ST	22	G06	H06
SAT	MAY	22	697	AD	9. 13. 5. 4. 13	3 Ben	16 Tzec	ST	22	G08	H08
SAT	MAY	21	698	AD	9. 13. 6. 4. 17	3 Caban	15 Tzec	ST	22	G11	H11
MON	SEP	5	698	AD	9. 13. 6. 10. 4	6 Kan	2 Zac	ST	22	H13	G14
MON	APR	17	699	AD	9. 13. 7. 3. 8	9 Lamat	1 Zotz'	ST	05	A01	A02
MON	APR	17	699	AD	9. 13. 7. 3. 8	9 Lamat	1 Zotz'	ST	24	A01	A02
MON	APR	17	699	AD	9. 13. 7. 3. 8	9 Lamat	1 Zotz'	ST	24	D01	E01
FRI	JAN	24	702	AD	9. 13. 10. 0. 0	7 Ahau	3 Cumku	ST	01	F05	E06
FRI	JAN	24	702	AD	9. 13. 10. 0. 0	7 Ahau	3 Cumku	ST	22	A01	A02
FRI	JAN	24	702	AD	9. 13. 10. 0. 0	7 Ahau	3 Cumku	ST	22	G19	H19
FRI	JAN	24	702	AD	9. 13. 10. 0. 0	7 Ahau	3 Cumku	ST	24	E14	D15
MON	MAR	26	706	AD	9. 13. 14. 4. 2	8 Ik	0 Zip	ST	21	A01	A02
SAT	DEC	29	706	AD	9. 13. 15. 0. 0	13 Ahau	18 Pax	ST	21	E09	F09
MON	MAR	21	710	AD	9. 13. 18. 4. 18	8 Etz'nab	16 Uo	ST	23	E01	F08
SUN	JUNE	26	710	AD	9. 13. 18. 9. 15	1 Men	13 Yaxkin	ST	23	F17	E18
MON	APR	10	711	AD	9. 13. 19. 6. 3	3 Akbal	16 Zip	ST	23	G08	H08
SUN	DEC	3	711	AD	9. 14. 0. 0. 0	6 Ahau	13 Muan	ST	23	G17	H17
SUN	DEC	3	711	AD	9. 14. 0. 0. 0	6 Ahau	13 Muan	ST	30	F02	E03
THU	JUNE	20	712	AD	9. 14. 0. 10. 0	11 Ahau	8 Yaxkin	ST	02	E09	D10
WED	JAN	15	713	AD	9. 14. 1. 2. 9	12 Muluc	17 Kayab	ST	02	D15	E15
FRI	FEB	14	713	AD	9. 14. 1. 3. 19	3 Cauac	2 Poop	ST	02	B01	
FRI	FEB	14	713	AD	9. 14. 1. 3. 19	3 Cauac	2 Poop	ST	03	E04	E05
FRI	FEB	14	713	AD	9. 14. 1. 3. 19	3 Cauac	2 Poop	ST	30	E08	F08
TUE	JULY	29	713	AD	9. 14. 1. 12. 4	12 Kan	7 Ch'en	ST	30	F12	E13
THU	AUG	28	713	AD	9. 14. 1. 13. 14	3 Ix	17 Yax	ST	30	G02	H02
TUE	FEB	10	714	AD	9. 14. 2. 4. 0	13 Ahau	3 Uayab	ST	30	L01	L02
FRI	MAR	6	714	AD	9. 14. 2. 5. 4	11 Kan	2 Uo	ST	30	G04	H04
WED	AUG	5	714	AD	9. 14. 2. 12. 16	7 Cib	14 Ch'en	ST	20	A01	A02
TUE	NOV	17	714	AD	9. 14. 3. 0. 0	7 Ahau	18 Kankin	ST	29	H16	I16
TUE	NOV	17	714	AD	9. 14. 3. 0. 0	7 Ahau	18 Kankin	ST	30	A01	A02
TUE	NOV	17	714	AD	9. 14. 3. 0. 0	7 Ahau	18 Kankin	ST	30	C01	D07
TUE	NOV	17	714	AD	9. 14. 3. 0. 0	7 Ahau	18 Kankin	ST	30	H12	G13
TUE	NOV	17	714	AD	9. 14. 3. 0. 0	7 Ahau	18 Kankin	ST	30	L19	L20
SUN	NOV	29	714	AD	9. 14. 3. 0. 12	6 Eb	10 Muan	ST	30	H08	G09
SAT	APR	1	716	AD	9. 14. 4. 7. 1	1 Imix	9 Zip	ST	28	C01	C08

WED	APR	5	716	AD	9. 14. 4. 7. 5	5	Chicchan	13	Zip	ST	28	D13	C14
SUN	JULY	16	716	AD	9. 14. 4. 12. 7	3	Manikn	15	Mol	ST	31	C01	
MON	JULY	17	716	AD	9. 14. 4. 12. 8	4	Lamat	16	Mol	ST	28	F04	E05
SAT	AUG	19	716	AD	9. 14. 4. 14. 1	11	Imix	9	Yax	ST	28	E10	F10
SAT	OCT	14	716	AD	9. 14. 4. 16. 17	2	Caban	5	Mac	ST	28	F14	E15
TUE	OCT	11	721	AD	9. 14. 10. 0. 0	5	Ahau	3	Mac	ST	31	A01	A02
TUE	OCT	11	721	AD	9. 14. 10. 0. 0	5	Ahau	3	Mac	ST	31	I 13	A13
SUN	AUG	16	725	AD	9. 14. 13. 16. 5	6	Chicchan	8	Yax	ST	18	E08	F08
TUE	FEB	9	726	AD	9. 14. 14. 7. 2	1	Ik	0	Poop	ST	18	H04	G05
THU	APR	22	726	AD	9. 14. 14. 10. 14	8	Ix	12	Zotz'	ST	18	H08	G08
WED	SEP	15	726	AD	9. 14. 15. 0. 0	11	Ahau	18	Zac	ST	18	A01	A08
WED	SEP	15	726	AD	9. 14. 15. 0. 0	11	Ahau	18	Zac	ST	18	I 05	J 05
THU	AUG	20	731	AD	9. 15. 0. 0. 0	4	Ahau	13	Yax	ST	41	A01	A02

Series III

SUN	NOV	20	755	AD	9. 16. 4. 10. 18	9	Etz'nab	11	Muan	ST	06	A01	A02
MON	MAR	15	771	AD	9. 17. 0. 2. 12	13	Eb	5	Zip	ST	10	A01	B01
MON	MAR	15	771	AD	9. 17. 0. 2. 12	13	Eb	5	Zip	ST	12	B01	C01
MON	MAR	15	771	AD	9. 17. 0. 2. 12	13	Eb	5	Zip	ST	14		
WED	JUNE	16	776	AD	9. 17. 5. 8. 12	9	Eb	0	Mol	ST	19	C01	C03
SUN	NOV	30	780	AD	9. 17. 10. 0. 0	12	Ahau	8	Pax	ST	13	A01	A02
SUN	NOV	30	780	AD	9. 17. 10. 0. 0	12	Ahau	8	Pax	ST	13	E04	F09
SUN	NOV	30	780	AD	91. 7. 10. 0. 0	12	Ahau	8	Pax	ST	33	A01	A02
SUN	NOV	30	780	AD	9. 17. 10. 0. 0	12	Ahau	8	Pax	ST	36	A01	B01
SUN	NOV	30	780	AD	9. 17. 10. 0. 0	12	Ahau	8	Pax	ST	19	A01	B01
MON	FEB	6	784	AD	9. 17. 13. 4. 3	5	Akbal	11	Poop	ST	14	C01	C09
FRI	AUG	1	786	AD	9. 17. 15. 13. 10	2	Oc	8	Yax	ST	13		
TUE	OCT	9	790	AD	9. 18. 0. 0. 0	11	Ahau	18	Mac	ST	14	A01	A02
TUE	OCT	9	790	AD	9. 18. 0. 0. 0	11	Ahau	18	Mac	ST	14	F12	
TUE	FEB	16	799	AD	9. 18. 8. 8. 12	8	Eb	5	Uo	ST	12	B07	
SAT	FEB	20	799	AD	9. 18. 8. 8. 16	12	Cib	9	Uo	ST	12	B09	
MON	FEB	22	799	AD	9. 18. 8. 8. 18	1	Etz'nab	11	Uo	ST	12	C14	B15
FRI	APR	16	799	AD	9. 18. 8. 11. 11	2	Chuen	4	Tzec	ST	12	D05	
FRI	JULY	16	799	AD	9. 18. 8. 16. 2	2	Ik	15	Ch'en	ST	12	D08	
SUN	SEP	5	799	AD	9. 18. 9. 0. 13	1	Ben	6	Ceh	ST	12	E11	
SUN	SEP	5	799	AD	9. 18. 9. 0. 13	1	Ben	6	Ceh	ST	35	D08	C09
SUN	FEB	27	800	AD	9. 18. 9. 9. 8	7	Lamat	16	Uo	ST	12	D15	E15
WED	MAY	24	800	AD	9. 18. 9. 13. 15	3	Men	3	Yaxkin	ST	12	G03	F04
FRI	JUN	1	800	AD	9. 18. 9. 14. 3	11	Akbal	11	Yaxkin	ST	08	A01	A02
THU	AUG	17	800	AD	9. 18. 10. 0. 0	10	Ahau	8	Zac	ST	12	F12	
THU	AUG	17	800	AD	9. 18. 10. 0. 0	10	Ahau	8	Zac	ST	08	C01	C09
THU	AUG	17	800	AD	9. 18. 10. 0. 0	10	Ahau	8	Zac	ST	35	E09	F09
TUE	OCT	14	803	AD	9. 18. 13. 3. 13	6	Ben	6	Kankin	ST	11	A01	
(WED	NOV	7	807	AD	9. 18. 17. 5. 18	9	Etz'nab	11	Muan	ST	06	A01	A02)
SAT	JUNE	26	810	AD	9. 19. 0. 0. 0	9	Ahau	18	Mol	ST	07	A01	A01

SAT	JUNE	26	810	AD	9.	19.	0.	0.	0	9 Ahau	18 Mol	ST	01	A07	B07
WED	AUG	25	810	AD	9.	19.	0.	3.	0	4 Ahau	18 Zac	ST	07	A04	
WED	AUG	25	810	AD	9.	19.	0.	3.	0	4 Ahau	18 Zac	ST	10	A10	
MON	AUG	12	813	AD	9.	19.	3.	3.	3	8 Akbal	6 Zac	ST	32		
WED	JUNE	25	814	AD	9.	19.	4.	1.	0	13 Ahau	18 Mol	ST	32	O01	P01
THU	JUNE	26	814	AD	9.	19.	4.	1.	1	1 Imix	19 Mol	ST	32	Q03	R03
THU	APR	2	815	AD	9.	19.	4.	15.	1	8 Imix	14 Zotz'	ST	32	Y01	Z01
WED	DEC	9	815	AD	9.	19.	5.	9.	12	12 Eb	5 Kayab	ST	32	A'3	Y04
THU	MAR	5	820	AD	9.	19.	9.	15.	0	13 Ahau	8 Zip	ST	32	X01	U02
MON	MAY	4	820	AD	9.	19.	10.	0.	0	8 Ahau	8 Xul	ST	32	W07	X07
MON	MAY	4	820	AD	9.	19.	10.	0.	0	8 Ahau	8 Xul	ST	32	A'5	

9.12.10.5.12 4Eb 10Yax

St. 24 1

C7 B8 C8 B9 C9 B10 C10

St. 29 2

F8 G8 F9 G9 F10 G10 F11 G11

F12 G12 F13 G13 F14 G14 F15 G15

F16 G16 F17 G17 F18

St. 3

C7

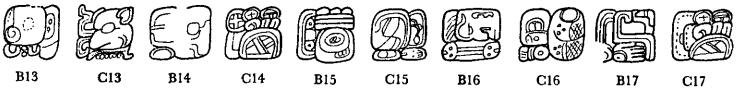
9.12.10.5.15 7Men 13Yax

St. 29 4

I1 H2 I2 H3 I3 H4 I4 H5 I5

9.12.15.13.7 9Manik 0kayab

St. 24 5

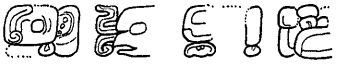


B13 C13 B14 C14 B15 C15 B16 C16 B17 C17

St. 22

F6 E7 F7 E8

St. 29 7



H8 I8 H9 I9

9.13.1.3.19 5Cauac 2Xul

St. 22 8

E10 F10 E11 F11

9.13.1.4.19 12Cauac 2Yaxkin

St. 22 9

F13 E14

9.13.1.9.5 7Chicchan 8Zac

St. 22 10

E16

9.13.1.13.14 5Ix 17Muan

St. 22 11

E18 F18 E19

9.13.2.16.10 5Oc 8Cumku

St. 22 12

H1 G2 H2 G3 H3 G4 H4

9.13.3.0.0 9Ahau 13Poop

St. 29 13

H12 I12 H13 I13 H14

9.13.4.1.13 12Ben 1Zip

St. 22 14

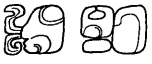
G7

9.13.5.4.13 3Ben 16Zec

St. 22 15

G9 H9

9.13.6.4.17 3Caban 15Zec

St. 22  16

G12 H12

9.13.6.10.4 6Kan 2Zac (?)

St. 22 17

H14 G15 H15 G16 H16 G17 H17

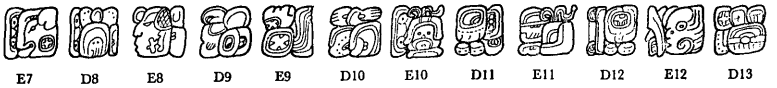
9.13.7.3.8 9Lamat 1Zotz'

St. 24 18

A2b A3 A4 A5 A6 A7 A8 A9

St. 24 19

D2 E2 D3 E3 D4 E4 D5 E5 D6 E6 D7



E7 D8 E8 D9 E9 D10 E10 D11 E11 D12 E12 D13

(9.14.3.0.0 7 Ahau 18Kankin ??)

St. 29 20

B C D

E1 E2 E3 E4 E5 E6 E7 E8 E9 E10

9.13.10.0.0 7Ahau 3Cumku

St. 22 21

A3 A4 A5 A6 A7 A8 A9 B9 C9

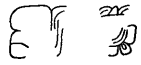
St. 22 22

G20 H20

St. 24 23

E15 D16 E16 D17 E17 D18 E18

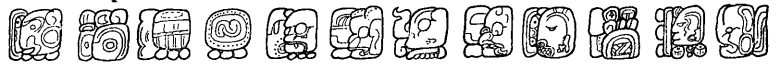
St. 1 24



F6 E7

9.13.14.4.2 8Ik 0Zip

St. 21 25



A3 A4 A5 A6 A7 A8 A9 A10 A11 A12 A13 A14

B11 B12 B13

9.13.15.0.0 13Ahau 18Pax

St. 21 26

E10 F10 E11 F11

9.13.18.4.18 8Etz'nab 16Uo

St. 23 27

E9 F9 E10 F10 E11 F11 E12 F12 E13 F13 E14

F14 E15 F15 E16 F16

9.13.18.9.15 1Men 13Yaxkin

St. 23 28

F18 E19 F19 E20 F20 E21

F22 G1 H1 G2 H2 G3 H3 G4 H4 G5 H5 G6 H6

9.13.19.6.3 3Akbal 16Zip

St. 23

29

G9 H9 G10 H10 G11 H11 G12 H12 G13

H13 G14 H14 G15 H15

9.14.0.0.0 6Ahau 13Muan

St. 23

30

H16 G18 H18 G19 H19 G20 H20 G21 H21 G22 H22

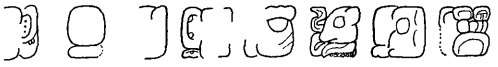
St. 30

31

F3 E4 F4 E5 F5 E6 F6

9.14.0.10.0 11Ahau 8Yaxkin (?)

St. 2



32

E10 D11 E11 D12 E12 D13 E13 D14

9.14.1.2.9 12Muluc 17Kankin (?)

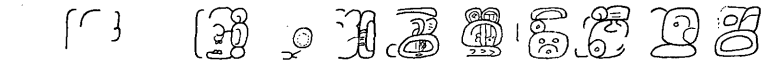
St. 2

33

D16 E16 D17 E17 D18 E18 D19 E19 D20 E20

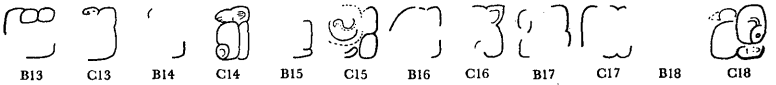
9.14.1.3.19 3Cauac 2Poop

St. 2

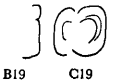


34

C7 B8 C8 B9 C9 B10 C10 B11 C11 B12 C12

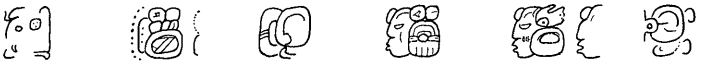


B13 C13 B14 C14 B15 C15 B16 C16 B17 C17 B18 C18



B19 C19

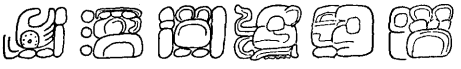
St. 3



35

F5 E6 F6 E7 F7 E8 F8 E9 F9 E10 F10 E11

St. 30



36

E9 F9 E10 F10 E11 F11

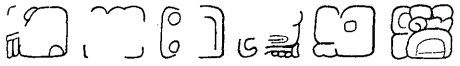
9.14.1.3.19 3Cauac 2Poop (?)

St. 2 37

A1 A2 A3 A4 A5

9.14.1.12.4 12Kan 7Ch'en (?)

St. 30 38



F13 E14 F14 E15 F15 G1

9.14.1.13.14 3Ix 17Yax (?)

St. 30 39

G3

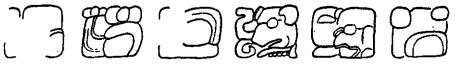
9.14.2.4.0 13Ahau 3Uayab

St. 30 40

L3 L4 L5

9.14. 2.5.4 11Kan 2Uo (?)

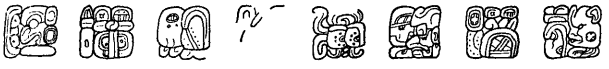
St. 30 41



G5 H5 G6 H6 G7 H7

9.14.2.12.16 7Cib 14Ch'en (?)

St. 20 42



A3 A4 A5 A6 B1 B2 B3 B4

9.14.3.0.0 7Ahau 18Kankin

St. 29 43

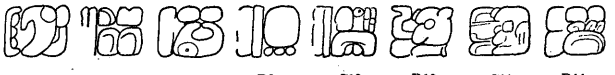
H17 I17 H18 I18

St. 30 44

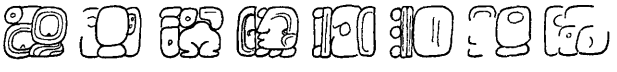
A3 A4 A5 A6 A7 A8 A9 A10

B1 B2 B3 B4 B5 B6

St. 30 45



C8 D8 C9 D9 C10 D10 C11 D11



C12 D12 C13 D13 C14 D14 C15 D15

St. 30 46

H13 G14 H14 G15 H15

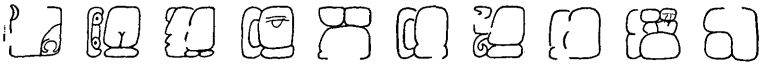
9.14.3.0.12 6Eb 10Muan (?)

St. 30 — 47

H9 G10 H10 G11 H11

9.14.4.7.1 1Imix 9Zip

St. 28 — 48



D8 C9 D9 C10 D10 C11 D11 C12 D12 C13

9.14.4.7.5 5Chicchan 13Zip

St. 28 — 49

D14 C15 D15 E1 F1 E2 F2 E3 F3

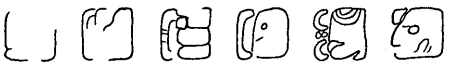
9.14.4.12.8 4Lamat 16Mol

St. 28 — 50

F5 E6 F6 E7 F7 E8 F8 E9

9.14.4.14.1 11Imix 9Yax

St. 28 — 51

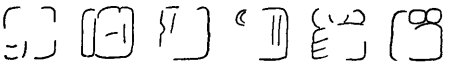


E11 F11 E12 E12 E13 F13

9.14.4.16.17 2Caban 5Mac

St. 28 — 52

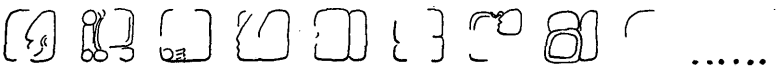
F15 G1 H1 G2 H2 G3 H3 G4 H4



G5 H5 G6 H6 G7 H7

9.14.4.17.10 2Oc 18Mac

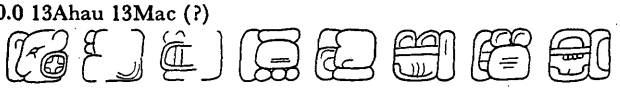
St. 28 — 53



H9 G10 H10 G11 H11 G12 H12 G13 H13 G14.....

9.14.8.0.0 13Ahau 13Mac (?)

St. 28 — 54



A3 A4 A5 A6 A7 A8 A9 A10

B1 B2 B3 B4 B5 B6 B7 B8 B9

9.14.13.16.5 6Chicchan 8Yax

St. 18 — 55

E9 F9 E10 F10 G1 H1 G2 H2 G3 H3

9.14.14.7.2 1Ik 0Poop

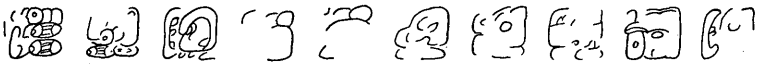
St. 18

H5 G6 H6 G7 H7

56

9.14.14.10.14 8Ik 12Zotz'

St. 18



H9 G10 H10 I1 J1 I2 J2 I3 J3 I4

57

9.14.15.0.0 11Ahau 18Zac

St. 18

B8 A9 B9 C1 D1 C2 D2 C3 D3

C4 D4 C5 D5 C6 D6 C7 D7 C8

D8 C9 D9

58

図17　第 II 期

9.16.4.10.18 9Etz'nab 11Muan
9.18.17.5.18 9Etz'nab 11Muan

St. 6

A3 A4 A5 B1 B2

0

9.17.0.2.12 13Eb 5Zip

St. 12

B2 C2 B3 C3 B4

1

St. 10

A2 B2 A3 B3 A4 B4

2

(9.17.0.2.11 12Chuen 4Zip)

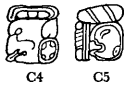
St. 14

F11b E12

3

9.17.5.8.12 9Eb 20Yaxkin

St. 19

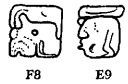


C4 C5

4

9.17.10.0.0 12Ahau 8Pax

St. 13

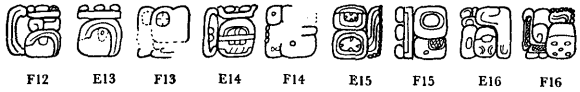


F8 E9

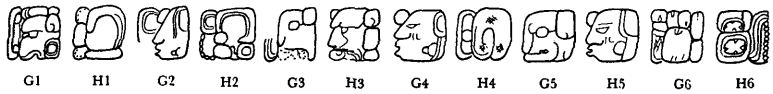
5

E10 F10 E11 F11 E12

6

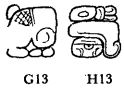


F12 E13 F13 E14 F14 E15 F15 E16 F16



G1 H1 G2 H2 G3 H3 G4 H4 G5 H5 G6 H6

G7 H7 G8 H8 G9 H9 G10 H10 G11 H11 G12 H12



G13 H13

9.17.10.0.0 12Ahau 8Pax

St. 13

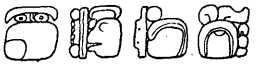
A3 A4 A5 A6 A7 A8 A9 A10 A11 A12

B C

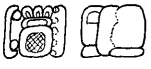
D5 D6 D7 D10 D11 D12

I J K

St. 33 8


A3 B4 B5 B6

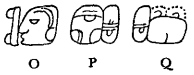
St. 36 9


C D

St. 19 10

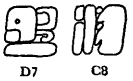
A2 B2 A3 B3 A4 B4 A5 B5

A6 A7 A8 A9 A10

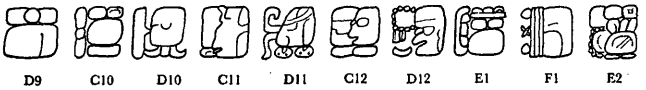

O P Q

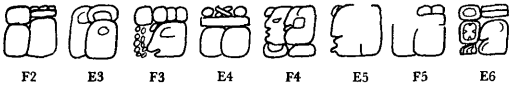
9.17.13.4.3 5Akbal 11Poop

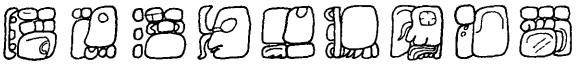
St. 14 11


D7 C8

12


D9 C10 D10 C11 D11 C12 D12 E1 F1 E2


F2 E3 F3 E4 F4 E5 F5 E6


F6 E7 F7 E8 F8 E9 F9 E10 F10

9.17.15.13.10 2Oc 8Yax

St. 13

H15 G16 H16

13

9.18.0.0.0 11Ahau 18Mac

St. 14

A3 A4 A5 A6 A7 A8 B1 B2 B3 B4

14

9.18.8.8.12 8Eb 5Uo

St. 12

C6 C7 B8 C8a

15

9.18.8.8.16 12Cib 9Uo

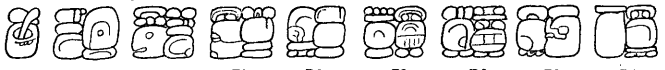
St. 12

C9 B10 C10 B11 C11 B12 C12 B13 C13 B14

16

9.18.8.8.18 1Etz'nab 11Uo

St. 12



B15b C15 D1 E1 D2 E2 D3 E3 D4

17

9.18.8.11.11 2Chuen 4Zec

St. 12

E5 D6 E6 D7

18

9.18.8.16.2 2Ik 15Ch'en

St. 12

E8 D9 E9 D10 E10

19

9.18.9.0.13 1Ben 6Ceh

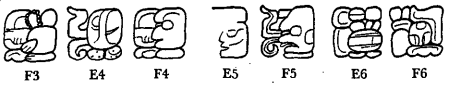
St. 12

D12 E12 D13 E13 D14

20

St. 35

D9 C10 D10 C11 D11 E1 F1 E2 F2 E3

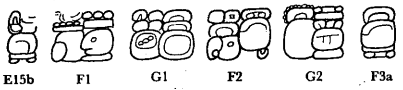


F3 E4 F4 E5 F5 E6 F6

21

9.18.9.9.8 7Lamat 16Uo

St. 12

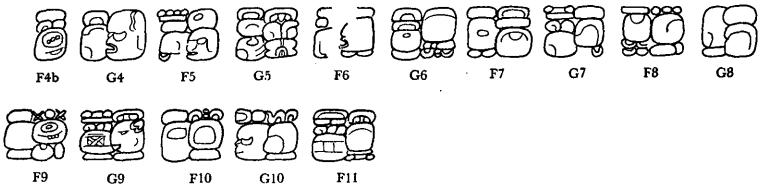


E15b F1 G1 F2 G2 F3a

22

9.18.9.13.15 3Men 3Yaxkin

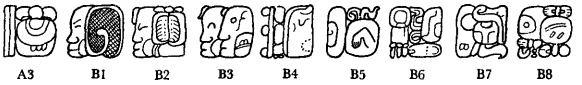
St. 12



23

9.18.9.14.3 11Akbal 11Yaxkin

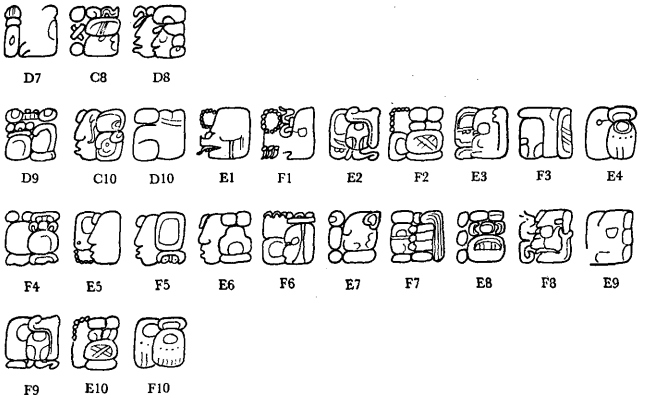
St. 8



24

9.18.10.0.0 10Ahau 8Zac

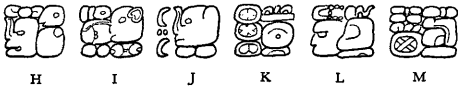
St. 8



25

St. 12

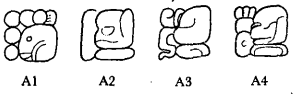
26



27

(9.18.10.0.0 10Ahau 8Zac)

St. 12



28

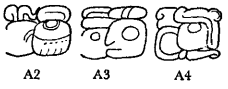
9.18.10.0.0 10Ahau 8Zac

St. 35

29

9.18.13.3.13 6Ben 6Kankin

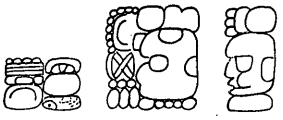
St. 11



30

9.19.0.0.0 9Ahau 18Mol

St. 7



A1cd　A2　A3a

31

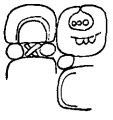
St. 10

A8　B8　A9

32

9.19.0.3.0 4Ahau 18Zac

St. 7



A5

33

St. 10

B10　A11　B11

34

図18　第 Ⅲ 期